やはり俺が花町高専に転校するのは間違っていなかった。

LCRCL（エルマル）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文化祭や修学旅行の件で味方をなくし、家からも捨てられ自殺をしようとしていた比企谷八幡。

しかし死ぬことはなく、助けたのは…

俺ガイルと俺が書いてるオリ小説である桜咲く。のクロスです。

俺ガイルの出来事は1年の時に起きたという設定です。

目次

味方 1
決断 4
そして、転校 7
その頃、総武では… 10
転校生、八幡 13
さとかに隊 16
八幡ｖｓ翔 19
信用するわよ 22
普通（からは程遠い）（非）日常 26
ハプニング（しか）ない訪問① 29
ハプニング（しか）ない訪問② 32
ハプニング（しか）ない訪問③ 35
登校からの特訓 38
激戦？八幡ｖｓルマ 41
地獄を見せる 44
２対２で戦ってみた① 47
２対２で戦ってみた② 50
お泊り会① 52
お泊り会② 55
お泊り会③ 58
お泊り会④ 61
有美「甘いッ！」 64
吹っ切れた 67
一杯食わせるって意味違うよな？ 70

あ、オワタ＼（^ o ^）／ ―― 73
という事で、2学期終了！（どういう事で？） ―― 76
遭遇する数分前 ―― 79
男の娘は、実在する～！ ―― 82
地獄に会う数分前 ―― 85
地獄① ―― 88
地獄② ―― 91
多分普通のクリスマス会① ―― 94
多分普通のクリスマス会② ―― 97
聖なる夜が性なる夜に… ―― 100
ヤバいヤツらの訪問 ―― 103
慣れって怖い ―― 106
手合わせ ―― 109
信頼 ―― 112
極端な飯 ―― 115
一波乱 ―― 118
この世界での遭遇 ―― 121
年の終わり ―― 124
北海道はでっかいどう ―― 127
スキーは好き～？ ―― 130
福岡へ帰ろう ―― 133
始まる3学期 ―― 136
天界へ行くという急展開 ―― 139
アンヘル ―― 142
咲子「ボッコボコにしてあげる♪」 ―― 145

起きる正義 148
今度は八幡が…！ 151
一方的な暴力 154
氷の天使 157
フェイク 160
ノーマン 163
本物か？ 167
やりすぎ 170
ｖｓマリオネ① 173
ｖｓマリオネ② 176
バトルデー！影風ｖｓ魔王① 179
魔王の力！影風ｖｓ魔王② 182
あ、貴女は！ 185
今日？煮干しの日だろ？ 188
対処はできている 191
５校衝突 194
開幕の混戦 197
アホとバカって同じ意味じゃね？ 200
真逆の対決① 203
真逆の対決② 206
咲子ｖｓ風鈴① 209
空中分解 212
再びバカキャラ 215
タッグバトル① 218
タッグバトル② 222

ラスト① 226
ラスト② 230

味方

ｓｉｄｅ比企谷八幡

青春とは嘘であり、悪である。

…あの作文を書いてから６ヶ月ほど経った、１０月の中旬。

俺は修学旅行で自分を犠牲に奉仕部の依頼を解消した。

しかし、その後雪ノ下や由比ヶ浜とは決別してしまい、俺は学校でいじめを受けるようになった。

毎朝、靴箱を見ると…

八幡「……またか」

いつも通りゴミが大量に入っていた。

八幡「よくこりねえよな。こんな事してもただの時間の無駄だと言うのに」

……。

正直、もううんざりだった。

ー数時間後ー

学校も終わり、奉仕部に行かずに帰路につく。

とっとと家に帰ってラノベでも…

ピッ

八幡「メールか…」

妹、小町からだった。

小町『昨日結衣さんから電話が来たんだ。…ホントゴミいちゃんだね』

…は？

まさか由比ヶ浜が小町に修学旅行の事を？

メールの続きを読む。

小町『それをお父さんに話したら、縁を切ることにしたらしいよ！これで一人だね、最低なゴミいちゃん。もう二度と帰って来ないでね。荷物は家に前に置いてるよ』

八幡「なん、だと…!?」

いきなり縁を、切る!?

…もう俺には家すらないのか。
『貴方のやり方、嫌いだわ』
『もっと人の気持ち考えてよ!』
八幡「…ハハッ」
くだらん。
どうせ、俺に味方はいない。
八幡「いっそ死ぬか」
そしたら終わるだろう。
ー数分後ー
ザーッ…
目の前には東京湾。
八幡「来世はいい人生になりますように…」
バシャン。
俺の体は水の中に沈んでいく。
息もだんだん苦しくなってきた。
意識が……
??「なーんてね、死ぬとでも?」
八幡「!?」
俺はそのまま意識を失った。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
八幡「……ハッ」
目が覚める。
…俺は生きてるのか。
八幡「知らない天井だ」
??「そりゃそうでしょ」
女性の声がするから左を向くと、そこには黒髪ショートで赤いパーカーを着ている女性がいた。
??「目が覚めたようね」
八幡「貴女は?」
有美「私は火野有美。アンタは比企谷八幡でしょ?」
八幡「なんで、分かったんですか?」

有美「アンタの荷物を調べさせてもらったわ」
なるほど。
有美「で、アンタ、何故自殺しようとしてたか話しなさい」
八幡「えっ…」
有美「ゆっこりでもいいわ。話しなさい。よっぽどの事がない限り自殺をしようとはしないハズよ」
八幡「っ、分かりました。俺は…」
俺は有美さんに文化祭、修学旅行の事を話した。
有美「……」
八幡「これが俺に起きた出来事です」
有美「……」ナデナデ
八幡「…？」
有美さんは俺の頭を撫でてきた。
有美「良く頑張ったわね、お疲れ様」
八幡「!!」
その言葉は…
有美「アンタに味方がいないのなら、私が味方になるわ。それと、アンタを引き取る」
八幡「こんな目が腐ったヤツの話を信じるんですか…？」
有美「そんな事関係ないわよ。信じるわ」
八幡「ッ…ありがとう、ございます…！」
有美「肩、貸すわよ」
八幡「はい…」
俺はしばらく有美さんの肩で泣くのであった。

決断

♪煮ル果実―紗痲
ｓｉｄｅ比企谷八幡
八幡「スミマセン、服を濡らしてしまって…」
有美「いいわよこれぐらい。…ハッ！」
シュウウウ…
有美さんの服を一瞬で乾いた。
八幡「火属性なんですか…？」
有美「いや、その亜種である桜属性よ」
八幡「桜ですか…」
有美「…で、アンタは何したいの？」
八幡「え？」
有美「学校に戻っていじめられ続けるか、それとも…花町高専に転校するか」
八幡「花町高専!?」
日本にある５つの戦闘高専のうち、福岡にある花町高専!?
有美「こう見えても、私は初代桜なのよ」
八幡「初代…!?」
衝撃の事実。数ヶ月前に３代目に変わったんだっけな？
有美「だから、アンタは火野八幡として転校することになるわね」
八幡「……」
転校か。
総武高校からいなくなっても問題ないしな。だが…
八幡「その前に、ノートってありますか？」
有美「あるけど、何するの？」
八幡「俺がいじめられた証拠を書き記すんですよ。そしてそれをこっそり机に残しておきます」
有美「いい考えね。はい」スッ
八幡「ありがとうございます」
―数分後―

八幡「書き終わりました」
有美「そう。それで、アンタの答えは？」
八幡「…転校します。いじめられるより高専でボコされる方がマシです」
有美「そういう問題じゃないと思うけど。…分かったわ、今すぐ転校手続きをするわよ」
八幡「分かりました」
有美「それと、アンタを引き取るんだから、私の事は母さんと呼びなさい。あとタメ口でいいわよ」
八幡「はい…母さん」
有美「ふふっ、よろしい」

そして数時間かけて書類の手続きを終えた。
有美「八幡、明日から特訓するわよ」
八幡「特訓？」
有美「このまま転校したら間違いなくフルボッコにされるわ」
フルボッコね…
有美「だから、11月に転校するまでアンタを鍛えるわ。覚悟しなさい」
八幡「…分かった」
どんな特訓だろうな…
ー次の日ー
有美「さあ、始めるわよ」
八幡「うっす」
有美「まずは属性ね。説明はいるかしら？」
八幡「俺は風属性だ」
有美「あら、もう知ってたのね。能力は？」
八幡「持ってるのは分かる」
なんせ俺の右手に闇の…いかんいかん。
有美「じゃあ、とりあえず本気で私に攻撃しなさい」
八幡「分かった。ハァァァァッ…！」

両手に力を溜める。そして次第に〝黒い〟風が発生する。
有美「……（あれは恐らく…）」
そしてずっとこっそり使っていた技を放つ。
八幡「ブラックウインドＶ２！」ビュゥゥン！
すでに一度強化されてる技だ。
有美「へえ、中々いい技ね！神炎天桜舞！」ＢＬＯＯＭ！
神ィ!?
俺の技はカンタンに弾かれた。
八幡「マジかよ…」ずーん
有美「安心しなさい、戦闘経験なしのアンタにしては凄すぎるレベルよ」

そして、転校

ｓｉｄｅ比企谷八幡

有美さん……母さんとの特訓を始めて２週間ほどが経ち、俺はかなり鍛えられた。

有美「うん、アンタの実力だったら学年ランクトップ１０確定ね」

母さんはそう言っている。

俺あそんなに強くないと思うがな…

そして、今日は転校、つまり寮に引っ越す日だ。

有美「さて、行くわよ」

八幡「っす」

ー数時間後ー

ここが博多駅か…

八幡「ココにはマッ缶売ってないのか…」

有美「当たり前でしょ」

八幡「クソォ…」

有美「まあ、そこは大丈夫よ。はい、マッ缶」スッ

八幡「おう…さんきゅ、母さん」

有美「お礼はいらないわよ」

そして博多から高専の寮まで歩いていった。

まさか近くにヨドバシがあるとはな。

ー数分後ー

有美「ここが寮ね」

八幡「おお…」

至って普通の部屋だった。

広さも広すぎず狭すぎず丁度いい広さだった。

八幡「ココに住むんだな…」

有美「そうね…あら？」

??「…えっ？」

聞き覚えのある声がした。振り返って見るとそこにいたのは…

陽乃「比企谷くん…？」

雪ノ下の姉、雪ノ下陽乃だった。
有美「あら、知り合い？」
八幡「雪ノ下の姉です」
有美「なるほど」
陽乃「なんで比企谷くんがここにいるの!?」
雪ノ下さんは驚いていた。仮面も付けていない。
まさかこの人がこんなに驚くとは。
八幡「そんなに驚く事ですか？」
陽乃「当たり前だよ！なんでいるの!?」
有美「八幡はココに転校してきたのよ」
陽乃「……」
有美「事情は本人にききなさい」
八幡「…ハァ。話しますよ」
そして俺は雪ノ下さんに話した。
八幡「…以上です」
陽乃「比企谷、いや、火野くん…本当にごめんね…！」
陽乃さんは泣いていた。仮面の面影すらない。
八幡「雪ノ下さんは悪くないですよ」
陽乃「ありがとう…火野くんって優しいんだね」
八幡「全然優しくないですよ」
有美「…仲直りできたようね」
八幡「……」
陽乃「私、もう雪乃ちゃんと連絡取らないよ。優しい火野くんを見捨てたクズだしね」
八幡「すごく言いますね」
陽乃「仮面なんて気にしないからね。…そう言えば、火野くんみたいに私の仮面を一発で見抜いた子が２人いるんだよ」
八幡「へえ…」
結構の難易度だぞ、陽乃さんの仮面を見抜くの。
陽乃「１年１位の桜木咲子ちゃんと、２位の室見メイちゃんだね。ちなみに私は４年の２位だよ、凄いでしょ？」

八幡「それは凄いですね」
陽乃「それと…連絡先交換しない？」
八幡「いいですよ…どうぞ」スッ
スマホを渡す。
陽乃「あ、私がやるんだ。…はい」
八幡「後は…する事ありますか？」
陽乃「ないね。…またね、火野くん♪」
八幡「はい、また」
有美（…仲間ができたわね）

その頃、総武では…

ｓｉｄｅ雪ノ下雪乃

比企谷君が来なくなってから数日経った。
雪乃「あの行方不明谷君は何してるのかしら？」
結衣「連絡もくれないなんて、ヒッキーマジ最低！」
コンコン。
雪乃「…どうぞ」
ガラガラ
平塚「…入るぞ」
雪乃「ご要件は？」
平塚「火野の事だ」
結衣「誰ですか、それ？」
平塚「旧姓比企谷だ」
旧姓？つまり…
雪乃「彼は捨てられたんですね」
平塚「その通り。それを初代桜、火野有美に拾われたそうだ」
雪乃「なっ!?」
初代桜ですって!?
結衣「それでヒッキーはどうなったんですか？」
平塚「花町高専に転校するとの事だ」
花町高専に、ね…
平塚「以上だ。失礼する」
ガラガラ
雪乃「……あんな目が腐った人が花町高専に転校ですって？」
結衣「絶対初代桜も騙してるよね！マジ最低！」
ホント、最低ね。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その声を、奉仕部の外から聞いている人達がいた。
戸塚「今の、聞いた!?」
川崎「聞いた。花町高専に転校するとはね」

材木座「八幡なら以外と丁度いい場所かもしれないな」
葉山「花町高専か。僕も行ってみたいね」
戸部「行ってヒキタニに謝りたいしょ！」
三浦「あたしも賛成だし」
海老名「高専で男と男の…愚腐腐…」
およそ一人腐っているが、八幡を悪く思う人はいなかった。
戸塚「でも、雪ノ下さん達はどうするんだろう…」
川崎「明らかに恨んでそうだもんね…」
材木座「危険人物と考えておくべきだな」

プルルル…ガチャッ。
小町『はーい、小町です』
雪乃「小町聞いて頂戴。クズ谷君は花町高専に転校したわ」
小町『え、あのゴミいちゃんが!?冗談きついですよ雪乃さんｗｗ』
雪乃「いえ、本当よ。初代桜も騙してるみたい」
小町『えっ……まあ、その内騙してるのもバレますよ』
雪乃「そうね。その時私達に土下座して謝罪しようとする光景…楽しみね」
小町『ですね！あのゴミいちゃんに花町高専は似合いませんから！』
雪乃「そうね。それじゃあ切るわ」
ガチャッ。
フフフ…待ってなさい、クズ谷君…

比企谷母「……（止められなかった…八幡、ごめんなさい…）」
ピロン
比企谷母のスマホに、メールが来た。なんと八幡からだった。
八幡『母さん、アンタは何も悪いことしてないから安心しろ。小町と元親父は信用しないが。俺は明日から火野八幡として花町高専に転校する。助けが必要ならいつでも連絡してくれ』
比企谷母「…!!」

彼女は、八幡に充分な愛情を注げなかった事を後悔しながら、僅かな希望を持つのであった。

転校生、八幡

ｓｉｄｅ比企谷八幡

日花「私が担任の坂田日花よ、よろしく」

八幡「よろしくお願います…」

２代目桜が担任とは…

日花「とりあえず呼ぶまでココで待ってなさい」

八幡「…っす」

ガラガラ

日花「みんないるかしら？…いるわね。さて、今日から新しく転校生が来たわ」

「おお、マジか！」

「先生、男子ですか、女子ですか？」

日花「男子よ」

「けっ、つまんねーの」

？「こんな時期に転校生か？」

??「なんでだろうねー？」

中からそんな声がする。

…普通だな。

日花「さて、入ってきなさい」

八幡「はい」ガラガラ…

視線が全てこっちを向く。

…とりあえず自己紹介っと。

八幡「火野八幡です。千葉から来ました。よろしくお願いしましゅ」

噛んだ…！

クソ恥ずかしい…！

と、とっととお辞儀するぞ…

日花「さて、八幡に質問はある？ある人は挙手」

マジかよ、俺を悶死させる気かよ…

「はい！」

「灰！」
??「はい！」
なんか1人発音が違ったような？
日花「じゃあ…〇〇から」
「属性はなんですか？」
八幡「風属性です」
普通に答える。
「兄妹はいますか？」
八幡「ッ……いません」
あの野郎は妹じゃない。
??「（今一瞬動揺したわね…）火野有美さんとどんな関係ですか？」
名字は同じだしな。
八幡「同姓なだけです」
あえて嘘をつく。バラすワケにはいかないからな。
??（…嘘ね。また一瞬動揺したわ）
日花「さて、八幡の席は…あら、丁度咲子の隣ね」
え、何このテンプレな展開。
??（え？なにこの典型的な展開）
…座るか。
咲子「…桜木咲子よ、よろしく」
八幡「…おう」
マジか、隣の席3代目桜かよ…ん？
パサッ
筆箱の中に紙が入っていた。
『どう、驚いた？　有美』
母さんが仕組んだようだな。
八幡「ハァ…」
その後、普通に授業を受けた。
…今日数学無くてマジで良かった。
――
咲子「……」

咲子は八幡を偶に観察していた。
咲子（あの目の腐り方、絶対ひどい過去があったわね…）

八幡「母さん、ココは？」
有美「ふふっ、お楽しみよ♪」
コンコン
…ガチャッ。
咲子「はーい、どちら様です…か…」
有美「ようっ♪」
八幡「…うっす」
桜木は驚いた顔をしている。
ココって倉庫だよな？
咲子「あー、えっと、とりあえず入って下さい」
倉庫の中に入る。
？「おう、誰が来た…って、有美さんと八幡!?」
いきなり名前呼びかよ。

さとかに隊

ｓｉｄｅ比企谷八幡
??「咲子の予想があってたね～」
予想？何のことだ？
有美「ちょっと今日は八幡の事で話があるのよ」
話って、まさか…
八幡「信用できるのか？母さん」
咲子「…え!?母さん!?（親戚とは思ったけど…）」
有美「そうよ。最近引き取ったから義息（？）なのよ」
??「な、なるほど…」
さらっと言っていいのかコレ？
有美「そこで、アンタ達に八幡を任せたいのよ。私はもうアンタ達の４倍ぐらい生きてるから話は合わないだろうし、頼れるのは他にいないからね」
母さんはそう言った。
それ程信用できるヤツらなのか？
??「そこで、私達に頼みに来たと？」
有美「そう。…頼めるかしら？」
咲子「……八幡」
桜木に呼ばれた。
八幡「何だ？」
咲子「アンタの意見を聞かせなさい」
なるほど、母さんが頼むだけじゃ了承しないと。
八幡「…俺は母さんを心配させたくない、それだけだ」
咲子「…ふふっ、分かったわ。アンタをさとかに隊に歓迎するわ！」
ちゃんと歓迎ムードのようだ。…雪ノ下と違って。
というかさとかに隊って何だ？小学生のグループか？
有美「（これなら任せられるわね）…仲良くしなさいよ。じゃ」
シュッ
そして母さんは能力（転送）でココを去った。

咲子「さて、とりあえずみんな自己紹介ね。私は桜木咲子よ」
２回目だな。
翔「西新翔だ」
冷静だな。
絵奈「貝塚絵奈だよ～」
城廻先輩の似てるな。
学「本松学だ」
育也「竹下育也だよ、よろしく」
千早「ここの情報係の七隈千早と…」
千代「…七隈千代よ」
ああ、あのゲーム作った２人か。
凄えな…
メイ「ええと、俺は室見メイです」
まさかのランク２位。
ナオ「私はメイの別人格の室見ナオよ、よろしくね」
別人格!?
祐樹「と、戸畑祐樹だ、うわっ!?」
ルマ「ボクは羽犬塚ルマだよ、ムフ～♪」ギュー
ココにもリア充っているんだな。
八幡「改めて比企谷八幡だ、よろしく」
翔「…なあ、八幡」
西新に話しかけられる。
八幡「何だ西新？」
翔「俺と模擬戦しねーか？」
模擬戦か…
八幡「慎重にお断りする」
翔「何でだ？お前のパワーを測りたいんだよ…」
あ、コイツ戦闘狂だ。
八幡「俺がボコボコにされる未来しか見えん」
てかそれ以外にありえないな。
翔「なるほどな。じゃ…ルマ頼む！」

ルマ「オーケー！ハァッ！」
シュッ
八幡「!?」
突然地面から骨が出てきて、俺はそれに囲まれた。
いやいやサンズかよ!?
ルマ「これでいいかな？」
見事な骨の檻に囚われた。
翔「さて、と。よっ」ガシッ
八幡「何を…」
西新は俺が入ってる檻を担ぐと…
翔「えっほ！えっほ！」スタスタ
そのまま倉庫の外へ運んだ。
俺の意見はどうするの!?
咲子「…八幡、ドンマイ」
そんな事言わないでくれ…

八幡ｖｓ翔

ｓｉｄｅ比企谷八幡

ー裏庭ー

八幡「強制かよ…」

俺に選択権はないのか…

翔「すまんがどうしても力を見てみたいからな」

絵奈「２人とも～頑張れ～」

…やるしかないか。

メイ「模擬戦、始め！」

翔「…オラァ！」ドゴッ！

早速来やがった！

八幡「フッ！」ガシッ！

翔「ほう、止めたか」

八幡「まあな」

ナオ「おお」

祐樹「止めたな」

翔「じゃあ、次はこいつだ。うおおおお…！」パキパキ

コイツ、水属性の氷使いかよ!?

八幡「させねえよ！絶風斬！」ズバッ！

風の斬撃で攻撃を阻止する。

翔「いきなり絶だと!?エターナルブリザードＶ３！」パキッ！

その技名、何処かで聞いたことあるような…

八幡「追撃だ！もう一度絶風斬！」ビュゥウン！

翔「そんなのありかよ！…真冷突！」ドゴッ！

威力はこっちが上のようだ。

翔「グッ、うおっ!?」

…そろそろ能力を使った方が良さそうだな。

翔「やるな、お前」ニヤリ

八幡「…本気で行くぞ」

翔「何…!?」

八幡「くらえ、ブラックウインドＶ２！」ビュゥゥン！
俺の能力、『影』を纏った風で攻撃する。
咲子「…能力!?」
翔「スノーエンジェル！…グワッ！」ビュゥゥン！
…母さんに教えてもらった技を使うか。
八幡「ハァッ…！」グルグル…
咲子「アレは…！（爆熱スクリュー!?）」
八幡「トドメだ。シャドースクリュー！」ドッゴォン！
翔「な…ぐわあああっ！」ドゴォ！
西新に直撃した。
メイ「…模擬戦終了！勝者、八幡さん！」
八幡「…ふう、疲れた」
なんとか勝てたか。
咲子「八幡、アンタ…」
八幡「ん？なんだ桜木」
咲子「…今のはイナイレの技よね!?アンタイナイレファンなの!?」
ユサユサ
桜木は俺の肩を掴んでブンブン（？）揺すってきた。
てか、イナイレ？イナズマイレブンの事だよな？
八幡「いや、違うぞ。それよりも離してくれ」
咲子「あ、ゴ、ゴメン！／／／」サッ
桜木は顔を赤くする。怒ってるのか？
八幡「イナイレの技だとは知らなかった」
咲子「そ、そう…」しゅん
八幡「えっと、その、落ち込むなよ」ポンポン
咲子「ゼ、ゼイル？その…」
…ん？
俺の手は桜木の頭に置かれていた。
…やべ。
八幡「ス、スマン！つい癖でやってた」
元妹によくやってたな。

八幡「その、不愉快だったらスマン…」
咲子「え？いや、そんなに…」
八幡「そ、そうか…」
咲子「……／／／」カァァァ
コイツ、めちゃくちゃ怒ってるな。
ー数時間後ー
桜木達と別れ、一旦寮に戻ってからマッ缶を持って公園に向かった。
八幡「…ん」
公園のベンチには桜木が座っていた。

信用するわよ

ｓｉｄｅ比企谷八幡

桜木に近づく。彼女はこっちに気付いた。

咲子「あら、八幡。どうしたの？」

八幡「隣、いいか？」

咲子「ん、どうぞ」

八幡「ありがとな」スッ

マッ缶を開け、一気飲みする。

うん、美味いな。

ゴクゴク

咲子「……」

八幡「……」

しばらく誰も喋らない無言が続く。

…悪くないな。

咲子「ねぇ、アンタ、質問があるんだけど…」

八幡「なんだ？」

咲子「…アンタ、何でそんな〝目〟をしてるの？」

目？まさかの中二病かコイツ。

八幡「何のことだ？」

咲子「その半分腐ってる目の事よ。何故か私以外気付かなかったわね。余程の事がないとそうはならないわよ？」

気付かれたか。まあ、隠してるつもりはなかったんだが。

八幡「気付いたのか。話してもいいが……気分が悪くなったらすぐに言えよ？決していい話じゃないからな」

嘘だと思われるかもな。

咲子「ええ、知りたいの。話してくれる？」

八幡「…分かった」

そして、桜木に俺の過去を話した。総武高校の事、奉仕部の事、そして…依頼の事とその後の事を。

桜木は悲しそうな顔をしていた。

しかし、俺が母さんの事を話したら、安心したような顔をしていた。
八幡「これがこの目の理由だ。母さんに助けられる前はもっと酷かったぞ」
咲子「……（思ったより酷かったわ。てかあの雪ノ下と由比ヶ浜と八幡の元妹は最低な人達ね）」
八幡「で、お前はどう思う？ただの作り話だと思うのか？」
しかし、桜木は違った。
咲子「…信じるわよ、アンタの目は嘘をついていない」
そう言ってきた。
八幡「……？」
咲子「アンタの過去は最悪だった。……でも、それはもう繰り返される事はないわ。だって…

…今のアンタには、味方がいるから」
八幡「……!!」
咲子「有美さんも、さとかに隊のみんなも、アンタの味方よ。アンタは何も悪くない。裏切る事は絶対にないわ」
八幡「そう、なのか…？」うるっ
クソッ、何で涙が…！
咲子「そうよ。…肩、貸すわよ？」
八幡「……ちょっと、借りるぞ。ううっ…」
俺は桜木の肩で静かに泣いた。

肩の荷が降りた気がした。
咲子「私がアンタを守ってやるわ」
ー数分後ー
八幡「…ありがとな、桜木」
咲子「ええ、どういたしまし……て？」ポカーン
八幡「ん？どうした？」
咲子「いや、あの、その、目が…」
目？
八幡「さらに腐ったのか？」
それは流石に嫌だな。
咲子「いや、その真逆で…めっちゃカッコよくなってるのよ／／／」
…は？
八幡「は？」
心の声がそのまま出た。
咲子「ほら、鏡」スッ
鏡を覗いてみる。そこには俺ではなく黒く澄んだ目をしたそこそこイケメンなヤツがいた。
八幡「…誰だコイツ？」
咲子「…／／／」
桜木は顔をさらに赤くした。コイツ、まさか…
八幡「熱か？」
咲子「…違うわよ！」
八幡「そ、そうか」
咲子「それと、私の事は咲子と呼びなさい」
八幡「いや、無理」
名前呼びとか陽キャかよ。
咲子「無理じゃないわ。文句あるの？」じー
桜g「咲子」…心読むなよ。
八幡「ハァ…分かった。咲子」
咲子「……／／／」プシュー
八幡「？まあいいや。また明日会おうぜ咲子」

スタスタ

普通（からは程遠い）（非）日常

ｓｉｄｅ比企谷八幡

ここに転校して2日ほど経った。

その時西新にマッ缶の話をすると、アイツもマッ缶好きだったらしく、気が合った。

やっぱりマッ缶は最高の飲み物だ。

八幡「ココだよな？」

俺と桜ｇ…咲子はさとかに隊の基地の前にいる。

咲子「そうよ。誰か来てるかしら？」チラッ

咲子は隙間から覗く。

咲子「いるようね。入るわ……よ…」ガチャッ

八幡「…マジかよ」

俺はすぐに目をそらした。何故って？それは…

祐樹「……♪」チュゥ～

ルマ「ん～♪」チュゥ～

…バカップルがディープキスをしている光景だったからだ。

咲子「……」ガチャッ

咲子は無言でドアを閉める。

ゼイル「…なあ、咲子」

咲子「…そうね」

２人「見なかったことにしよう」

ゼイル「コーヒー（珍しくマッ缶ではない）飲むか？」スッ

咲子「ええ、ありがと」

ゴクゴク…

そこに西新達がきた。

翔「おう、お前ら来てたのか。何で中に入らないんだ？」

八幡「…リア充がいる」

絵奈「あ、なるほど（察し）」

翔「もう終わってるんじゃね？」ガチャッ

西新はドアを開ける。しかし、

ガチャッ。
すぐに閉めた。
翔「……」パカッ（コーヒー缶を開ける音）
ゴクゴク…
…つまり終わってないと。
絵奈「終わってなかったね～」
呑気だなお前は。
咲子「うん、帰ろうk「帰らないでくれー！」…ハァ」
ドアが開き、さっきのバカップルが現れた。
ルマ「早く来ると思わなかったんだよ！」
いやいやよそでやれ。
咲子「…次は遠慮しなさい」
祐樹「ぜ、善処する…」
八幡「つまりまたやるという事か」
祐樹「違えよ!?」
翔「…入ろうぜ」
絵奈「あ、はは…」
ー数分後ー
メイ「咲子さん、問題です！キーパーコマンド16は？」
…え、なにそれ？
咲子「えっと…孤月十字掌！」
咲子は知ってるようだ。
俺は何をしてるのかって？
八幡「……」
得意な人間観察だ。
メイ「正解です！そこで俺はそれを少し変えた風斬の強化版、孤月十字斬を作りました！」
咲子「おお、どんな技？」
メイ「十字にクロスさせた飛斬撃ですよ」
咲子「なるほどね…」
それは強そうだな。

コンコン
八幡「俺が出る。はーい」
ガチャッ
陽乃「やあ比企谷くん、来ちゃった♪」
八幡「……」
ガチャッ
今のは見なかった事にしよ「ちょっと、酷くない!?」…ハァ。
陽乃「入っていいかな？」
八幡「ちょっと待って下さい。…咲子、陽乃さんが来たんだが」
咲子「ええ…何しにきたのあの人？」
八幡「知らん」
咲子「…とりあえず入れなさい」
八幡「了解。…入って下さい」
陽乃「失礼するよ♪」
その後、陽乃さんがふざけようとした所を咲子と室見が冷静に止めるのは面白かった。

ハプニング（しか）ない訪問①

ｓｉｄｅ火野八幡

陽乃さんが咲子と室見に止められるという光景を楽しんだ（？）後、俺達はそれぞれ帰った。

ー寮部屋ー

八幡「陽乃さん、仮面がなくなったら案外接しやすいな…」

そんな独り言を言ってると、

ピンポーン

ベルが鳴った。

八幡「はーい…（こんな時間に誰だ？）」

ガチャッ

有美「ハローー！」

咲子「……」

母さんと、咲子？

八幡「…入ってくれ」

有美「もちろん♪」

咲子（ココが八幡の寮部屋…）

ー数秒後ー

八幡「で、何しに来たんだ？」

有美「泊まりに来たのよ」

咲子「わ、私も…」

八幡「…いや何で？」

有美「別にいいでしょ、減るもんじゃないし」

八幡「（使い方が間違ってる気が…）俺の精神がすり減るんだが？」

有美「でもアンタヘタレだし」

グサッ。

咲子「有美さんに誘われたのよ」

八幡「……もういい」

有美「ありがと♪」

この人ホントに６４歳なのか？３０代にしか見えないんだが…

八幡「…晩飯作ってくる」
咲子「あ、手伝うわよ？」
八幡「いや、別に「どうせヒマだし」…分かった」
有美（へえ……）
ジュゥゥゥゥ…
八幡「咲子、そこの「塩？はい」…おう」シャカシャカ
咲子「あ、八幡、そこの「コショウか？ほれ」ありがと」
……さらっと心が読まれてる希ガス。
有美（えっ、ホントに知り合って数日なの？夫婦にしか見えないわね…ふふっ）ニヤニヤ
ー数分後ー
晩飯は至ってシンプルなハムエッグにサラダだった。…朝飯かコレ？
有美「……」ニヤニヤ
八幡「どうした、母さん？」
有美「いや～、面白いわね♪」
咲子「…？」
その後晩飯を食べた。
ー食後ー
晩飯を食べた後、何故か母さんが率先して食器洗いをしていた。
ずっとニヤニヤしてたけどな。…何考えてるんだ？
そして、俺達は今…
咲子「…よし」
八幡「お前、強すぎだろ…」
スマブラをしていた。
コイツ強すぎないか？
咲子「八幡はまだまだね。もっとフレームを重視しないと」
八幡「それ、気にするのはガチ勢ぐらいだぞ…」
咲子「ま、いいじゃない。もう1戦やりましょ」
八幡「いや、もういい。どうせボコされるしな」
咲子「むぅ…じゃあ、面白い事話して」

いや、無理無理。
八幡「……俺のようなヤツがか？」
咲子「…あ、ゴメン」
その悲しそうな目はやめてくれ。
八幡「許す」
咲子「で、このコントローラーどこに〝なおせば〟いいの？」
八幡「なおす？壊れてるのか？」
咲子「あ、博多弁なんだった。どこにしまえばいいの？」
八幡「ああ、そこの棚だ」
咲子「オッケー」スッ
咲子はコントローラーを棚に戻した。
八幡「…なあ咲子、博多弁って他にどんなものがあるんだ？」
咲子「そうね…〝なおす〟は〝しまう〟でしょ？他には…あ、ほうきで〝はく〟は博多弁では〝はわく〟になるわね。他は知らないわね」
八幡「なるほどな」
八幡　は　博多弁の雑学　を覚えた！

ハプニング（しか）ない訪問②

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子にコントローラーをなおしてもらった後、俺はトイレに行った。

八幡「ふう、スッキリした」

部屋に戻ると、咲子はおらず母さんがいた。

八幡「ん、咲子は？」

有美「ちょっとおつかいにね。アンタはもう風呂にでも入ってなさい」

八幡「…分かった」

俺はタオルと服を取って移動した。

……これがかなり典型的なハプニングになることも知らずに。

ー風呂ー

八幡「ん？もう電気ついてるな」

母さんがつけたのか？

八幡「入るか……え？」ガチャッ

咲子「……!?」

風呂には咲子が入っていた。

…もちろん一糸纏わぬ姿で。

咲子と目が合う。

咲子「……出ていきなさい！／／／」

八幡「ス、スマン！／／／」ガチャッ

俺は急いで出た。

絶対母さんが仕込んだなコレ。

ー半時間後ー

八幡「……／／／」

咲子「……／／／」

有美「いや～、見事に引っかかったわね～、ふふっ♪」

八幡「誰のせいだと…」

咲子「…思ってるんですか！／／／」

クソ気まずい空気になってるんだが！
八幡「…で、何でそんな事を？」
有美「何でって？面白そうだったからよ？」
咲子「ええ…」
有美「予想より対応力が凄くて面白かったわ♪」
まあ確かに普通なら数秒間フリーズするだろうが…って関係ないだろ！
八幡「ハァ、もういい…」パカッ
マッ缶を飲んで気を紛らわそう…
ー数分後ー
「ロードローラーだッ！」
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラァ！」
「もう遅い！脱出不可能よ！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ッ！」
俺達はジョジョ３部をＮｅｔ○ｌｉｘで見ていた。
八幡「時間停止ってロマンあるよな…」
咲子「持ってたらなにするの？」
八幡「移動時間の短縮とかか？」
咲子「へぇ…男だからあんな事やこんな事をすると思ったわ」
八幡「俺にそんな欲望をない」
理性の化け物と呼ばれてるんだぞ？
咲子「ま、八幡のことだしそんな事言わないのは知ってたけど」
八幡「地味にディスられてる気が…」
咲子「…さて、次話っと」ポチッ
八幡「……（ま、いいか）」
咲子「ところで、今の所のさとかに隊の印象は？」
八幡「印象か…室見本体は真面目、室見分身は咲子に似てて、西新は戦闘狂、貝塚はマイペース、戸畑と羽犬塚はリア充、本松は口悪いが優しい、竹下は常識人、七隈兄妹は情報集めの天才…と言ったところか？」
てか全員個性的なんだよな。
咲子「……」じー

八幡「どうした？」
咲子「私は？」
自分できくのかよソレ。
八幡（咲子は…可愛い、のか…？」
咲子「うううう…／／／」プシュー
咲子は何故か顔を赤くしていた。
八幡「どうした？顔赤くして」
咲子「私が、可愛い…／／／」カァァァ
声に出してたのか!?
八幡「スマン、つい癖で…」
咲子「べ、別にいいわよ？（むしろ嬉しいし…この気持ちなんだろう…）」

ハプニング（しか）ない訪問③

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「……／／／」カァァァ

八幡「……？」

咲子はずっと顔が赤い。

八幡「マジでどうした？」

咲子「……」ガシッ

咲子に腕を掴まれた。

咲子「……」ポン

そしてそれを咲子の頭に乗せられた。

八幡「…撫でて欲しいのか？」

咲子「……」コクッ

無言でうなずいた。しょうがないな…

八幡「これでいいか？」ナデナデ

咲子「はうあ～／／／」

嬉しそうなのは分かった。

八幡（なんかめっちゃ可愛いんだが…）

咲子「（か、可愛い…）えへへ～／／／」デレデレ

何か顔がもっと赤くなってるような…

咲子「むきゅ～／／／」

いやいや東方紅魔郷の魔女かよ。

ー数分後ー

そろそろ１１時だな。

俺は咲子の頭を撫でながらジョジョを見ていた。

八幡「そろそろ離すぞ」パッ

咲子「えっ？」

八幡「もう１１時だ、寝ようぜ。部屋に案内する」

咲子「いや、えっと、その…」

八幡「何だ？」

咲子「八幡の部屋で寝たい…／／／」

八幡「…ダメだ」
咲子「な、何で？」
八幡「俺、男。お前、女。分かる？」
咲子「アンタは襲って来ないでしょ、ヘタレだし」
グサッ！
八幡　は　咲子　の口撃を受けた！
効果は抜群だ！
八幡「それでもダ「お願い…」…うっ」
上目遣いで頼まれた。
コレを断ったら殺されるぞ…
八幡「ダメじゃない…」
咲子「やった～！」
ホントに嬉しそうだな。
ー八幡の部屋ー
咲子「ココが八幡の部屋…」
八幡「ベットはお前が使え、俺は床で寝るから」
咲子「…えっ？」
八幡「じゃ、おやすm「ダメよそんなこと」…？」
咲子「わ、私と…寝なさい／／／」
…は？
八幡「いやいや、好きでもない奴と一緒に寝るのはダメだろ」
咲子「え？私は…（……大好きだけど／／／）……と、とにかく！一緒に寝なさい！／／／」
八幡「だから…」
ボスッ（ベットに飛び込んだ音）
咲子「ほら、ここ！／／／」ポンポン
ダメだコイツ。どうしようもない。
八幡「……分かったよ」
部屋の電気を消してベットに入る。
八幡「おやすみ」
咲子「おやすみ…／／／」

真横に咲子がいるから寝れん…
咲子「……！」ギュッ！
八幡「!?」
咲子が突然抱きついてきた。
八幡「お、おい!?」
咲子「…しばらくこうさせて」
八幡「いや、その、柔らかい感触が…」
当たってるんだよ！
咲子「別にいいじゃない、楽しみなさいよ」
何言ってんのコイツ!?
八幡「俺の理性がな…」
咲子「無くなったらどうなるの？」
それきくか普通？
八幡「…襲うかもしれないんだぞ？」
咲子「……別にいいけど？」
今なんて!?
八幡「は!?と、とにかく、離れてくれ…」
咲子「むぅ…分かったわよ」パッ
寝れる気がしねえ…

登校からの特訓

ｓｉｄｅ火野八幡

次の日、俺は命の危機に直面していた。

咲子「ムフ～♪」ギュー

八幡「……（やばい、色々当たってる…！）」

ガチャッ

有美「ふぁぁぁぁ…おはよう、はち…ま…ん…」

八幡「母さん、助けてくれ」

マジでコイツが離れん。

咲子「……♪」ギュッ

有美「えっと…咲子？」

咲子「おはようございます、有美さん♪」

有美「（なるほど…）…八幡、がんばれ」ガチャッ

ゼイル「母さん!?」

助けてくれよ！

有美「朝食食べよっと」スタスタ

咲子「ムフー」ギュッ

咲子はまだ抱きついてきている。

そろそろホントにヤバい。

八幡「咲子離せ、遅れるぞ」

咲子「…しょうがないな～」パッ

やっと開放された…

八幡「マジで理性が無くなるところだったぜ」

咲子（…後でもっとやろっと♪）

ー登校中ー

咲子「……♪」

八幡「……」

咲子は機嫌が良さそうだ。

チョンチョン。

八幡「？」

日花「よっ」
いつの間にか坂田先生が後ろにいた。
咲子「あ、日花先生、おはようございます♪」ニコッ
日花「ええ、おはよ。良いことでもあったの？」
咲子「はい、おかげで絶好調です♪」
日花「（なるほど、八幡がね…）…頑張りなさい、じゃ」
咲子「はい、頑張ります♪」
八幡「……？（何をだ？）」
咲子「八幡、何ぼーっとしてるの？行くわよ」
八幡「あ、ああ…」スタスタ
ー朝の特訓ー
咲子「怒りの鉄槌…Ｖ２！」ドゴォ！
翔「進化早くね!?…グハッ！」
咲子「真チャカメカファイアー！」ドガーン！
絵奈「いきなり真!?うわっ！」
咲子「もっとかかってきなさい！」
全員（調子良すぎない!?）
アイツ、何でこんなに調子がいいんだ…？
（完全にお前が原因だよ！）
…まあいいや。
八幡「ブラックウィンドＶ３！」ビュウゥン！
メイ「狐月十字斬！」ズバッ！
俺の攻撃は室見に防がれてしまった。
八幡「威力が足りないな」
メイ「ですね。技の強化に専念するのはどうです？」
八幡「それしかないだろ」
メイ「じゃ、頑張りましょう！」
八幡「おう」
朝の特訓はこんな感じだった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
戸塚「冬休みに八幡に会いに行かない？」

川崎「私は行くよ」
材木座「我もだ」
葉山「花町高専も見てみたいし、俺も行くよ」
三浦「あーしも」
戸部「こうなったら行くしかないっしょ！」
海老名「布教もできる…愚腐腐…」
戸塚「（海老名さんは相変わらずだね）それで、日程は…」
戸塚たちの福岡に行って八幡に謝る計画（仮）はこうして進むのであった。

激戦？八幡ｖｓルマ

ｓｉｄｅ火野八幡
数日前に室見の３つ目の人格が目覚めた。
確か、室見ヤエだったか？椿属性らしい。
まあ、それより…
八幡「まさか俺の最初のランク戦の相手が羽犬塚とはな…」
俺は今日の朝、羽犬塚にランク戦を申し込まれたのだ。
理由は、４位である西新を倒したからだそう。
いやいや、力関係はこんな感じだぞ？
翔）））ルマ）越えられない壁）メイ）咲子
西新と羽犬塚でも結構な差がある。
八幡「…頑張るしかないよな」
やれるだけやってみるか。
スタスタ
千早『出ました！少し前に転校してきた、火野八幡だー！』
千代『どういう戦いを見せてくれるのでしょうか!?』
七隈兄妹が実況をやっている。…アイツら放送部じゃないよな？
ルマ「ボクが八幡を倒すよ！」
八幡「それはどうだろうな」
千早『バトル…スタートォ！』
ルマ「絶ボーンラッシュ！」シュッ！
八幡「絶風斬！」ズバッ！
骨と風の飛斬撃が互いを相殺しあう。
八幡「ブラックウィンドＶ３！」ビュゥゥン！
黒い風が襲いかかる。
ルマ「なら、真ボーンガード！」ピキッ！
黒い風は防がれる。なら…
八幡「オラァ！」ドゴッ
ルマ「えっ？」
八幡「オラオラオラオラオラオラオラオラオラァ！」ドゴドゴドゴッ！

ジョジョのスタープラチナ並のラッシュを骨の盾に叩き込む。
バリィン！
ルマ「嘘ォ!?」
そして骨の盾はそのまま砕けた。
八幡「シャドー…スクリュー!!」ドッゴォン！
ルマ「グハッ…やるね…」
マジか。
八幡「意外としぶといんだな」
俺は倒すつもりで攻撃したのにな。
ルマ「伊達に3位じゃないからね！ヒートタイヤ改！」グルグル
八幡「うおっ!?」サッ
羽犬塚は火のタイヤを作り、その中に入って突進してきた。
ルマ「かーらーのー?…絶ボーンラッシュ！」シュッ！
八幡「（コレは流石にまずい…！）…フッ！」スプッ
影の中に〝潜った〟。
ルマ「えっ!?いない!?」
八幡（どうすればいい、いくらココにいても羽犬塚は倒せない）…
いちかばちか新技を使ってみるか…」
それしかないな。
スプッ
ルマ「あ、いた！」グルグル
八幡「…ハッ！」ドゴッ！
影の玉を作り、前に蹴る。
ルマ「!?」
フワッ
玉は自然と浮上した。俺はそれを蹴り飛ばす。
八幡「ブラックドーン！」ギュゥゥン！
ルマ「真ボーンガードー…うわっ!?」バキッ！
俺が蹴り飛ばした影の塊は骨の盾をカンタンに砕いた。
八幡「…トドメだ！シャドースクリュー！」ドッゴォン！
行けっ！

ルマ「グッ、グワッ…」バタン
羽犬塚は俺の攻撃を受けるとそのまま倒れた。
千早『……勝者、火野八幡！』
千代『なんと！初ランク戦の火野八幡が、ランク3位になった～！』
『うおおおおお！』
「アイツすげーな！」
「かっこよかったぜ！」
八幡「……」
やっぱ女を攻撃するのは嫌だな…

地獄を見せる

ｓｉｄｅ桜木咲子

火野八幡。

まえの高校で酷い仕打ちを受け、転校してきた人。

そして、私の好きな人。

咲子「……」

雪ノ下よ由比ヶ浜だったっけ？

あの２人は相当クズだ。

依頼を八幡に任せておいて、何もしてないのに依頼を解消させた八幡を責める。

咲子「地獄を見せてやりたいわね…」

千早と千代に情報収集を頼もうかしら。

ー数分後ー

千早「なるほど、それで八幡がいじめられていた証拠を探せ、と」

咲子「ええ、頼めるかしら？」

千代「任せて、すぐに集めるわ！」

咲子「…頼んだわよ」

そして２人は情報を集めたあと、雪ノ下と由比ヶ浜のメールに情報と一緒に（八幡にメアドを教えてもらった）『会ったら地獄を見せる』と送っておいた。

ｓｉｄｅ雪ノ下雪乃

結衣「ゆ、ゆきのん…」

雪乃「ありえないわ…」

クズ谷が制裁を受けるのは当然よ。それなのに…

『会ったら地獄を見せる』

桜木咲子さんから直接このメールが私と由比ヶ浜さんに送られてきた。

雪乃「まさか花町高専１年のランク１位まで洗脳するとは、とんだクズね」

結衣「ヒッキーマジキモいよね！死ねばいいのに！」

冬休み彼に会って根本的に潰してやろうかしら？
しかし、火野八幡に会うのは自分の首を絞める事を、雪ノ下と由比ヶ浜は知る由もなかった。
ｓｉｄｅ火野八幡
咲子「……」ブルブル
八幡「大丈夫か、咲子？」
咲子「…大丈夫!!!」ブルブル
大丈夫じゃないよな、震えてるし。
翔（どう見ても強がってるな）
絵奈（バレバレだよ～）
ルマ「咲子、今日はなんの日か知ってる？」
咲子「えっと…あ。テスト返し！」
ルマ「その通り！点数勝負をしようよ！」
咲子「オーケー！中間では勝ったし、今度も勝ってやるわ！」
テストか。
八幡「俺理系科目が無理なんだよ…」
翔「じゃあ教えてやろうか？」
八幡「遠慮しとく」
絶対寝るしな。
???「おっと、待ちなさい！」
眼鏡っ子が乱入してきた。
咲子「あ、アンタは…」
ロジカ「折尾ロジカ（おりおろじか）よ！国語で勝負しなさい！」
咲子「えっと…なんで私？」
ロジカ「いつつも私みたいに百点だからよ！」
なんだよその理屈。
咲子「は、はぁ…」
咲子も半分呆れたような顔をしている。
ロジカ「とにかく、勝負しなさい！」
咲子「え、ええ…」
こうして、咲子はクラスで一番頭がいい（咲子は二番目）折尾と点

数勝負をする事になった。
ー数分後ー
咲子「…よし、勝った!!!」
結果は咲子の勝ち。
２点差でギリギリ勝ったようだ。
ロジカ「負けた…私が…負けた…？」ズーン
折尾は見事なｏｒｚのポーズをとる。
凄いクオリティーだ。
咲子「……ロジカ」
ロジカ「何よ、勝負に勝ったから調子に乗るつもり？」
咲子「違う、私はそんな事しないわよ。……一緒に勉強する？」
ロジカ「……考えておくわ」スタスタ
そしてロジカは去っていった。ツンデレ乙。
咲子「……返事を待ってるわ」
八幡（さっき負かせた相手を助けるとは…咲子は優しいな。可愛いし」
咲子「えっ？／／／」
八幡「ん？どうした？」
咲子「（今声に出てたわよ！）…なんでもないわ」
八幡「……？」
……その後咲子と折尾が仲良く勉強会をしたのは、また別の話。

2対2で戦ってみた①

ｓｉｄｅ火野八幡

俺達は基地という名の倉庫でくつろいでいた。

メイ「咲子さん」

咲子「ん、どうしたのメイ？」

メイ「2対2の模擬戦をやってみませんか？俺とヤエ対咲子さんと八幡さんみたいな感じで」

咲子「いい考えね。八幡、それでいい？」

八幡「おう、いいと思うぞ（面倒くさいが）」

ヤエ「あたしの出番さね」

室見メイの一人称は俺、ナオは私、ヤエはあたし…それぞれ違うんだよな。じゃあ後の2人はあたいと…僕になったりしてな？

ー数分後ー

翔「よし、お前ら、準備できたか？」

4人「オーケー！」

♪ＭＵＬＡストーリー―アルミのテーマ

翔「模擬戦…始めっ！」

メイ「先手必勝！狐月十字斬！」ズバッ！

メイ（見分け付けるために下で呼んでる）が早速飛斬撃を放ってきた。

咲子「当たらないわよ！絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギュルルルル！

それを咲子がエネルギーのドームで受け流す。咲子曰く止める確率は９５％らしい。

八幡「絶風斬！」ズバッ！

俺も攻撃を開始した。

ヤエ「岩なだれ！」ドゴドゴドゴッ！

それ、ポケモンの技だよな？

咲子「絶チャカメカファイアー…」ポイッ

八幡（離れるか）サッ

メイ「ッ、離れ…」
咲子「着火！」ポチッ
その着火の仕方は完全にジョジョのキラークイーンだろ。（実際それを真似してます）
ドガーン！
八幡「結構鬼畜だな」
咲子「そう？」
だって爆発だぞ？ちゅどーんだぞ？
ヤエ「…危なかったな」
メイ「ですね」
八幡「防御されてたか…フッ！」
咲子「ハッ！」ドゴッ！
ギュン…
八幡「ブラックドーン！」ギュゥゥン！
メイ「真晴天飛梅！」ＢＬＯＯＭ！
ヤエ「曇天椿舞！」ＢＬＯＯＭ！
俺の攻撃を通り越して弾幕が飛んできた。
八幡「やべっ」
咲子「させない！怒りの鉄槌Ｖ２！」ドゴォ！
咲子の攻撃で俺に弾幕が当たる事はなかった。
ヤエ「…ガッ！」
八幡「今のは危なかった…」
メイ「…なかなかやりますね。ヤエ、そろそろ本気で行きましょう！」
何処かのバトルマンガかコレ？
ヤエ「ああ、そうだな…！」
咲子「八幡、私達も本気で行くわよ！」
八幡「…うっす」
本気と言ってもな…
ヤエ「岩なだれ…！」ドゴドゴドゴッ！
ヤエは岩をいくつか出す。

メイ「絶ウィンドブラスト！ハァッ！」ビュゥゥゥン！
それをメイが風で発射した。
いやこえーよ！
八幡「考えが斬新だなおい！」
〝斬〟新だけに。
…やかましいわ。
咲子「ハァァァァッ！ムゲン・ザ・ハンドＧ９！」ガシガシガシッ！
咲子は２６０本の腕で飛んでくる岩を止める。
八幡「手の数半端ないな…」
どうやって２６０本だと分かったのかって？
教えてもらったからだ。

2対2で戦ってみた②

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「…八幡、いい考えがあるわ！」

咲子は作戦を俺に伝える。

八幡「上手くいくのか？それ」

半分運ゲーじゃないか？

咲子「ええ、上手くいくはずよ！」

…まあ、（作戦が）ないよりはいいか。

八幡「…やってみるか」

咲子「オーケー、作戦開始！」ダッ！

私はメイとヤエに向かって走っていく。

メイ「接近戦ですか。冥冥斬り改！」ズバッ！

咲子「よっ」ピョン

咲子はジャンプでメイの攻撃をかわす。

メイ「えっ!?」

咲子「…今よ、パス！」

八幡「ああ、オラァ！」ポイッ

俺は壺の形をした影の塊を投げる。

咲子「絶チャカメカファイアー！」すぽっ

咲子はその中にチャカメカファイアーを入れ…

咲子「流星…ブレードッッッ！」バシュッ！

それを思いっきり蹴った。

ギュウン、キラーン、ドガァァァン、シュゥゥゥゥゥゥッ！

影を纏った赤い流星が２人を襲った。

メイ「嘘ですよね!?…うわっ!?」

ヤエ「この…威力は!?…ぐわっ!?」

作戦は成功したようだ。

翔「……勝者、八幡と咲子！」

八幡「…上手く行ったな（てかあの威力は予想してなかったぞ）」

咲子「うん！（八幡と連携技ができた♪）」

メイ「土壇場で新技ですか…」
ヤエ「油断してたね…」
その後も模擬戦を数回戦し、各自帰宅した。

咲子「八幡、Ｍｕｌａのものおきばって知ってる?」
八幡「知らん」
咲子「コレよ」
咲子が見せてきたのはうごメモの動画だった。
八幡「あー、なんか見たことはある」
咲子「うごメモのアニメ(?)なんだけど、面白い上にクオリティーが結構いいのよね〜」
八幡「そうなのか?」
咲子「うん、だから少し見てみるのをおすすめするわよ」
八幡「…分かった、ヒマがあったら見てみる」
その後Ｍｕｌａのものおきばの動画を少し見てみた。
素直な感想は…
八幡「意外と面白いな」
だったとさ。

メイ「出ました!爆熱ストーム!」
俺は室見とイナイレ鑑賞をしていた。
何故してるのかって?誘われたからだ。
八幡(…咲子といい室見といい、何でイナイレにハマったのか分からん)
性格的にな。
八幡「…室見、どうやってイナイレにハマったんだ?」
メイ「テレビをつけた時初めて観たんですけど、技と技のぶつかり合いが好きになったからです!」
八幡「なるほどな」
確かにイナイレは技のぶつかり合いが面白い部分がある。
そして俺達はイナイレ鑑賞を続けた。

お泊り会①

ｓｉｄｅ火野八幡

今日は毎週恒例のお泊り会らしい。

咲子「ゆ、指が…」

八幡「流石にあの曲弾いたらお前でもそうなる」

咲子がさっきまで弾いていたのは、「ＲＵＳＨ　Ｅ」という人間が弾くのは不可能な曲だ。

…それを咲子がムゲン・ザ・ハンドの手も使って弾ききったのである。

翔「冷やしてやるよ、休んどけ」

咲子「ありがと、ふぅ…」

ー数分後ー

現在６人でアモングアスをやっている。

咲子「私は食堂にいたわよ」

八幡「俺もだ」

メイ「俺はエンジンですね」

学「俺は翔と医療室にいた」

絵奈「私は電気だよ～」

翔「学と医療室にいた」

６人『……スキップで』

…本松が焦ってたな。

ー数分後ー

テンテンテン、テン♪

咲子「誰か死んだの!?」

翔「絵奈だな」

絵奈「……」チーン

貝塚は死んだふりをしている。顔が笑ってるが。

メイ「遺体は廊下にありました」

八幡「……」じー

学「八幡、何で黙ってんだ？」

八幡「本松がベントしたのを目撃した」
学「な…!?（何故バレた!?こっそりやったのに!?）」汗汗
咲子「…黒ね」ポチッ
学　ｗａｓ　ｔｈｅ　ｉｍｐｏｓｔｅｒ．
結果はクルーメイトの勝利。
八幡「よし」
咲子「凄いわね」
八幡「大したことはしてないぞ」
学「くっそー！」
翔「学はポーカーフェイスを覚えろ」
学「お、おう…」
絵奈「もう一戦やる～？」
咲子「いや、そろそろ夕食タイムね。今週の料理当番は私だわ」
咲子は立ち上がる。
そういえば、戸畑と羽犬塚が見当たらないが、戸畑の家でイチャイチャしてるんだろ。
咲子「じゃ、行ってくるわ」スタスタ
そして咲子は料理しにいった。
翔「なあ、八幡」
八幡「…何だ？」
絵奈「八幡って～、好きな人いるの～？」
好きな人、か。
八幡「分からん」
翔「ほう…」
絵奈「へ～」
じー
八幡「どうした？」
翔「いや、てっきり咲子だと思ってな」
絵奈「あんな雰囲気出してるのにね～」
八幡「どんな雰囲気だよ!?」
翔「カンタンに言うと、砂糖吐きたくなるようなヤツだな」

八幡「はぁ…？」
俺が？そんな雰囲気出してんの？
八幡「うそ～？」
絵奈「ホント～！」
八幡「マジかよ…」
翔「マジだ」
八幡「咲子の事は…恩人と思ってるだけだがな…」
絵奈「恩人～？」
八幡「俺の事を信じてくれたからな」
翔「なるほどな…」
ガチャッ
ルマ「みんな、夕食ができたよ！」
翔「おっ、行こうぜ！」ダッ
ー数分後ー
カルボナーラか。美味そうだな。
翔「んめーなコレ！」
絵奈「美味しいね～♪」
咲子（八幡はどう思うのかしら？）
八幡（めちゃくちゃ美味いな。咲子はいいお嫁さんになる」
いつの間にか口に出していた。

お泊り会②

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「はうあ～／／／」プシュー

八幡「……あ」

やべ、声に出してた!?

マジでハズい…

八幡「スマン…」

咲子「お、およｍｍｍｍｍｍｍｍｍｍ（バグった）」

しばらく正気には戻らなそうだ。

学「…コーヒー取ってくる」

育也「あはは…」

千早「……甘いな」

千代「……甘いわね」

八幡「何がだ？」

２人『気付け』

八幡「……？」

ルマ「あーん♪」

祐樹「……ん」パクッ

お前らは気にしないよな。

咲子「ハッ！」

八幡「さっきのは忘れてくれ」

咲子「えっと…」

咲子はこっちを見る。

咲子「はうあ～／／／」テレテレ

しかしまた照れはじめた。

八幡「ダメだこりゃ」

翔「…八幡」

八幡「何だ？」

翔「気付け」

八幡「お、おう…」

七隈からも言われたな。
……。
気付きたくないんだよ…
ー数分後ー
その後普通にカルボナーラを食べた。
今は…
『Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…』
面白動画で笑ってはいけないをやっている。
翔「再生するぞ…」
早速出落ちネタが炸裂する。
学「…んぐ」
祐樹「ブハッ、はははは！」
育也「ははは っ！」
八幡「……よし」
室見達は…
『ゴォォットォォォ…キャッチ！』
メイ「出ました、ゴットキャッチＧ３！」
ルマ「おお…」
…イナイレアニメの鑑賞をしていた。
てか羽犬塚に布教してるんだろう。
咲子「私も見る！」
メイ「どうぞ」
俺達はそれぞれ楽しむのであった。
ー２時間後ー
咲子「あ、もう８時ね」
翔「そっか。じゃあそろそろ…部　屋　割　り　の　時　間　だ！」
俺達は毎週倉庫の地下室を寝室代わりに使っている。部屋は５つあるため、１人ここで寝ることになる。俺はボッチだから毎回ここを選ぶ。
八幡「今回はどうやって決めるんだ？」

翔「そうだな…よし、今回はババ抜きで決めるぞ！先に上がったヤツが部屋を決めることにするぜ！」
絵奈「いいね～！やろうやろう～！」
ー数分後ー
無　言　バ　バ　抜　き　、　ス　タ　ー　ト　！
咲子「……」スッ
メイ「……」スッ、パサッ
八幡「……」スッ、パサッ
翔「……」スッ
祐樹「……」スッ、ズーン
…祐樹がジョーカー持ってるな。
顔でバレバレだ。
ルマ「……」スッ、パサッ
学「……」スッ
育也「……」スッ、パサッ
千早「……」スッ
千代「……」スッ
無言でやったら表情を読みやすいな。
咲子「……」スッ、パサッ
…咲子は1枚残っている。
メイ「……」スッ
よし、揃った。
八幡「……上がりだ」スッ、パサッ
翔「どっちの部屋にするんだ？」
今回は場所を変えてみるか。
八幡「…1番奥の部屋で」
翔「オーケー…」スッ、パサッ
八幡「じゃあな」スタスタ
俺は地下室に荷物を置きに行った。

お泊り会③

ｓｉｄｅ火野八幡

部屋で荷物を置き、布団に寝転がってると、ドアが開いた。

八幡「咲子か」

咲子「私もこの部屋にしたわ」

だろうな。

咲子「…ねぇ八幡」

八幡「なんだ？」

咲子「その…好きな人とか…いたりするの…？」カァァァ

八幡「ッ……なんでその質問を？」

咲子「…質問を質問で返さないでくれる？」

八幡「どこの吉良吉影だよ…」

咲子「……」じー

八幡「…多分、いるぞ」

咲子「誰なの!?」

八幡「…秘密だ（正直まだ分からないんだよな…）」

今目の前にいるヤツなんだが…

咲子「ブーブー、ケチ」

八幡「…その内分かるだろ、知らんけど」

咲子「…そう」

その後しばらく雑談するのであった。

ー数分後ー

八幡「そろそろ風呂入ってくる」

咲子「ええ、行ってらっしゃい」

タオルと服を取り、部屋を出た。

ー誰得な入浴シーンはカット！ー

ガチャッ

咲子「…おかえり、八幡」

八幡「おう、風呂空いてるぞ」

咲子「そう？じゃあ行ってくるわね」

ガチャッ
ー5．２９５６２分後ー
八幡「……ヒマだな」
ラノベでも読むか。バックの中にあるし。
ガッ
八幡「うおっ!?」
ドサッ
バランスを崩し、咲子の布団に転んでしまった。
いい匂いだな…って
八幡「とっとと離れ「ガチャッ」…あ、やべ」
咲子「ただい…ま…」
咲子から見たら俺は咲子の布団にうつ伏せになっているだろう。
咲子「な…な…!?」
…離れるか。
サッ
八幡「これは、その、な…」
咲子「……私の布団の匂いを嗅いでた、と」
何故そうなる!?
八幡「ご、誤解だ、転んじまっただけだ！」あたふた
咲子「……ホントに？」
八幡「ホントだ」
咲子「…分かったわ」
納得してない顔なんだが…
八幡「おう…（とりあえず社会的抹殺は免れ）「えいっ！」うおっ!?」
ボスッ
咲子に突然押され、布団に倒れる。
咲子「……／／／」ギュッ
八幡「お、おい、咲子!?」
しかも思いっきり抱きつかれた。
むにゅっ。
柔らかいものが当たってるんですが!?

咲子「ねぇ八幡」
八幡「…なんだ」
咲子「……好きな人に抱きつかれたら、どんな気持ちになるの？」
八幡「…嬉しいんじゃないのか？」
てか何故その質問？
咲子「ふーん…じゃあ、好きな人に抱きついたら、どう思う？」
八幡「…質問の意図が分からんぞ」
咲子「…分からないの？ホントに？」じー
八幡「俺が抱きついたら？でも抱きついてるのは咲子だろ…ってまさか!?（ちょっと待て、ありえない…！）」
俺が焦ってるのをよそに、咲子は…
咲子「やっと気付いた？

…好きなのよ、貴方の事が」
俺に告白してきた。
八幡「……」

お泊り会④

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「好きなのよ、貴方のことが」

その言葉が、俺の脳内に響く。

八幡「……」

咲子は一旦俺から離れる。

咲子「いつ好きになったのかは分からない。…でも、貴方と一緒にいて、私は次第に好きになった。…火野八幡…君、私、桜木咲子と…付き合って下さい」

そして改めて告白をされた。

…ハハッ。

八幡「俺はやっぱり逃げてたんだな、この気持ちから」

咲子「……！」

八幡「俺の過去を話した時、嘘だと言って信じてもらえないと思ってた。…だが、お前は俺を信じ、慰めてくれた。おかげで目の腐りも取れたし、肩の荷が降りたんだ。…だから、ここではっきりと言う。…俺と…付き合って下さい」

その言葉は自然と口から出た。

咲子「八幡…」

八幡「咲子…」

息を吸う。

２人『よろしくな（よろしくね）』

同じ言葉を同時に言った。

咲子「…ふふっ」

八幡「…ははっ」

咲子「これで私達は恋人同士なのよね？」

八幡「ああ、そうだな」ニコッ

咲子「…ふふっ♪」ギュッ

八幡「おっと」ダキッ

咲子は抱きつき、俺は私を抱きとめた。

…暖かいな。
咲子「八幡、今夜は一緒に寝よ？」
八幡「…もちろんだ」
俺達は幸せな気持ちに包まれながら一緒に寝るのであった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ガチャッ
翔「おーい咲子、八幡、ゲームしよ…マジか」
絵奈「そうしたの～？……おお～」
メイ「はわわわ…／／／」
学「…コーヒー飲んでくる」スタスタ
育也「幸せそうだね…」
千早「…ごちそうさまでした」
２人に対する反応は人それぞれだった。
千代「……」パシャッ
千代はすかさず写真を撮る。
全員「…ナイス！」
翔「明日の朝この写真であいつらに質問攻めをしようぜ」
絵奈「いいね～」
スタスタ
咲子「……♪」スヤスヤ
八幡「……♪」スヤスヤ
２人がそれに気付くことはなかった…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー次の日ー
チュンチュン…
八幡「ん……」ムクッ
咲子「……」ギュッ
コイツ、起きてるな。
八幡「…起きてるだろ？」
咲子「…うん、おはよう」
八幡「おはよう」

咲子「しばらくこうさせて？」
八幡「いいぞ」
ー数分後ー
咲子「…もういいわよ」
八幡「そうか。…朝飯食いにいくか？」
咲子「…そうしましょっか」
俺達は荷物を整理した後、移動した。
ー祐樹の家、ダイニングルームー
２人「……」
今日の朝食は……赤飯だった。
翔「…昨日はお楽しみだったか？」
絵奈「くっつくの遅かったね～♪」
咲子「な…な…!?」
八幡「…いつバレた!?」
学「バレバレだぞ」
育也「抱きあってたしね」
つまり、部屋に入ってきたのか…
メイ「だから、今日は赤飯です！」
咲子「……はうあ～／／／」プシュ～
八幡「咲子!?」
咲子は昨日の告白と今起きた出来事に耐えられず、オーバーヒートするのであった。
俺もめちゃくちゃ恥ずかしいんだが。

有美「甘いッ！」

ｓｉｄｅ火野八幡
八幡「……」ズーン
有美「ふふっ♪」
お泊り会が終わった後、家に帰ると母さんがいた。
そして俺は質問攻めにあったのである。
ピンポーン
有美「はーい」
ガチャッ
有美「あ、咲子。聞きたい事があるから入って」
咲子「（…もうバレたのかしら？）…失礼します」
スタスタ
八幡「……咲子」ズーン
咲子「大丈夫？」
八幡「大丈夫…じゃねえ…帰って早々質問攻めにあった」
咲子「だからそんな顔してるのね…」クルッ
有美「……」じー
振り向くと母さんが観察してるような目で俺達を見ていた
咲子「…ど、どうしたんですか有美さん？」
有美「咲子…アンタが先に告白したのはホントなの～？」じー
咲子「そ、そうですけど…」
有美「そうなのね…ふふっ♪」ニヤニヤ
咲子「有美さん…？」
有美「……咲子」ズンッ
母さんは咲子に顔を近づける。
咲子「な、なんですか？近いです…」
戸惑う咲子。しかし母さんは…
有美「私の事、お義母さんと呼んでもいいのよ♪」ニコッ
とんでもない爆弾発言をした。
咲子「……ふぇ!?／／／」カァァァ

八幡「母さん、何言ってんだ!?」
咲子「／／／」
有美「あー、今は答えなくてもいいわよ」
八幡「それは流石に早すぎだろ…」
てかもう恥ずか死にそうだ…
有美「むぅ、分かったわよ。咲子、八幡をよろしくね～」スタスタ
母さんはそう言って部屋を去った。
咲子「…なんか有美さんの威圧が凄かった」
八幡「そうか？」
咲子「…まあいいわ。……んっ」
チュッ
咲子にいきなりキスされた。しかも唇に。
八幡「んむっ!?……ぷはっ…な、ななな何すんだいきなり!?」
咲子「何って？…ファーストキスよ／／／」
八幡「そ、それを何故今？」
咲子「……甘え足りないのよ」
八幡「ゑ？」
甘え足りない？何だそれ？はちまんわかんない。
咲子「だーかーらー！目の前に八幡がいるのに何もシてないから我慢できないの！」
八幡「〝してない〟の発音が違う気が…うおっ」ボスッ
俺はソファーに押し倒される。
咲子「…ッ／／／…ん～！」ギュゥゥゥ
そして咲子が顔を赤くしながら前から抱きしめてきた。
はっきりと言って可愛い。
八幡「……はぁ」ナデナデ
そんな咲子の頭を俺が撫でるのであった。
ｓｉｄｅ火野有美
モワモワ～（甘々オーラ）
私は八幡達をこっそり見ていたけど…
有美「…甘すぎるわね」

前咲子が来た時も甘かったけど、流石にこれはやばいよ!?付き合い始めたの昨日だよね!?（雰囲気の）加減がないにもほどがあるでしょ!?

有美「八幡が付き合うのは保護者として嬉しいけど…ね…」

やばい、コーヒー飲まないと…

有美「あった…」

パカッ、ゴクッ

私は黄色と黒の・・・・・缶コーヒーを開け、一口飲m…

有美「…って、これマッ缶じゃん!?」

苦いものが飲みたかったんですけど!?

チラッ

咲子「～～～～～♪」ギュッ

ゼイル「……♪」ナデナデ

…お2人さん、

有美「ごちそうさまでした…というのかしら?」

コーヒー買ってこよ…

吹っ切れた

♪ＭＵＬＡストーリー―Ａｒｕｍｉ　ｉｓ　ｈｅｒｅ．
ｓｉｄｅ火野八幡
ー咲子宅の前ー
俺はついに、咲子の家に来た。いや…
八幡「……来てしまった」
咲子「…幸い今日父さんはいないから大じょ…ばないわね、母さんがいるし」
八幡「……押すぞ？」
ピンポーン！
…ガチャッ。
春菜「咲子、おかえり…あら？」
咲子母が早速出できた。
八幡「…どうも、火野八幡です」
春菜「…そう、アンタが、ね～…」じー
咲子母は俺をじっと見つめてくる。
咲子「…母さん？」
春菜「なるほど、彼がアンタの彼氏さんね～♪」
もうバレたのか。
咲子「な、な…なんで分かったの!?／／／」
八幡「……咲子、誘導尋問に引っかかってるぞ」
咲子「…ハッ!?」
春菜「……色々聞きたい事ができたわね。入りなさい」
咲子「うううう…／／／」
八幡「し、失礼します…」
覚悟を決めないとな…
ーリビングー
春菜「…で？経緯を教えてちょうだい」
咲子「…ホントに言わなきゃいけないの？」
春菜「そりゃ、娘が変な人と付き合ってないか確認しなきゃ…ね～

？」
咲子「うっ…」
…よし。
八幡「…咲子、覚悟を決めろ」
咲子「ゑ？」
俺は無表情になり、話し始めた。
八幡「俺は11月に千葉から転校してきました。その前は…壮絶な過去でした。火野有美さんに助けられ、引き取られました」
咲子母は納得したような顔をする。
春菜「…なるほど、だから火野なのね。…続けて」
八幡「それで、転校したその日の放課後、俺は咲子率いるさとかに隊に会いました。みんな良い人たちでした。…その夜、マッ缶…あ、マックスコーヒーです、をベンチに座って飲もうとしてました。その時に、咲子が先にベンチに座ってたので、隣に座る許可をもらってから座りました。咲子は俺の過去について聞いてきました。何故俺の目が腐っているのか、と。俺は驚きました、まさか会って1日も経ってない人に気付かれるとは、と。俺は全て話しました。…正直、嘘だと思われるだろうと思ってました。しかし、咲子は俺を信じてくれました……」
俺は時間をかけて、事細かに説明した。
八幡「…すると突然咲子が後ろから抱きついてきました」
もちろん恥ずかしい部分も。
咲子「ちょっ!?」
春菜「ふーん…」
…咲子は公開処刑にあっている気分だろう。
咲子「……／／／」カァァァ
八幡「咲子はしばらくこうさせて、と言ってきました」
咲子（やめて！もう咲子のＨＰはゼロよ！）
春菜「あら～大胆ね～♪」
咲子「うううう～／／／」
ー数分後ー

八幡「…以上が付き合い始めた経緯です」
ふぅ、疲れた。
春菜「なるほどね…」
咲子「…はうあ～／／／／」プシュ～
咲子は顔が真っ赤になっていた。
八幡「…大丈夫か、咲子」
咲子「うう…八幡～」ギュッ
咲子は涙目で抱きついてくる。
八幡「安心しろ、俺も超恥ずかしいから」ナデナデ
咲子「じゃあなんで話したのよ」
八幡「…話してと言われたからな、仕方ないだろ？」ナデナデ
春菜「あらあら、お似合いね～」
俺はしばらく咲子を慰めるのであった。

一杯食わせるって意味違うよな？

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子と付き合い始めてから数週間が経つ。

それまでは咲子と買い物に行ったり、咲子と一緒に食べたり、咲子と…

あれ？咲子ばっかりだな。まあいいか。

そして、今は１２月。千葉よりは暖かいが寒いのは変わらん。

咲子「寒い～」ギュッ

八幡「…咲子、ここは教室だが？」

咲子「別にいいじゃ～ん…」ギュー

「アイツらまたやってるぜ」

「…このリア充がッ！」

咲子が教室なのにも関わらず俺に抱きついて離れない。

八幡「…助けてくれ、西ｊ「スマン無理だ。コーヒー買ってくる」じゃあ貝ｄ「私も買ってくる～」…だれかー」

咲子「別にいいじゃん、減るもんじゃないし」

八幡「俺の理性がすり減る！あと時と場所を考えろ！」

咲子「むぅ…分かったわよ」パッ

八幡「はぁ…」

咲子「八幡、大丈夫？」

八幡「誰のせいだと思ってんだ…」

咲子「うーん…」

咲子は少し考える。

咲子「……分からないわね、誰なの？」

キョトンとするなよ。

八幡「（可愛いのはいいけど遠慮がないんだよな…）…席につこうぜ」

咲子「？うん…」

ー数時間後ー

咲子と室見がランク戦をし、咲子が勝った。

八幡「凄い戦いだったぞ、咲子」
咲子「ふふっ、ありがと♪」
メイ「…咲子さん」
室見が来た。
咲子「ん、どうしたの？」
メイ「放課後、絶対に一杯食わせてやります！八幡さんも来て下さい！」
咲子「へぇ…いいわよ」
八幡「…？」
言い方が若干違う気が…
ー放課後ー
八幡「…で、何処行くんだ？」
メイ「ついてきてください」
スタスタ
咲子「…メイ、一杯食わせてやるとか言ってなかった？」
メイ「言ってましたね。まさにそれをしようとしてるんですが？」
咲子「……？」
マジで何処行くんだ？
ー数分後ー
俺達はとある建物の前に来た。
『イーティングニコル』
…何か聞き覚えがあるな。
メイ「入りましょう」スタスタ
八幡「なあ咲子、これって…」
咲子「何する気かしら？」
疑問に思いながらも、俺達は店の中に入っていった。
???「あ、いらっしゃいませ。3名様ですか？」
メイ「はい」
???「こちらの席にどうぞ」
咲子「……メイ、まさか一杯食わせるのはおごるってこと？」
メイ「ずっとそのことを言ってましたけど？」

八幡「意味間違ってないか？」
メイ「…あー、いや、私が放課後また戦いを申し込むワケないじゃないですか」
…言われてみればそうだな。
咲子「確かにそうね」
八幡「…オーダーするか」
その後オーダーし、雑談しながら一杯食べた。めちゃくちゃ美味かったとだけ行っておこう。

雪乃「フフフ、もうすぐね…」
結衣「やっとヒッキーに罰が与えられるね…」
小町「あのゴミ、さっさと駆除したいです…」

あ、オワタ＼（＾ｏ＾）／

ｓｉｄｅ火野八幡

今日、咲子が部屋に来ていた。てか今日泊まる予定だ。

咲子「……♪」ゴロゴロ

八幡「で、なんで俺のベットでゴロゴロしてんだ？」

咲子「いい匂いがするから♪」

予想通りだな。

八幡「へぇ…」

咲子「むぅ、なにその反応？」

八幡「あまり興味が無いからな」

咲子「ふーん…あ、そうだ！」

咲子はいい事を思いついたような顔をする。

八幡「どした？」

咲子「八幡…エロ本隠したりしてないよね？」

…は？

八幡「……何いってんだ、咲子？」

咲子「（ほほう、今間があったわね）探していいかしら？」

八幡「どうぞご自由に」

…ま、大丈夫だろ。

咲子「ベットのクッションの裏！…ないわね」

八幡「そんなもん持ってねぇよ…」

咲子「次…ベットの下！（ここもないわね…）」

ー数分後ー

咲子「ハァ、ハァ…」

八幡「いくら探しても見つかるワケないだろ、そもそも持ってないし」

咲子「……」

咲子は何か考えている。

咲子「（八幡の能力は影…なら！）真解除火桜！」ＢＬＯＯＭ！

八幡「……あ」

やべ。
ポワン！
咲子の能力が反応した。
咲子「出た！うおおおお！」ダッ
八幡「お、おい」
咲子「見っけ！」サッ
咲子は俺の机の下から一冊の本を抜き出した。
八幡「や、やべ…」
逃げねえと…
咲子「どれどれ…」
『万乳引力』
八幡「じゃ、じゃあｎ「ここにいなさい」…い、いや「いなさい！」…は、はいっ！」
俺、死んだな。
咲子「……」ペラッ
咲子はエロ本を読み始めた。
咲子「……／／／／」カァァァ
若干顔を赤くしながら。
咲子「／／／／」プシュ～
八幡「さ、咲子…？」
咲子「八幡、なんでこんな本持ってたの？彼女である私がいるのに？」
八幡「い、いや、だってよ、車の免許持ってるのにマリカーする人いるだろ…？」
咲子「ふーん」じー
咲子は顔をに近づけてくる。
八幡「さ、咲子、近いぞ…？」
咲子「…ねぇ八幡」
八幡「な、なんだ？」
咲子「八幡って、その…大きいほうが好みなのかしら？」
八幡「そ、そんなことはないぞ」

ホントだぞ？はちまんうそつかない。
咲子「…ふーん（なるほどなるほど）なら…」じー
咲子は顔を近づけ…
咲子「…んっ／／／」チュッ
八幡「んむっ!?」
抱きついてキスをしてきた。
咲子「ぷはっ…八幡…／／／」
八幡「怒って…ないのか…？」
咲子「怒ってるわよ…でもね…私思ったのよ…」
八幡「なにをだ…？」
咲子「それなら、エロ本無くてもいいようにすればいいのよ…」
八幡「お、おい、それってつまり…」
咲子「ウフフ♪今夜は寝かせないわよ♪」
八幡「マジカよ…」
その後俺達はお楽しみをした。
何をシたのかは想像に任せる。

という事で、２学期終了！（どういう事で？）

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「……♪」

八幡「どうした、そんな可愛い笑顔して」

咲子「今日はなんの日？」

八幡「１２月２２日だが？「じー」…スマンスマン、２学期最後の日だ」

咲子「つまり？」

八幡「明日から冬休みだな」

咲子「そう！その通り！」

八幡「やけにハイテンションだな」

最近聴いたボカロ曲が頭の中で流れてきたが、気にしないでおこう。

咲子「だって、性なる夜もあるし大晦日もあるしその後は札幌旅行よ!?」

それは楽しみだ…って、漢字おかしいよな？

八幡「〝聖なる夜〟の間違えじゃないか？」

咲子「いや、でも私達はすでにセッ「それ以上は言うな、規制される」…そうだった、ゴメン。…でも、楽しみなのも仕方ないんじゃない!?」

八幡「そうだな…」

ー数十分後ー

日花「明日から冬休み。だからといって特訓と勉強を怠っていいというわけではないわよ。しないとよいお年を迎えることができないわよ（大嘘）」

特訓と勉強…まあしっかりやってるから問題ないな。

理系科目？咲子達に徹底的に教え込まれたが？

日花「話は以上よ、終業式あるから整列しなさい」

ガタガタ…

ー時飛ばし！ー

…そして放課後になった。
八幡「終わったぜ…」
咲子「帰ろ帰ろう～♪」
絵奈「帰る帰る～♪」
翔「さらっと絵奈もノッてやがる…」
メイ「明日は確か、春樹さんときじおさんを空港で迎えるんでしたよね？」
咲子「私と八幡が付き合ってることは…兄さんに言う必要があるわね」
八幡「俺がボコされるのか、泣きながら喜ぶのか、適当に流されるか…」
咲子「この前父さんに言った時、襲いかかろうとした所を母さんが笑顔と無言の圧力で父さんを黙らせたのは凄かったわね……兄さんのことだし力を試しそうね」
八幡「どれぐらい強いんだ？」
咲子「確かパワーは大体１０００万で、悪魔化ができるわね」
八幡「悪魔化なしでも１０倍差があるじゃねーか…」
勝ち目ないだろ？仕事もプロらしいし。
翔「まあでも流石に本気を出すこと無いと思うぞ？」
絵奈「気持ちを確かめるために勝負してきそうだよね～」
八幡「そうか…ま、頑張るか」
咲子「本当にそうなったら応援してるわよ♪」
八幡「フラグ立てるな」ワシャワシャ
咲子の頭をワシャワシャと撫でる。
咲子「テヘッ☆」ペロッ
咲子はテヘペロを披露。
何コイツクソ可愛いんだが？
八幡「……」スッ
スマホを出して咲子に向ける。
…カシャッ。
咲子「…えっと、八幡？」

八幡「…ハッ！可愛すぎて無意識に写真撮ってた！」
咲子「そ、そう…？」
八幡「おう」
咲子「そっか…／／／」
２人以外（……甘い！）
その様子を見ていたみんなは心の中で同じ言葉を発するのであった。

遭遇する数分前

ｓｉｄｅ火野八幡
今日の朝、咲子の兄である桜木春樹さんに会った。
俺と同じぐらい人間観察が得意で驚いた。
そして今…
八幡「ホントに来るんだな？」
千早「ああ、間違いない」
咲子「男の娘ってホントに実在するのかしら？」
七隈の情報収集で戸塚達が俺に会いに福岡に来るらしい。
雪ノ下達は知らんが。
八幡「アイツらは結構いいヤツだからな、楽しみだ」
一方、その頃…
ｓｉｄｅ戸塚彩加
戸塚「後少しで八幡に会えるね！」
川崎「だね。何してるんだろ？」
材木座「我を裏切ってなきゃいいが…」
八幡が裏切る事はないと思うけどな？
（戸塚は材木座が言ってる事の意味を理解してない）
戸塚「葉山君達、用事で来れなかったね」
川崎「およそ１人めちゃくちゃ残念そうだったけど、別の意味で」
材木座「やめろ川崎殿、我の背筋が凍る」ゾッ
海老名さんの趣味でね…
『次は、博多、博多…』
早く会いたいよ、八幡！
ｓｉｄｅ雪ノ下雪乃
……。
着いたわ…
雪乃「ここが福岡ね…」
結衣「ヒッキーは何処かな？」
小町「やっと害虫駆除できますね…！」

フフフ、貴方に味方なんて必要ないのよ…ゴミ谷君…
千代「………（やっぱりいたわね、連絡っと）」
ｓｉｄｅ火野八幡
プルルルッ
千早「ん、千代からだ。もしもし……おう、分かった。八幡、少しやばい事が起きた」
八幡「ヤバい事？」
千早「ああ…雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣、比企谷小町が今福岡空港を出たらしい」
咲子「新幹線じゃなくて飛行機で来たのね…」
確かに少しやばいな。だが…
八幡「………ま、大丈夫だろ」
千早「根拠は？」
八幡「俺は今寮にいない。だから仮に雪ノ下達が寮に行ったとしても大丈夫だ」
咲子「でも、その次は恐らく花町高専に行くわよ？」
八幡「今は冬休みだぞ？」
咲子「いや部活あるでしょ？」
八幡「それも気にするな、アイツらが俺の事を言っても恐らく信じねえよ。修学旅行の件はすでにリークしてるし」
千早「なるほどな」
八幡「それと…影に潜ってさとかに隊基地で寝泊まりすればいい話だ」
咲子「いい考えね」
八幡「後は陽乃さんに連絡するだけだな」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
陽乃「…………」
雪乃「久し振りね、姉さん」
陽乃「（ホントに来たよ、火野くんが言った通りだよ）私に会いに来たのかな、雪乃ちゃん？」
雪乃「とぼけないで。比企谷君は何処？」

陽乃「そんな人知らないよ？火野君の事かな？」
問題児３人組と陽乃は、すでに遭遇しているのであった。

男の娘は、実在する～！

ｓｉｄｅ雪ノ下陽乃

２分前に火野君が電話してきたけど、本当に来ちゃったよ…

問題児３人組が。

陽乃「……」

雪乃「久し振りね、姉さん」

陽乃「(ホントに来たよ、火野くんが言った通りだよ) 私に会いに来たのかな、雪乃ちゃん？」

雪乃「とぼけないで。比企谷君は何処？」

陽乃「そんな人知らないよ？火野君の事かな？」

雪乃「彼の名字が火野なワケないでしょ？何処にいるの？」

陽乃「実際に火野なんだけどな～。で、火野君に会って何する気なの？」

雪乃「彼に現実を教えるわ。クズに味方はいないと」

陽乃「……へぇ」

火野君がクズ、ね～…

陽乃「ふざけてるのかな？」

雪乃「ふざけてるワケないでしょ。早く教えなさい」

ああ、こりゃもう手遅れかな？

陽乃「雪乃ちゃん達、いい精神科を紹介するよ？」

雪乃「精神科？何が言いたいのかしら？」

陽乃「雪乃ちゃんとガハマちゃんが火野君に助けられている事に気付いてない地点でダメなのに、さらに火野君を追い込もうとしてるその態度。頭腐った？」

イライラしたから連続で罵倒した。

結衣「は!?あたし達の頭は腐ってなんかないです！腐ってるのはヒッキーです！」

小町「そうですよ！あんなゴミに助けられてるハズないじゃないですか！」

陽乃「……」ビキッ

いけない、青筋立っちゃった。でも仕方ないよね？
陽乃「…もう出てって」
雪乃「まだ質問に答えて「出てって！」…姉さん？」
陽乃「お前に姉さんと呼ばれる筋合いはないよ。とっとと出てって！」
ドンッ！
３人を玄関から押し出す。
雪乃「ちょっ…何を…」
陽乃「２度と来ないで！」
バンッ！
ドアを閉めた。
……。
後で火野君に慰めてもらおう。
ｓｉｄｅ火野八幡
千早「今駅から出たぞ」
八幡「よし、入るか」スッ
咲子「ええ」
３人で影の中に入り、移動する。
…おっ、いたいた。
戸塚「花町高専って何処だっけ？」
材木座「そっちだったと思うぞ」
川崎「行こう」
戸塚、材木座、川、川…川崎（正解）の３人か。
影で後ろに回り込む。
八幡「……」スッ
そして影から出て…
トントン
戸塚の肩を叩く。
戸塚「ん？……えっ!?」クルッ
川崎「比企谷、いや、火野…！」
八幡「久し振りだな、お前ら」

戸塚「八幡〜！」ダキッ
戸塚が抱きついてきた。
おお、これは…あ。
咲子「……」ゴゴゴ…
やべ、咲子がドス黒いオーラを出してやがる。
八幡「戸塚、一旦離れてくれ」
戸塚「あ、うん」パッ
材木座「いつの間に後ろにおったのだ八幡？」
八幡「数秒前からいた」
川崎「じゃあ能力で？」
八幡「その通りだ…ん？」トントン
咲子「…八幡」
八幡「どした咲子？」
咲子「男の娘は…実在したのね！」
未だに信じてなかったのかよ。

地獄に会う数分前

ｓｉｄｅ火野八幡

戸塚「会えてよかったよ、八幡」

八幡「だな。俺も嬉しい」

川崎「火野、性格変わってない？」

材木座「若干柔らかくなっておるぞ」

八幡「そうか？対して変わってないと思うが」

咲子「…八幡、そろそろいいかしら？」

八幡「ん？おう、スマン咲子」

戸塚「君は？」

普通に自己紹介してくれよ？

咲子「八幡の嫁の桜木咲子よ、よろしく」

３人『ええ!?』

やっぱりやりやがった…

八幡「まだ嫁じゃない。彼女だそれと…」

千早「七隈千早だ、よろしく」

シンプルでいいな。

戸塚「じゃあ僕達も自己紹介するよ。戸塚彩加だよ」

川崎「川崎沙希よ」

材木座「材木座義輝であ～る！」ビシッ！

八幡「変な決めポーズすんなよ…」

材木座「変!?我のポーズの何処が変なのだ!?」

…もういいわ。

八幡「で、これから何処行くんだ？」

戸塚「うーん…花町高専を近くで見てみたいな！」ニコッ

いい笑顔だな、可愛い。

八幡「よし来たすぐ行こう…イテッ」ドゴッ

咲子「…八幡？」ニコッ

ヤベエ、咲子の目が笑ってない。戸塚に惚れてしまったからだろうな…

八幡「スンマセン」
咲子「よろしい」
3人『……？』
八幡「…コホン。行こうぜ」
スタスタ…
雪ノ下達に遭遇しなければいいがな…（フラグ立った）
ｓｉｄｅ雪ノ下雪乃
まさか姉さんまで洗脳されてたのは予想外だったわ。
あのゴミを早く駆除しなきゃいけないわね。
雪乃「ココが花町高専ね」
結衣「入ろう！」
雪乃「待ちなさい由比ヶ浜さん。不法侵入になるわよ」
結衣「あ、そうだった」
小町「でも、どうします？」
雪乃「そうね…「どうしたんですか？」…？」
メイ「校門の前をうろちょろして。怪しさ全開ですよ？」
この子は、1年2位の室見メイさんね。
雪乃「比企谷君って人を知ってるかしら？」
メイ「比企谷？…分かりません。下の名前はなんですか？」
雪乃「八幡…だったかしら？」
メイ「八幡？…ああ、火野八幡さんの事ですか？」
雪乃「（火野八幡なワケないでしょ）ええ、そうよ」
メイ「何故八幡さんを？」
雪乃「千葉から会いに来たのよ」
メイ「（千葉？まさかこの人達は…）名前を聞いてもいいでしょうか？」
雪乃「雪ノ下雪乃よ」
結衣「由比ヶ浜結衣だよ」
小町「比企谷小町です」
メイ「……」
ｓｉｄｅ室見メイ

まさか、こんな所で…
メイ「八幡さんがいじめられる原因を作ったクズに会うとは思いませんでした…」
結衣「は？クズとか失礼じゃない？」
メイ「貴女達3人に警告します。とっとと千葉に帰ることをおすすめします。さもなくば地獄を見るでしょう」
警告はこれで充分でしょう。
雪乃「地獄？私達がゴミ谷君に地獄を見せるのよ」
メイ「そう思うのも今だけでしょう。じゃ」スタスタ
あ〃あ〃、イライラしました。

地獄①

ｓｉｄｅ火野八幡

戸塚達と一緒に花町高専に移動した。

千早「…八幡」

八幡「何だ？」

千早「例のヤツらが花町高専の校門にいるぞ」

戸塚「例のヤツらって？」

八幡「雪ノ下、由比ヶ浜、比企谷の３人だ」

戸塚「確かに八幡を逆恨みしてたね」

千早「しかもさっきまでメイと話してたようだ」

八幡「室見と？」

千早「ああ、室見はかなりイラついてるぞ」

咲子「あのクズ共に地獄を見せなきゃね…フフフ…」

八幡「俺は止めないぞ」

川崎「あの３人、懲りないね…」

材木座「原因だった葉山殿すら反省しとるのに」

そんな事を話してると…

「随分な大所帯ね、ゴミ君」

「みんなから離れろし！」

「訴えるよ！」

もう二度と聞きたくなかった声を聞いた。

八幡「久しぶりだな、陽乃さんの完全下位互換とクソビッチとクズな元妹」

千早「ブッｗｗｗ（何だよそのあだ名ウケるｗｗｗ）」

雪乃「誰の事を言ってるのかしら？」

結衣「誰がビッチだし！」

小町「クズはアンタでしょ！」

八幡「お前らの事だ」

雪乃「…それでゴミ君、私達に謝るべき事があるんじゃないのかしら？」

結衣「そうそう！土下座してよ！」
……は？
八幡「は？」
訳分からん。
戸塚「雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、悪いのは君達だよ？」
雪乃「そんな訳ないわ。全てそのゴミが悪いのよ」
結衣「彩ちゃんは黙ってて！」
戸塚「ごめん八幡、止められなかった」
八幡「お前は悪くない」
小町「ほら、さっさと土下座してよ、ゴミ！」
咲子「八幡…いい加減キレそうなんだけど」
八幡「落ち着け咲子。まだその時じゃない」
咲子「…分かった」
雪乃「桜木さん、貴女はそのゴミに騙されてるのよ」
結衣「洗脳されてて、可哀想だね！」
小町「桜木さんの洗脳を解いてよゴミ！」
咲子「……あ〃？」ギロッ
八幡「さ、咲子、やめろ「もう我慢できないわ」マジかよ…」
咲子がキレやがった…
咲子「さっきから聞いてるけど、人の彼氏の事を勘違いした上に罵倒するとは…アンタ達は最低ね！」ゴゴゴ
味方『!?』
3人「ヒッ…」
千早（これが彼女の怒りってヤツか…）
川崎（威圧が半端ないね…）
咲子「ほら、何か言ってみなさいよ！」
雪乃「あ、貴女は本当に可哀想ね。ゴミ君、さっさと洗脳を「へぇ…」ッ!?」
咲子「まだ言うのね？八幡がアンタ達を助けたにも関わらず、仇で返すのね…？」ギロッ
雪乃「ヒッ…」

結衣「ゆきのんを虐めるのはやめろし！」
パシィン！
八幡「!!!」
由比ヶ浜の野郎…咲子を叩きやがった…
八幡「俺の彼女を叩いた罪は重いぞ、クズ共…」

地獄②

ｓｉｄｅ火野八幡

八幡「俺の彼女を叩いた罪は重いぞ、クズ共…」

咲子「八幡…？」

結衣「そ、そいつがゆきのんをいじめたからだし！」

咲子をそいつ呼ばわりとは…

八幡「咲子は正論を言っただけだが？ああ、バカには分からないか」

結衣「バカとはなんだし！」

八幡「お前の事だ、脳内お花畑野郎」

戸塚「さ、流石に言い過ぎじゃない？」

八幡「いや、まだ足りないな。３人は七隈と先に行っててくれ」

戸塚「う、うん。やりすぎないでね？」

八幡「おう」

スタスタ

結衣「の、脳内お花畑って…」

小町「ひどいよ！」

八幡「酷い？２人の言い分しか聞かず俺を家から追い出した上に俺をゴミ扱いしてるお前が言う事か？」

小町「で、でも、本当の事じゃん！」

八幡「ほう…じゃあ聞くぞ。お前はあの状況だったら何をした？」

小町「そ、それは「何もできないだろ？」そんな事ない「あるじゃねえか、答えられてないだろ？」くっ…」

八幡「お前も同類なんだよ、比企谷」

小町「ッ…」

雪乃「私達は事実を小町さんに伝えたのよ。悪いのは貴方よ、ゴミ君」

ダメだな、もう。…見損なった。

八幡「……そうか。咲子」

咲子「何？」

八幡「こんな低能共を置いといて、帰ろうぜ」

咲子「ええ。近くにいるだけで頭がおかしくなるわ」
俺は振り向こうとするが…
雪乃「今帰ったら起訴するわよ、ゴミ君」
八幡「……どうぞご自由に。証拠は俺が全部持ってるしな」
雪乃「嘘ね。どうせ偽造したものでしょう」
八幡「いや、マジだ。優秀な情報屋が2人いるもんでな。起訴してもこっちが勝つだろうな」
雪乃「ッ、どこまでも卑怯ね…！」
八幡「その言葉、そっくりそのままお前に返す。帰るぞ咲子」
咲子「…ええ」
スタスタ…
結衣「ッ、逃げるなし！」ポイッ
八幡「ん？…なっ!?」
こいつ、爆弾を!?
ドゴォ…ッ！
八幡「ガハッ!?」
咲子「八幡!?」
結衣「に、逃げようとした罰だし！」
八幡「戦闘以外で武器を使うのは違法だぞ…グッ」
体は鍛えたから大丈夫だが、痛いな…
雪乃「貴方の方が集団洗脳という大犯罪をしてるのによく言えたわね」
八幡「この野郎…「そこまでよ。八幡、咲子は下がってなさい」…母さん！」
有美「由比ヶ浜結衣、戦闘以外での武器の使用により有罪…逮捕するわ」
結衣「なっ!?」
有美「話は一部聞いたわ。録音もされてるわよ？」
結衣「そ、それでもあたしよりヒッキーが「八幡は何もしてないわよ。そしてお前は爆弾を投げて攻撃した。どう見てもアンタが有罪よ？」」

雪乃「待って下さい。火野さん、貴女はそのゴミに洗の「あ〃？私の義息がなんて？」ヒッ…」

有美「2人とも、こいつらは私がどうにかしとくから、帰っていいわよ」

八幡「お、おう。また後でな母さん」

咲子「失礼します、有美さん」

スタスタ

多分普通のクリスマス会①

ｓｉｄｅ火野八幡

母さんが由比ヶ浜を逮捕し、２人を帰らせた次の日、俺は戸塚達と福岡市を観光した。

かなりいい時間を過ごした。

３人はその夜帰っていったが、２年になったらココに転校するらしい。

そして今日は１２月２５日。

咲子「かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

ゴクゴク…（酒は飲んでない）

クリスマスだ。俺達は今さとかに隊基地でクリスマス会をしている。メンバーはいつものメンツに加えて折尾、室見の兄である室見出夢先輩とその彼女の藤崎先輩、坂田先生の息子の坂田未例先輩も誘っている。

咲子「ところで未例さん、日和さんはどうしたんですか？」

未例「ああ、家でゴロゴロしてるぜ」

咲子「はぁ…」

花「メイちゃん、誘ってくれてありがとね♪」

メイ「お礼はいらないですよ、花さん。楽しむのはみんなでいた方がいいですし」

出夢「それもそうだね、ははっ」

ロジカ「……」じー

咲子「…どしたの？」

ロジカ「…ありがと」

咲子「（…誘った事のお礼かしら？）どういたしまして」

ロジカ「……ん」ゴクゴク

八幡「ツンデレかよ…すみません」

思いっきりにらまれた。怖え。

…そろそろやるか。

八幡「咲子…渡したいものがある」
咲子「ん？なになに？」
俺は赤くラッピングされた箱を咲子に渡す。
咲子「開けていいかな？」
八幡「どうぞ」
咲子は箱を丁寧に開ける。
咲子「わあ…！」
赤と銀のチェック模様のスカーフが入っていた。
咲子はすぐにそれを首に巻いた。
咲子「似合う…かな…？」
八幡「おう、似合ってるぞ。頑張って編んだ甲斐があったぜ」
どうやって編み方を覚えたのかって？
…頑張って覚えたに決まってるだろ。
咲子「編んでくれたの!?凄い…嬉しい！」ギュッ
八幡「喜んでもらえて何よりだ」ナデナデ
未例「……ゲフンゲフン」
翔「…コーヒー飲みたいやついるかー？」
絵奈「あ、私飲む～」
ルマ「ねぇ祐樹、抱きしめていい？」
祐樹「おう、別にいい「わーい！」…うおっ」ドサッ
出夢「…僕達はカレカノらしくないのかな…？」
花「安心して、あっちが甘々なだけよ…」
ロジカ「……（羨ましい…）」
あ、クリスマス会だったな。
ー数分後ー
咲子「…あら、七隈兄妹は？」
八幡「あっちでなにかの準備をしてるぞ」
千早「プロジェクターの準備、完了！」
千代「…発表、スタート！」
プロジェクターに何か映し出される。
『新作ゲームの発表』

千早「ちょうどとあるゲームが完成したから、今から説明のプレゼンテーションを行おうと思う」
どんなゲームだろうな？

多分普通のクリスマス会②

ｓｉｄｅ火野八幡

千早「ちょうどとあるゲームが完成したから、今から説明のプレゼンテーションを行おうと思う」

全員『おお～』パチパチ

千代「まずは質問。『Ｍｕｌａのものおきば』って知ってる？うごメモの職人で、マリオを主人公にした二次創作を投稿してるの」

咲子に紹介してもらったヤツだな。

千早「そのＭｕｌａさんの作品の時系列をとある人が続きを書いたのが三次創作の『ＭＵＬＡストーリ』だ」

作者が書いてるな。（メタい！）

千代「そのＭｕｌａストーリーをもとに、私達は２人で数ヶ月前からプログラミングしてたの」

咲子「つまり四次創作ってことね」

千早「その通りだ。そしてそのゲーム…名前は『ＭＵＬＡの物語』…がつい先日２部まで完成したんだ」

それは凄いな。

千代「このゲームのジャンルは弾幕系ＲＰＧで、デルタルーンのようなバトル形式を再現しているわ」

そして七隈は実際にプレイ動画を見せてきた。

絵奈「あ、私が書いたピクセルアートはそのためか～！」

アルカ『…時間停止！』

再現力高いな。

←ブゥゥゥン…

学「内容は知らんがクオリティーが高いな」

育也「確かにそうだね」

メイ「面白そうですね」

そしてその後も発表が続いた。
千早「以上、発表を終わります」
千代「見てくれてありがとうございます」
咲子「…さっそくやってみたいわね」
千早「パソコン持ってるか？」
咲子「あ、持ってない」
千代「後でデータをメールで送るわね」
咲子「うん、ありがと」
八幡「俺は持ってるぞ」
咲子「じゃあ、アンタのパソコンに入れていい？」
八幡「もちろんだ」
ー数時間後ー
翔「お、そろそろ７時だ」
祐樹「家から例のブツ持ってくるぜ！」タタッ
八幡「おい言い方」
アレしかありえないだろうが。
絵奈「今年は何味かな～？」
翔「人も去年の４倍ぐらいだしな、大きさはどうなんだろうな？」
ロジカ（今日はクリスマス、なら例のブツはアレしかありえない…）
ルマ「アレ、頑張って選んだんだよね～」
メイ「楽しみですね！」
ー数分後ー
祐樹「持ってきたぞー！」
ドスン！
全員「おお～！」
戸畑は大きなクリスマスケーキをテーブルに置く。
咲子「今年はフルーツケーキみたいね」
ルマ「その通りだよ。カット係、お願いね！」
メイ「了解です！」シャキン
室見は長いナイフを振りかぶり…
メイ「斬ッ！」

スパスパッ！
キレイに１６等分した。
出夢「よくあのスピードで切れたね…」
動きが見えなかったな。
咲子「さあ、食べていく～！」
その後、俺達は楽しくケーキを食べた。

聖なる夜が性なる夜に…

ｓｉｄｅ火野八幡

ケーキを食べた後、俺達は解散し、それぞれ帰路についた。

咲子「帰ったら速攻パソコンでＭＵＬＡの物語を入れるわ！」

…誘ってみるか。

八幡「……咲子」

咲子「なに？」

八幡「その…今夜俺の寮部屋で泊まるか…？」

咲子「えええ!?八幡が誘ってきた!?」

八幡「驚く所そこかよ!?」

咲子「えっと…もちろんオーケーよ！仮に父さんが止めてきても母さんと兄さんがどうにかするし」

八幡「お、おう…（蓮也さん、強く生きて下さい）」

そして、ちょうど咲子の家の前まで来ていた。

ー数分後ー

ガチャッ

咲子「お待たせ～」

八幡「いや、全然待ってないぞ？」

咲子「そう？…まあいいや。レッツゴー！」

スタスタ…

ー自宅ー

ガチャッ

八幡「ただいまー」

咲子「お邪魔しまーす」

有美「おかえり、〝３〟人とも」

……ん？

咲子「３人？」

有美「付き合ってるんだから、ここが第２の自宅みたいなものでしょ？」

咲子「なるほど……」

それで納得するのかよ。
八幡「…とりあえず部屋に行こうぜ」
咲子「うん！」
スタスタ…ガチャッ。
咲子はすぐに目標を俺のベッドに定め…
咲子「ジャ～ンプッ！」
ボスッ
思いっきりジャンプした。
八幡「…何してんだ？」
咲子「ムフ～、いい匂い～」
八幡「……まあいいや」ガチャッ
他にしなきゃいけない事があるしな。
ーリビングー
有美「ふぃ～」ぐでーん
八幡「何してんだ母さん」
有美「見ての通りぐでーんとしてるだけよ？」
八幡「…はぁ」
気にしないで風呂に入るか。
ー数分後ー
ガチャッ
咲子「／／／」
八幡「…ふう、暖まったぜ…どした咲子？」
咲子「八幡……コレは何？」
八幡「え、あ、まさか…」
咲子「ほら、コ・レ♪」スッ
俺のスマホの画面にはエロ画像が写っていた。
八幡「……勝手に人のスマホ使うなよ」
咲子「あ、逃げたわね？えい」
八幡「うおっ!?」
ボスッ
ベッドに押し倒される。

咲子「彼女の私がいるのになんでそんなモノ見てたの？ねぇ」ハイライトオフ
こ、怖え。目に光がないぞ。
八幡「ス、スミマセンでした」
咲子「ふふっ…許さない♡」チュッ
咲子にキスをされた。
しかもただのキスじゃない。舌を絡めるタイプのヤツだ。
ヤバい、俺の理性が」
咲子「アンタの理性なんて関係ないわよ。私の理性が既に崩れてるから…」
咲子は頬を赤くしながらそう言う。
八幡「オ、オワタ」
咲子「寝させないわよ♡んっ…」
八幡「そ、そこは…」
咲子「ふふっ…」
アッーーーーーーーーーーー！
この後に起きた事は読者の想像に任せよう。

ヤバいヤツらの訪問

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「……♪」

八幡「フッ……（可愛いなコイツ…）」ナデナデ

有美（完全に八幡達の空間になってるわ…幸せそうね…）

……外に誰かいるな。

咲子「八幡、分かる？」

八幡「ああ…強いオーラを感じる」

咲子「４人いるわね…」

ピンポーン。

咲子「はーい」タタッ

咲子がドアを開けた瞬間…

シュッ！

花びらの弾幕が飛んできた。

咲子「…へえ。空中分解！」ギュルルルル！

なので咲子はそれを全て受け流した。

「マジかよ…」

「この威圧でも余裕そうな表情…」

「しかも全部受け流した…」

「…わりぃわりぃ、ついつい３代目桜の力を試したかったんだ」

１人見覚えが…

八幡「…ん？おお、雷落か」

一郎「おっ、八幡！中学校ぶりだな」

八幡「そうだな」

コイツは雷落一郎、そこそこいいヤツだった事は覚えてる。

咲子「アンタ達は？」

一郎「…俺は雷落一郎。４代目桃だ」

咲子「桃？私は桜木咲子、３代目桜よ。よろしく」

一郎「おう。…で、お前らはいつまで黙ってんだ？」

素直なコメントをしてみるか。

風鈴「あ、ゴメン。私は梅野風鈴（うめのふうりん）、６代目梅よ」
緑髪ショートの少女。
流「那覇流（なはりゅう）だ。５代目蓮だ」
どう見ても陽キャ。
砂智子「椿木砂智子（つばきさちこ）、５代目椿です」
顔立ちがめちゃくちゃ咲子に近い。
咲子「全員花称号だったのね…」
八幡「…とりあえず入ってくれ」
一郎「おう」
スタスタ…
一旦落ち着いた後、咲子は雷落に話しかけた。
咲子「まさか私以外知り合い同士だったとはね…」
砂智子「偶然が重なった結果こうなったんです」
一郎「でも、有美さんが驚くどころか納得してたのは意外だったな」
しかもコイツらが来ると知ってながら黙ってたし。
風鈴「というか、アンタどうしたらあの威圧で平然としてられるの？」
咲子「うーん…覇気を纏ったから？」
流「なんでワン〇ースなんだよ」
咲子「冗談よ。でも、似たようなものね。威圧を威圧で返したのよ」
風鈴「いやいやそんな誰でもできるような言い方で言われても…」
砂智子「道理で２代目さんが〝１年にしては規格外〟とか言ってたんですね…」
咲子「あら、日花先生に会ったの？」
一郎「おう、会ったぜ。お前の情報を引き出そうと思ったんだが…」
ピンポーン。
八幡「ちょっと行ってくる…」
ガチャッ
千早「八幡、大変だ！現役の花称号が全員福岡に…ゑ!?」
千代「家に来てる!?」
七隈兄妹が焦った表情で入ってきた。

ちょっと説明がめんどくさい事になる予感がする…

慣れって怖い

ｓｉｄｅ火野八幡

七隈兄妹に事情を一通り説明した。

八幡「…ということだ」

千早「なるほど…」

千代「確かに咲子は規格外ね…」

咲子「おい」

咲子が突っ込んでくるが、事実なので気にしない。

一郎「…なあ」

咲子「…？」

風鈴「今日福岡に来ることは事前に決めてたんだけど…」

砂智子「その…泊まる所が…」

流「ねぇんだよな…」

……は？アホなの？

咲子「…アンタらアホ？それともバカ？」

咲子の鋭いツッコミが炸裂した。

一郎「スマン…」

咲子「…まあいいわ。今日は金曜日じゃないし、基地で泊まっていいわよ」

風鈴「ありがとう…！（土下座）」

梅野がなんと土下座してきた。

咲子「土下座までしなくても…」

砂智子「あはは…（苦笑）」

流「その基地って、どんなモンだ？」

咲子「デカい倉庫を改造したもの」

風鈴「……？」

聞いただけじゃ分からないだろうな。

千早「まあ、説明するならそれが妥当だな」

千代「行った方が早いわね」

咲子「…ついてきなさい」

一郎「お、おう…」
ー移動したー
八幡「ここだ」
一郎「ここが基地か…」
砂智子「倉庫にしか見えませんね…」
咲子「そりゃ外は改造してないからね」
する必要もないしな。
ガチャッ…
メイ「あ、咲子さん、来たんですね」
千早「なあメイ、これからやばいやつらが来るんだが、驚きすぎるなよ？」
メイ「？はい…」
八幡「よし、入れ」
風鈴「し、失礼します」
４人が入ってくる。
そして室見は４人をじっと見る。
咲子「…で、反応は？」
メイ「…知ってましたよ？」
咲子「ゑ？」
メイ「日花先生から連絡をもらったので」
先生から？なんでだ？
メイ「室見メイです、よろしくお願いしますね」
一郎「おう、よろしく」
砂智子「あの…驚かないんですか…？」
メイ「まあ、俺と同じレベルの力を４人も感じたので、少し驚きましたが」
流「マジかよ、お前も威圧に怯まないのか…」
メイ「そうですね。（出るわよ）…あ、はい。分身！」ポワン！
室見は別人格であるナオ、ヤエ、クミを出した。
風鈴「!?…４人になった!?」
一郎「…なるほど、多重人格か」

メイ「そうです。全員性格や属性が違います」
ナオ「私はナオ、属性は桜よ」
ヤエ「あたしはヤエ、属性は椿さ」
クミ「あたいは最強のクミ、属性は桃よ！」
およそ1人⑨がいたな。
流「…蓮だけがいないな」
メイ「まだ眠ってるんですよ。きっかけさえあれば目覚めるんですが」
砂智子「なんか複雑ですね…」
咲子「…ところで、一郎達は今日何するの？」
一郎「今日？観光は明日だしな…あ、千早」
千早「…なんだ？」
一郎「『ＭＵＬＡの物語』の製作者って、お前か？」
千早「…何故分かった？」
風鈴「二次創作ゲームであの高クオリティーだから話題になってるのよ」
千早「そうか…配信開始してから2日しか経ってないぞ？」
一郎「それぐらい凄いんだよ。どれぐらい時間かけたんだ？」
千早「あー、千代、どれぐらいだっけ？」
千代「ちょっと待って…」カタカタ…
七隈（千代）はなにかを検索する。
千代「…半年ね」
風鈴「え!?」
千早「正確にはもっと短かった気がするんだが…」
咲子「マジか…」
改めて七隈兄妹の凄さに驚く俺達であった。

手合わせ

ｓｉｄｅ火野八幡

一郎「…いい事思いついたぜ」

風鈴「なになに？」

一郎「八幡、俺と手合わせしないか？」

八幡「俺負けると思うぞ？」

風鈴「私も手合わせしたいわね…咲子と」

俺じゃないんかい。

咲子「…じゃあ、私と八幡対一郎と風鈴にしない？」

一郎「いい考えだな。早速準備しようぜ」

八幡「……咲子」

咲子「？」

八幡「…頑張ろうぜ」

咲子「…もちろんよ」

ー数分後ー

メイ「準備はできましたか？」

一郎「おう」

咲子「オーケーよ」

メイ「それでは…始め！」

八幡「先手必勝！狐月十字斬！」ズバッ！

室見に教えてもらった技だ。

風鈴「え、なにその技!?…うわっ」サッ

あっさり避けられたか。

一郎「イナイレの技を改良したものか…真ボルトタイヤ！」ビリッ！

咲子「へぇ、来たわね。…絶イジゲン・ザ・ハンド！」ギュルルルル

咲子は電気のタイヤを受け流す。

一郎「マジかよ…」

咲子「八幡、時間稼ぎをお願い」

八幡「了解だ」
風鈴「何する気か知らないけど、させないわよ！風斬・鎌鼬！」ズバァァ！
梅野は風斬の正当強化版の技を繰り出す。
八幡「咲子には衝撃も触れさせねえよ！狐月十字斬！」シャッ！
…キィン！
俺が今言った事、かっこよかったな（どうでもいい）
風鈴「負けないよ！回風球！」ギュルルル！
八幡「…ん？螺旋丸にしか見えないんだが？」
某大人気忍者アニメの。
風鈴「らせんがん？なにそれ？」
知らんようだな。
八幡「…まあいいや。シャドースクリュー改！」ゴォォォッ！
一郎「させねぇよ！ボルテッカー！」ズドッ！
今度はポ〇モンか。
八幡「…おっと」サッ
一郎「な!?」
俺は影に潜り、攻撃を避けた。
風鈴「…かはっ!?」ドゴォ！
八幡「…隙だらけだ」
そして後ろに回り込み、梅野の背中を殴った。
…やっぱり女子を殴るのは抵抗があるな。
なら、殴らずに倒すか。
八幡「…風神の舞！」シュシュッ！
ビュゥゥゥン！
風鈴「うわぁぁぁぁぁ～…」
梅野は文字通り飛んでいった。
メイ「…梅野風鈴、脱落！」
八幡「おお、飛んでいったな…」
ちょっとやりすぎたか？
一郎「俺1人か…」

八幡「そのようだな」
ま、すぐやられるが。
咲子「…チャージ完了！」
ゴオオオッ…
一郎「…ゑ」
咲子「くらえ…真…嵐爆熱、ハリケーン！」
ゴオオオオオオオオ！
咲子の大技、嵐爆熱ハリケーンが炸裂した。
一郎「嘘だろー!?」
…ドゴォォ！
雷落は避ける時間がなく、もろにくらって脱落した。
メイ「…雷落一郎、脱落！よって勝者、比企ヶ谷八幡と桜木咲子！」
八幡「…よし！」
咲子「勝ったわ！」

信頼

ｓｉｄｅ火野八幡

一郎「いやー、お前強いな！」

咲子「アンタもなかなか強かったわよ？」

風鈴「私吹き飛ばされたんだけど!?」

八幡「…風神の舞の威力は充分みたいだな」

風鈴「私まさかの実験体!?」

流「風鈴の舞、なんてな！」

風鈴「…りゅう？」ギロッ

流「…スミマセン」

そのジョークは寒いぞ。

砂智子「それにしても、あの最後の攻撃、必殺技っぽいですね」

咲子「嵐爆熱ハリケーンのこと？…いや、アレはただ範囲と威力が高くて溜めも長いハイリスクハイリターンな技よ？」

一応必殺技だよな？

砂智子「そうなんですか？」

咲子「そうなのよ（ま、フレイムウェイブという溜め時間短縮用の技があるんだけどね…）」

メイ「…咲子さん」

咲子「ん、どうしたのメイ？」

メイ「…そろそろ時間ですよ！」

咲子「え、もう!?速く行くわよ！」

ダダダー

室見と咲子は倉庫へ走っていった。

いつものアレか。

一郎「何するんだあいつら？」

八幡「倉庫に行けば分かるぞ」

風鈴「大事なこと？」

八幡「まあ…あの２人にとってはな」

砂智子「行ってみましょう」

ー倉庫ー
『ムゲン・ザ……ハンドォォォ！』
咲子「おー、キタキタ！」
メイ「進化しました！」
流「急いでた理由が…」
一郎「イナイレ鑑賞なんてな…」
風鈴「なんか、ね…」
砂智子「意外ですね…」
咲子「ん？アンタ達も観る？」
５人『見ません』
咲子「そう、残念ね」
イナイレ信者が増えると思ったのに…なんて、思ってそうだな。
（実際そう思ってる）
メイ「……」パクッ
咲子「あれ、ポテチない!?」
メイ「あ、今のが最後のでした」
咲子「むぅ…しゃーない、新しいの取ってくるわ」スタスタ
そう言って咲子は冷蔵庫へ向かった。
平和だな。
一郎「…八幡」
八幡「なんだ？」
一郎「話がある」
八幡「…おう」
そして俺と雷落は移動した。
八幡「で、話って？」
一郎「…お前、咲子に助けられたんだろ？」
一郎はそうきいてくる。
八幡「…まあな」
一郎「だよな。道理で引っ越してたったの２週間で彼女できるワケだぜ（コイツは根は優しいしな）」
八幡「で、本題は？」

一郎「…どうやって助けられたんだ？見た所良い奴そうだし、お前の心を
動かすぐらいの事があったんだろ？」
コイツには…話せるな。
八幡「そうだな…俺は目が腐ってた事が真っ先にバレたんだよ、咲子に…」
俺は話した。俺が過去を打ち明けたことを。その後咲子に慰められた事を。咲子の優しさに惹かれた事を…。
一郎「…まるで運命だな」
八幡「そうとしか思えねえよ」
一郎「マジでお似合いすぎるぜ。手合わせでの信頼も中々のものだったしな」
確かに、咲子が技を溜めてる時に攻撃されないとは保証できない。それができると俺を信頼してたんだ。
八幡「ホントに良い奴だぜ、咲子は」
…だからこそ大好きだ。

極端な飯

ｓｉｄｅ火野八幡

流「あ、そろそろ晩飯だな」

一郎「…近くにいい飲食店ってあるか？」

八幡「…あるぞ」

咲子「…あるわね」

２人『イーティングニコル』

…パーフェクトタイミングだったな。

砂智子「じゃあ、そこで夕食を食べましょうか♪」

うん、そうしよう。

ー移動ー

♪煮ル果実―ハングリーニコル

咲子「ここよ」

流「おお…」

八幡「入ろうぜ」

スッ

???「いらっしゃいませー」

コックは前と同じく１人だった。

一郎「んー、どれにしようか…」

雷落はメニューを見ながら考える。

砂智子「私は明太子スパゲッティにします」

まあ、一応ココ（福岡）の名産物は明太子だしな。

俺は…ハンバーグステーキだな。

風鈴「…カプサイシンライス」

咲子「ゑ…アンタ、大丈夫なの？」

風鈴「ええ。というか必要なのよ、能力的に」

咲子「その能力って？」

風鈴「…秘密よ☆」キラン

殴りたい、その笑顔。

…それはさておき。

俺達はそれぞれオーダーする。
…ちなみに梅野のオーダーを聞いた時相手は一瞬驚いた顔をしてた。
???「すぐに準備いたします」
…シュバババッ！
速すぎないか、あの人？
ー数分後ー
砂智子「美味しいですね、コレ！」
一郎「だよな～」パクッ
風鈴「……」ガブッ
梅野は赤く染まった米を一口食べる。
風鈴「…ん、いけるわねコレ」
咲子「へぇ。私も一口食べてみよう…」スッ
八幡「おいバカ…」
パクッ
咲子「んぐっ!?ゲホッ、ゴホッ…痛っ!?（辛いってレベルじゃないわよコレ!?）」
言わんこっちゃない…
八幡「咲子、牛乳だ」コトッ
咲子「ありがと！」ゴクゴクッ…
コトン。
咲子「あ〃あ〃…ヤバかった」
一郎「安心しろ咲子、俺も初見でそうなった」
お前もそうなったのかよ。
流「他にもレモン汁をそのまま飲んだり、純粋なココアパウダーを食べたりしてたz「流、それ以上言ったらただじゃおかないわよ？」…すみませんでしたもう言いません」
那覇ってバカキャラなのか？
咲子「なるほど…コレ（カプサイシン）は辛い、レモン汁は酸っぱい、ココアパウダーは苦い…味覚を何かに変換する能力かしら？」
凄い推理だな。

風鈴「まあ大体あってるわよ。何に変換するかはこの中で私以外誰も知らないけど」
一郎「見たことないんだよな、能力使うの…」
…それとも見たけど能力だと気付かなかったかだな。
ー半時間後ー
???「ありがとうございましたー」
一郎「俺達は基地へ行くぜ。お前らは？」
ゼイル「送っていく。咲子、両部屋で待っててくれ」
咲子「分かったわ。じゃあね」
そして咲子は俺達と別れた。

一波乱

ｓｉｄｅ火野八幡

雷落達を倉庫に送った後、俺は1人で寮に帰っていた。

八幡「……ん？」

前方に2人の女性がいた。

…俺が一番会いたくなかったヤツらだ。てかまだ帰ってなかったのかよ。

雪乃「……」

小町「……」

何してんだアイツら？

まさか…

八幡「待ち伏せか？」

俺の両部屋の前らへんにいるしな。

八幡「咲子は帰ったのか…ん？」ピロン

母さんからだ。

有美『転送火桜をアンタに送ったから、それに触れなさい。家の前にいる2人を無視できるわ』

…ナイスだぜ。

ヒラッ

八幡「来たか」スッ

シュッ

シュッ

シュッ

ココは…玄関だな。

咲子「おかえり、八幡」

八幡「ああ、ただいま」

有美「外にいる2人は無視しなさい。私がどうにかするから」

八幡「…分かった」

風呂にでも入るか。

ｓｉｄｅ火野有美

咲子「有美さん、何をするんですか？」
有美「なあに、ただアイツらをどうにかするだけよ」
咲子「は、はぁ。頑張って下さい？」
有美「ええ、頑張るわ♪」シュッ
転送火桜っと。
雪乃「……」
小町「……」
まだいるわね。
有美「ごきげんよう」
雪乃「火野、有美…さん」
小町「何しにきたんですか」キッ
おお、怖い怖い（棒）
有美「アンタ達まだ懲りないの？もう由比ヶ浜は逮捕されてる上に私が注意したのに」
ホント、バカね。
雪乃「由比ヶ浜さんは無罪です。犯罪者はあのゴミです」
小町「なんであんな産業廃棄物をかばうんですか！」
あらあら、散々バカにするわね。
有美「なら、こっちからも質問するわよ？八幡は主にどんな罪を犯したの？」
雪乃「集団洗脳、卑劣極まりない行為など、数々です」
小町「貴女も被害者の一部なんですよ！」
有美「……へぇ」
もう、バカを通り越して…
有美「愚かね。自分の事を棚に上げて八幡を罵倒する。もう人として終わってるわよ？」
雪乃「なっ!?」
有美「とくに比企谷。アンタは八幡の家族だったんでしょ？なんで八幡の行為を理解できなかったの？」
小町「そ、それはアイツが「ほら、また言い訳」…ッ」
有美「もう一度言うわよ。よーく聞いてなさい？アンタ達が明日ま

でに帰らなかったら…」
2人『………』
有美「アンタ達がした事の情報を公開するわよ？」
2人『!?』
有美「じゃ、二度と会わないように、ね」
シュッ
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
シュッ
有美「はぁ、クズともう関わりたくないわよ…」
咲子「お疲れ様です、有美さん」

この世界での遭遇

ｓｉｄｅ火野八幡

昨日雷落達は帰っていき、梅野は北海道で待ってるとか言っていた。

…何故その前の事を言わないのかって？…尺の都合だ。（メタい！）

それで今咲子との買い物から帰ってるんだが…

「……」

1人の少女が基地の前に立っていた。

咲子「あの子、何してるのかしら？」

八幡「…行ってみるか」

スタスタ

「今日もダメかな…？」

咲子「あの…」

「えっ？」クルッ

赤いパーカーを着ている黒髪ロングの少女がこっちを向く。

咲子「なんで倉庫の前にいたのかしら？」

「……さ」

2人『さ？』

「桜木咲子先輩ですかッ!?」

少女は大声でそう言った。

咲子「そ、そうだけど…？」

「おお…！」キラーン

目が光っとる。

咲子「……とりあえず話は中で聞くわ」

「あ、はい…！」キラーン

目の光は止まらないんだな。

ー数分後ー

八幡「で、お前は？」

留美「赤坂留美です、先輩！」
留美、か。千葉村にいたアイツ元気にしてるかな…
咲子「…なんで先輩？」
留美「来年花町高専に入学するので！」
マジか。
咲子「…で、留美」
留美「はい、なんですか？」キラーン
咲子「なんでそんな憧れるような目で私を見てるの？」
留美「そんな目をしてるんじゃなくて、実際に憧れてるんです！」キラーン
咲子「そ、そう…」
なるほど、赤坂は咲子のファンか。
確か、七隈兄妹も咲子のファンで、サポートしたいから仲間になったんだよな？
咲子「あ、一応聞くけど、私のどういう所に憧れてるの？」
咲子は質問する。
留美「…戦い方です！」
赤坂ははっきりと返答した。
咲子「戦い方？」
留美「はい、あの技の発動するタイミング、状況に対する対応力、格上の相手を倒す戦術…そして強力な技の派手さ…その全てに憧れてます！」キラーン☆
赤坂は目をさらに輝かせてそう言う。
質問されて嬉しいんだろうな。
咲子「そ、そう…（自分から聞いてなんだけど、照れるわね…）」
留美「…所で、先輩に質問です」
咲子「質問？言ってみなさい」
留美「弟子って受け付けますか？」
咲子「弟子？いくつかの条件を達成したら受け入れるかな、多分」
作ってたのかよ、条件。
留美「その条件って？」キラーン

咲子「1つ目はパワーが30万以上、2つ目は花町高専の受検に合格すること、3つ目は…努力を怠らないこと、かしら？」
留美「…先輩」じー
咲子「な、なに？」
留美「…頑張ります！」
あ、コイツ絶対に弟子になる気だ。
咲子「ええ、期待してるわ」
留美「はい！」ニコッ
こうして、咲子に弟子候補ができたのであった。
留美「…あ、後サイン下さい！」スッ
色紙あるのかよ。

年の終わり

ｓｉｄｅ火野八幡

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

お正月（咲子ｖｅｒ）　作　桜木咲子

あと数日でお正月♪
お正月には餅食べて♪
八幡にあーんをしてもらう♪
はよ来い来いお正月♪

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

…おいおいちょっと待て。
八幡「…突っ込んでいいか？」
咲子「なに〜？」
八幡「替え歌なのは分かるが…何だこの歌詞？」
咲子「〝歌詞〟？（何がおかしいの〝かし〟ら？なんちゃって）」
八幡「俺にあーんしてもらうのは百歩譲っていいとしよう。だが、
それを歌詞にするのはおかしいと思うぞ？」
咲子「別に、何もおかしくないわよ…？」きょとん
咲子はきょとんとしている。
八幡「ハァ、こりゃダメだ」
こめかみに手を当てる。
咲子（なんで落ち込んでるのかしら？）↑お前のせいだろ！
咲子は軽いキャラ崩壊をしているようだ。
…可愛いから許す。
八幡「…もういいわ」ナデナデ
咲子「………♪」
八幡「そろそろ寝るか？」
咲子「ええ」
ボスッ（ベッドに寝転がる音）
八幡「じゃ、おやすみ咲子」
咲子「おやすみ、八幡」

チュッ
…おやすみのキスはするんだな。
ー2日後ー
そして今日は12月31日、つまり大晦日である。
しかも後少しで正月だ。
咲子「今年は色々あったわね…」
八幡「ああ。11月でやっとあの地獄が終わった…そして引っ越してしばらくした後咲子と恋人になった。…いい年だった」
咲子「…あ、八幡、アンタ年越しに食べる物ってあるの？」
八幡「いや、ないが？」
むしろ親に忘れられてたまである。
咲子「じゃあ…年越しラーメン、食べてみる？」
八幡「ラーメン？そばとかじゃないのか？」
咲子「ウチはラーメンなのよ。おせちも食べないわね」
八幡「なるほどな。食べてみる」
咲子「了解。準備してくるわね～」スタスタ…
ちなみに母さんも年越しラーメンを食べてみたかったらしい。
ー数分後ー
八幡「……」
11月、家に捨てられるまでは、最悪と言っていいような状況だった。
あの時、母さんに止められなかったら…いや、考えちゃダメだ。
ここに引っ越してきて、最初はまだ人間不信だったが…ここは良い奴ばかりだった。
特に咲子。俺が過去を打ち明け、慰めてくれた。おかげで目の腐りも取れ、肩の荷が完全に降りた。
それからも、充実した日々だった。似た趣味を持つ友達ができた。
咲子の可愛い一面も見れた。
咲子と付き合う事になった時、本当に嬉しかった。まさか両想いだったとは思わなかった。
今の俺は、幸せ者だな。

咲子「八幡、できたわよ」
八幡「おう、今行く」
スタスタ
咲子「はい」コトッ
八幡「いただきます」
ズズッ
八幡「…美味いな」
俺の年末は、こうして平和に過ごしのであった。

北海道はでっかいどう

ｓｉｄｅ火野八幡

今日から北海道へ行く。

少し楽しみだ。

咲子「楽しみね、メイ♪」

メイ「そうですね♪」

八幡「……」

北海道のま○ぷるの阿寒湖の説明を読んでいる。

八幡「阿寒湖って、確か変なゆるキャラがいたような気が…」

千早「ああ、いるぞ。…こいつだ」

『まりもっこり』

八幡「こいつか…」

そう言えば福岡のゆるキャラって誰だ？

絵奈「変な見た目してるね～」

学「…なあ、本場の味噌ラーメンって美味しのか？」

翔「まだ着いてもねえぞ。話が早すぎないか？」

学「関係ねえ！俺は早く食ってみたいんだ！」

育也「まあ、考えは分からなくもないけど、ね…」

ルマ「祐樹、スキーで思いっきり滑ろうね！」

祐樹「もちろんだ！」

『まもなく新千歳行き○○便の搭乗が開始します』

放送が流れる。

咲子「あ、そろそろね」

八幡「行こうぜ」

スタスタ…

ー数時間後、新千歳空港ー

人生で初めて飛行機に乗った感想。

…頭痛え。

咲子「うっ、寒いわね…」

八幡「そりゃ北海道だからな」

俺？クソ寒いぞ？
咲子「八幡からもらったスカーフがなかったら冷凍食品になってたわ」
八幡「ならないだろ」
お前桜属性だぞ？
翔「で、風鈴との集合場所って何処だ？」
絵奈「入口付近で待ってるって言ってたよ～」
学「…あそこにいるぞ？」
全員『え？』
学「ほら、アレ風鈴じゃね？」
よく見ると、梅野が空港の飲食店で食べていた。
咲子「あ、ホントね。おーい」タタッ
梅野は気付き、こっちを向く。
風鈴「ん、はひほはひ、ほうほほほっはいほうへ！」モゴモゴ
略：ん、咲子達、ようこそ北海道へ！
八幡「行儀悪いぞ」
風鈴「ん。…ふぅ、ゴメン。ヒマだったから食べようと思ったら、いつの間にか集合時間になってたの」
咲子「ふーん…案内してくれる？」
風鈴「もちろん♪…あ、その前にコレ食べてから」パクパク
食べるの好きだなおい。てか何で太らないんだ？
…殺気を感じたから考えるのをやめよう。
咲子「……私達も昼食食べた方が良さそうね」
八幡「…だな」
その後雑談しながら昼食に味噌ラーメンを食べた。
メイ「……」ソワソワ
何か室見がソワソワしていたが、気にしない方が良さそうだな。
ー１０π分後ー
１つ言いたい事がある。
…大通公園って縦に長いな。
メイ「疾風スノーボール！」ポイッ

祐樹＆ルマ『ツインスノーボール！』ポイッ
咲子「まあ確かにそれは北海道であったわね」
八幡「何の事だ？」
咲子「イナイレのとあるシーンで今のセリフを言ってるのよ。雪合戦で」
いや疾風スノーボールて。
八幡「…俺はベンチに「ハァッ！」…やったな？」
咲子が雪玉を投げつけてきた。
八幡「倍返しだ！」
なんだかんだ言っても雪合戦は楽しいのである。
…寒いがな。

スキーは好き～？

ｓｉｄｅ貝塚絵奈
絵奈「……」（。д。）
千代「……」（。д。）
メイがずっと誰かに電話していた。しかも嬉しそうだね～。
メイ「うう…レイト君にどう顔を合わせれば…／／／」
レイト君って、誰だろ？
絵奈「…千代、やるよ」
千代「…ええ」
２人『……メイ、レイト君って誰？』
メイ「……ふぇ!?／／／」
絵奈「色々質問するからね～？」
千代「覚悟しなさい」
メイ「（ふ、２人がココにいるの忘れてました…）うう…／／／」
カァァァァ
ｓｉｄｅ火野八幡
昨日隣の部屋の女子がうるさかったんだが…何だったんだ？
…それはさておき。
今日は北海道２日目で、俺達はスキー場に来ている。
スキーは好きかって？
…ノーコメントだ。
咲子「滑ってやるわよ～！」
風鈴「あ、その前に注意したい事があるわ」
咲子「ん、なに？」
風鈴「偶に雪が少し解けて泥溜まりになってる所があるから、そこに激突しないようにね」
確かに、激突したら大惨事になりそうだな。
咲子「了解。じゃ、滑っていく～！」
シャーッ！
咲子は雪の坂を凄いスピードで滑っていく。

咲子「そして…とうっ！」
ピョン、クルクル、スタッ！
そして空中に跳んで一回転し、着地した。
凄い技術だなおい。
八幡「お見事だ」パチパチ
咲子「ふふっ、でしょ？」
八幡「次は俺の番だな」
咲子「期待してるわ」
期待されたか。なら凄いヤツをやってみるまでだ。
八幡「…おう」
タタッ
ー数十秒後ー
坂の頂上まで登り、スノーボードを地面に置く。
八幡「…よし」
フワッ
それを浮かせ、俺が乗る。
つまり、ホバーボードだ。
八幡「エアライド！」
シャーッ！
ピョン、クルン、スタッ
イナイレのエアライドの動きを再現した。
八幡「…どうだ？」
咲子「凄くかっこよかったわよ♪」ニコッ
八幡「そ、そうか…」
満面の笑みで言われると少し照れるな…
翔「おーいお前ら、超次元雪合戦しようぜ！」
咲子「それってイナイレ風の雪合戦？」
翔「まあ、似たようなものだな。お前らもやるか？」
咲子「ええ、やるわ。ゼイル、行きましょう」
八幡「ああ」
タタッ

その後超次元雪合戦を楽しんだ。
カンタンに言えば技を使う雪合戦だった。
ー数時間後ー
八幡「今夜の夕食は何なんだ？」
咲子「ズバリ、カニ鍋よ！」
八幡「マジか。いくらしたんだ？」
咲子「軽く数万」
八幡「どうやってそんな金を？」
咲子「秘密よ♪」
八幡「そうか…」
ま、法は破ってないだろうからいいが…
メイ「あ、ココですね」
「いらっしゃいませ」
咲子「予約していた桜木です」
「はい、部屋はこちらです」
スタスタ
ー数分後ー
グツグツ…
咲子「おお…！」
色々な具材が入った鍋が煮えている。
咲子「はむっ…美味しい！」
俺も食べるか。
パクッ
八幡「…んまいなコレ！」
その後カニ鍋を楽しんだとさ。

福岡へ帰ろう

ｓｉｄｅ火野八幡

北海道の色々な所へ行き、北海道の名産物も食べた。
はっきりと言って楽しかった。
そして今日は、福岡へ帰る日だ。
風鈴「旅行は楽しめた？」
咲子「もちろん！楽しかったわよ」
風鈴「それは良かったわ。次会うのは…3月の5校衝突ね」
咲子「そうね。私はもっと強くなるわ！」
風鈴「じゃあ、私はそれを追い越せるように頑張るわ！」
ガシッ
2人は握手を交わす。
咲子「じゃあね、風鈴」
風鈴「またね、咲子」
2人『また会おう』
八幡「かっこいいなおい…」

ー数時間後ー
咲子「ふう、着いた着いた」
八幡「ん？赤坂がいるな」
メイ「…あ、レイト君！」タタッ
…ん？今室見が君付けしただと？
スタスタ
留美「おかえりです、咲子先輩と八幡先輩」
八幡「…おう」
留美「先輩、私特訓しましたよ！たとえばー」
咲子「はいはい、後は家で聞くから」
メイ「お土産です、レイト君」
レイト「ありがとう、メイさん」
メイ「どういたしまして♪」

…マジかよ。
咲子「……へえ」じー
レイト「…ん、どうかしたかい？」
咲子「私は桜木咲子よ」
レイト「あ、僕は室見レイトだよ」
咲子「で、アンタがメイに引き取られたのね？」
レイト「…うん」
どうやら訳ありのようだな。
咲子「ま、深くは聞かないでおくわ。よろしく」
レイト「うん、よろしくね」
八幡「……（その態度…コイツも追い込まれてたようだな）」
そして、俺達は帰ってきたついでに室見レイトの歓迎会をするのであった。
ー半時間後ー
♪ＭＵＬＡストーリー――きさらぎ駅
全員『かんぱーい！』カンッ
※酒は飲んでません。
咲子「ん、美味しいわねコレ」
メイ「改良した梅ジュースです。喜んでもらえて何よりです♪」
咲子「ところで、冬休みの残り数日何するの？私は八幡とイチャイチャするけど」
さらっと俺を巻き込むな。…別にいいが。
メイ「さらっと自慢しないで下さい。俺は、そうですね…」チラッ
室見はチラッと室見…レイトを見る。
翔「でな、それでな、学がー」
レイト「え、ホント!?ははっ！」
学「俺の黒歴史掘り返すなよ…」
育也「電柱に当たるのって黒歴史なのかい？」
すでに馴染んでるようだな。
メイ「…レイト君と色々したいですね」
咲子「へぇ～。…好きなの？」

メイ「ふぇ!?そ、そんな事ないでしゅよ!?」
咲子「噛んでるわよ。なるほどね…」
メイ「す、少し…いや結構好きです…」
どっち何だよ。
咲子「ふふっ、それなら応援するわよ」
メイ「…はい！」
その後俺達は飲み会（酒は飲んでない！）を楽しんだ。

始まる3学期

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「今日から3学期ね」

八幡「そうだな」

咲子「……5校衝突以外に行事あったっけ？」

八幡「知らん」

そう言えば俺5校衝突に参加するんだよな…

咲子「まあいいや。…むふ～」ギュッ

八幡「……（もう慣れた…）」

「おい、お似合いコンビだぞ」

「くぅぅ…羨ま…羨ましい！」

「隠せてないぞ」

翔「言われてるな…」

咲子「別に、被害はないしどうでもいいわよ」

絵奈「おお、凄い堂々としてるね～」

八幡「俺は恥ずかしいんだが…」

ルマ「祐樹～、ボク達も～」ギュッ

祐樹「ルマ、今はやめてくれ、恥ずか死ぬ…って聞いてんの!?」

聞いてないな。

千早「で、今日の分のプログラムは…」

千代「量的に多分2時間かかるわよ」

千早「そうか…頑張ろ」

1日2時間ぐらいやってあのクオリティなのかよ…凄えな。

ガラガラガラ。

日花「みんな、あけましておめでとう。安全に過ごせたかしら？…

そろそろ始業式だから、並ぶわよ～」

ガタガタ…

ー数時間後ー

カタカタ…

八幡「マジで裏ボスってどうやって会えるんだ？」

咲子「1部はノーコンでクリア、2部は確定ダメージがある場所以外をノーダメで倒す事よ」

2部の条件難しすぎだろ…

咲子「ちなみに日花先生は両方を初見で制覇したわよ」

八幡「っべーな先生」

戸部になっちまったよ。

八幡「それで、咲子は何処まで行ったんだ?」

咲子「今ネクロン戦の前までノーダメね」

ネクロン戦か…アレ作中2番目に手強い相手だからな…

(しかもGアルカ単体で倒す)

八幡「頑張るか…」

ー数分後ー

Gアルカ『封印・パンドラ』

咲子「…よし!」

どうやらノーダメクリアしたようだ。

八幡「今思ったが…」

咲子「何を?」

八幡「あの2人どうやって半年でこのクオリティのゲームを作ったんだろうな。しかも1日2時間で」

咲子「さあ?超人的なプログラミング能力があるんじゃない?」

八幡「だとしたら将来有望だぞ…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

戸塚「…という事があったんだ!」

葉山「それは楽しそうだね」

戸部「火野マジで凄いっしょ!」

三浦「最初に写真見た時別人だと思ったし」

八幡の事を楽しく話してる一方…

雪乃「許さないわ。よくも由比ヶ浜さんを…」

やはり雪ノ下は八幡を恨んでいた。

????「そこの君」

雪乃「?」

????「火野八幡を潰したいかね？」
雪乃「…もちろんよ。あんなゴミ、今すぐにでも死刑に処したいわ」
????「ほう。…ならば協力してやろう」
雪乃「……」

天界へ行くという急展開

ｓｉｄｅ火野八幡
咲子「今日、ヒマね…」
八幡「ヒマなら俺達はここにいないぞ？」
咲子「それもそうね…」
俺達は基地でくつろいでいた。
室見先輩達も来ている。
メイ「ところで咲子さん、ＭＵＬＡの物語どこまで進みましたか？」
咲子「１回全クリしてから、今２部の裏ボス開放を狙ってるわね」
メイ「あ、俺後少しなんですよね…」
出夢「……」スッ
翔「……」スッ
出夢「…勝った」
翔「グッ…もう一回です！」
花「あはは、もう三連敗してるよ？」
※ババ抜きです。
ババ抜きだと知らなかったら腕相撲だと思うよな。
コンコン。
絵奈「は～い」ガチャッ
しかし、誰もいなかった。
咲子「…ハァ」クルッ
日花「…よっ。ちょっと話があるのよ」
いたのは坂田先生だった。
…というかさらっと後ろに回り込んでるよな。
咲子「分かりました」
日花「昨日、とある悪魔と遭遇したの」
祐樹「悪魔？」
日花「まあ、正確には出夢みたいに悪魔化した人ね。そいつは糸で人を操る能力を持ってるのよ」
ルマ「……」

日花「そしてその能力で、２人操り人形にしてたわ」
翔「な……」
日花「その１人は…イーティングニコルの店主、ニコルよ」
メイ「えっ…!?」
あの凄いスピードで調理するコックが？
日花「これから魔界へ行ってアイツをボコすつもりなのよ。…で、私についていく人はいるかしら？」
全員『……』
咲子が行くなら俺も行くとしｙ
咲子「…私は行きます」
答えはすぐに出た。
八幡「…俺も」
メイ「俺も行きます！」
出夢「…後輩を守るためにも、行きます」
花「私も！」
祐樹「…俺も行きます」
ルマ「ボクもです！」
絵奈「私も行きます～！」
翔「…俺も」
日花「……分かったわ。最初に天界へ行くわよ。…天使化！」
ギュイイィン……！
先生を紫色のオーラが包む。
日花「…獄炎の天使、インフェルナ！」
…はっきりと言おう。
めちゃくちゃかっけえ。
咲子（見るのは２回目ね）
出夢（凄いパワーだ…）
絵奈（かっこいい～！）
日花「さて、と。このワープホールに入りなさい」
咲子「突入！ハァァ！」
咲子は変な決め台詞を言い、入っていった。

シュッ

ーー天界ー

シュッ

メイ「また来ましたね」

『火野道場』

…母さんの道場か。

日花「ここにちょっとした武器があるのよ」

俺達は道場の中に入っていった。

ー数分後ー

有美「来たわね。例の武器…『アンヘル』はここよ」

咲子「アンヘル？」

某怪力熊のボカロ曲を思い浮かべてると、母さんが何かを運んできた。

咲子「ガラスっぽい玉と…」

ルマ「鎌と…」

絵奈「破れてるキャンバス…？」

3つとも赤いな。

有美「これがアンヘルの3つの専用武器よ」

咲子「……!?」

突然、武器が動き出し…

ズゥゥッ…!

咲子「え、あ、ちょっと!?」

咲子、羽犬塚、貝塚の中に入っていった。

アンヘル

♪かいりきベアーアンヘル
side火野八幡
咲子「…ッ、グッ…」
咲子達からエネルギーが溢れ出す。
日花「…まさか！」
咲子「……!!」
カッ…！
そして光りだした。
メイ「うわっ!?」
有美「……」
祐樹「ルマ！」
スゥゥゥ…
咲子「……あれ？」
八幡「……」（。д。）
咲子はなんともなさそうな顔をしている。
いや、その見た目でか？
翔「……」
出夢「おお…」
カサッ
咲子「ん、なんか背中が…」
やっと気付いたか。
咲子「…え、翼？」
ルマ「ボクもある…」
絵奈「なにこれ～!?」
日花「どうやら、成功したようね」
咲子「成功？」
有美「鏡を見てみなさい、ほら」スッ
咲子「……WHAT!?」
咲子達の髪色は漆黒になり、紫色の目、赤い角に赤い天使の輪っか

があり、背中から天使の翼が生えていた。
コレが天使化か…
咲子「天使化してる!?」
日花「その通り。どうやら1つずつ武器を手に入れたようね」
咲子「ええと、武器って…」
有美「咲子は〝結界〟、ルマは〝鎌〟、絵奈は〝絵画〟よ。結界は、まあ、結界を張ったりする。鎌は、とてつもない威力を誇り、くらったらじわじわダメージを与える。絵画は、絵を実体化するだけでなく、属性も付与されるわ」
咲子「は、はぁ…結界ってこうかな?」スッ
ピキッ!
メイ「おお、張られてます!」
咲子「……新技思いついたわ。メイ、攻撃してくれる?」
早速思いつくのか。
メイ「あ、はい。…真狐月十字斬!」ズバッ!
咲子「……」スッ
咲子は右手に力を溜める。そして曲線状に結界を張った。
…おそらくイジゲン・ザ・ハンドの強化版だな。
咲子「…結界流し!」ガオン!
八幡「土壇場で新技とは凄いな」
咲子「ふふっ、でしょ?」
絵奈「…激流の渦!!」グルグル!
翔「え、ちょ、おいっ!?」ジャッパーン!
貝塚も新技を覚えたようだが…西新は被害者だな。
祐樹「ルマ、攻撃はやめてくれよ?」
ルマ「うん、攻撃はしないよ?かわりに…」ガシッ
羽犬塚は戸畑の腕を掴む。
祐樹「お、おい?」
ルマ「翼使って飛ぶ!」
ビューン!
祐樹「うわあああああああああああ!?」

おお、凄い速さだなー（棒）
八幡「……」じー
咲子「ん、どしたの八幡？」
八幡「咲子、翼触っていいか？」
咲子「え？いいけど…」
ゼイル「じゃ、失礼するぞ…」
サラサラ…
咲子「んっ…」
変な声出すな、勘違いされるだろ。
八幡「凄いなコレ、暖かい」
咲子「ありがと。…ところで、輪っかって触れるのかしら？」チョン
コンコン。
ガラスをノックしたような音がした。
八幡「取れるのか？」ガシッ
咲子の輪っかを掴む。
八幡「ちょっと引っ張るぞ…」
軽く引っ張ってみた。
咲子「…うわっ!?」ヨロッ
八幡「おっと」ガシッ
咲子「どうやら輪っかは取り外しできないようね」
八幡「当たり前といえば当たり前なのか…？」
色々試してみたいな。

咲子「ボッコボコにしてあげる♪」

ｓｉｄｅ火野八幡

有美「…来るわよ」

咲子「え？……！」

外から気配を感じる。しかも大量に。

日花「敵襲ね。外に出るわよ」

全員『はい！』

タタッ…

ー外ー

「出たな、入箱日花！」

日花「私は坂田日花って言ってるでしょ？耳大丈夫？」

入箱って、結婚する前の名字か？

「そんな事関係ない！やれぇ！」

『おおお！』

敵の集団が襲いかかる。

♪かいりきベアー―アンヘル（ダーリンシンドロームｖｅｒ．）

日花「咲子、ルマ、絵奈。アンタ達の力を試してみなさい！」

３人「はい！」

「喋ってるヒマなんてねえぞ、ヒャッハー！」バンッ！

弾幕が飛んでくる。

咲子「ハッ！結界流し！」ガオン！

それを咲子が受け流す。

咲子「八幡！影の袋を！」

八幡「おう！」ポイッ！

咲子「ありがと！流星…ブレードッ！Ｖ２!!」

シュゥゥゥッ！

「ぐわぁぁっ！」

「なんだこれは!?」

咲子「フッ、いい感じね」

「クッ、なめるな！…ダークボール！」

ギュン！
凝縮された黒い玉が飛んでくる。
咲子「来たわね…ハァァッ！」シュッ
ギュゥゥン…
八幡「!?」
なんだよソレ!?
メイ「……あの技は!!」
咲子「魔王・ザ・ハンド！」
ガシィン！
え、陽乃さん・ザ・ハンド？
…寒気がしたな今。

陽乃「くしゅん！…今だれかが私の事を魔王って言ったような…」
日和「何の事？」
陽乃「…いや、何でもないよ」

「なんだと!?…これならどうだ!!」ドゴォン！
今度は大きいヤツが来る。
咲子「ハァァァァ…ッ！」
ギュゥゥン…！
「なっ……!?」
八幡「マジかよ…」
千手観音菩薩を出しやがった…
咲子「…千手観音！」
ガシガシガシガシ……ガシッ！
そして咲子は攻撃をがっちりと止めた。
「クソッ…！」
咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴォォォッ！
「…ガハッ！」
咲子「さあ、次の人は…!?」
ダッ！

八幡「クソッ、囲まれた！」
「ヒッヒッヒ…」
速すぎだろコイツら!?
八幡「シャドースクリュー改！」ゴオオオオ！
「ゴォッ!?」
今ので数人倒したが、まだ囲まれている。
咲子「八幡には…手を出させないわよ！…〝超〟炎天桜舞！」ＢＬＯＯＭ！
☆説明しよう！
天使化・悪魔化ができる人は、最後の形態である〝神〟まで強化できるようになる！
絶→超→極→神
「なにぃ!?…ぐはっ」
咲子「覚悟はできてるでしょうねぇ～!?」
「ひ、ひぃ～！」
咲子「怒りの鉄槌…Ｖ３！」ドゴォ！
「ギャァァァ！」
咲子「…ふぅ、スッキリした♪」
八幡「一応俺戦えたんだけどな…」
天使化マジで強いな。

起きる正義

ｓｉｄｅ火野八幡

敵襲を返り討ちにした後、俺達は天界のとある所へ向かっていた。

咲子「気分はどう、メイ？」

メイ「まだ、悪いです…」

室見が体調を崩し、さらにエネルギーが溢れ出しているからである。

日花「そろそろ『脳の木』に着くわよ」

行き先は脳の木。近くにいたら精神的な負担を下げてくれるらしい。

ー数分後ー

♪すりぃ―ノルア・ドルア・エー

日花「着いたわよ」

八幡「……はぁ」

木の葉の部分が脳に見えるから脳の木ってか。

出夢「気分は良くなったかい、メイ？」

メイ「……あれ？」

ポワン

ナオ「いきなり出された!?」

ヤエ「なんか勝手に…」

クミ「何が原因!?」

ニヨ「お、落ち着いて…」

室見の別人格達が出てきた。

いきなり出されて焦っている。

日花「……（これって…）」

ピカッ…！

八幡「おい、脳の木が光りだしたぞ！」

ピカッ…！

メイ「お、俺も光って…!?」

ビカァ!!!!

メイ「うわぁぁぁ!?」
室見と脳の木を眩しい光が包む。
何だよコレ。強制ミキシマックスかよ!?
シュウウウ…
メイ「……」
ナオ「これは…」
ヤエ「なんともない…?」
クミ「???」
ニヨ「…えっ!?」
5人『翼!?』
八幡「…わお」
日花「今度はメイ達が天使化したようね…」
メイ「オ」
ナオ「キ」
ヤエ「セ」
クミ「イ」
クミ「ギ」
5人『昼の天使、オキセイギ!』バァン!
……何だ今のポーズ。
絵奈「おお、決まってる〜!」
翔「ちゃっかり決めポーズもしてやがる…」
決まってるのかよ。俺がおかしいだけなのか?
(そうです)
メイ「あ、気分も良くなりました!というか絶好調です!」
ブワッ!
メイ「もう新技もできます!」バサッ
咲子「え、まさか…」
室見(本体)は空へ飛び上がり、頭上にエネルギーを凝縮した玉を作る。そして…
メイ「…ゴッドノウズ!」ドゴォ!
おいおいちょっとまてーい。

そこもイナイレかよ。
咲子「私!?…魔王・ザ・ハンド!」バシッ!
シュゥゥゥ…
メイ「止めましたか。今度はあなたの番です、咲子さん」
咲子「私?…分かったわ。フレイムウェイブ!」グルグル
咲子はグルグル回って火を思いっきりチャージする。
咲子「チャージ完了!絶嵐爆熱ハリケーン!」ゴォォォォッ!
炎の渦が室見達に襲いかかる。
メイ「5人で力をあわせて止めます!ハァッ…!」
室見の背後に膨大な量のエネルギーが集まる。そしてそれが銀髪マントのマジンになる。
メイ「ゴッドキャッチ!!」ガシャーン!
そして咲子の最強技をガッチリと止めた。
咲子は魔王・ザ・ハンド、室見はゴッドキャッチか…
インフレヤバそうだな…

今度は八幡が…！

ｓｉｄｅ火野八幡

脳の木の地下は魔界に繋がっているらしい。

日花「ここから魔界へ行くわよ」

咲子「えっと、どうやってですか？」

日花「こうよ。…ハッ！」ドゴォ！

地面に穴が空く。

メイ「ええ!?」

日花「この下は空洞なのよ。突入、ハァァ！」ピョン

そして先生は穴の中に飛び込んだ。

咲子「じゃ、じゃあ私も！」ピョン

八幡「…俺も飛び込むか」ピョン

ヒュゥゥゥ…

穴の中に落ちていく。

しばらくすると、落ちていく先に空間があった。

八幡「……？」スタッ

♪すりぃ―ノルア・ドルア・ビー

日花「ここが魔界よ」

ルマ「おお…」

俺達の前には逆さの脳の木があった。

……!?

ドクン

咲子「八幡!?」

八幡「何だ、この感覚はッ……！」

咲子「まさか、メイみたいに……！」

八幡「うっ、うおおおおおおお！」

ギュオオオ！

俺は闇に包まれた。

シュゥゥゥ…

八幡「ハァ、ハァ…。…治癒の悪魔、ドーズ！」

言葉は自然と口から出ていた。
悪魔化、したのか…？
咲子「かっこいい…！／／／」
八幡「ん、どうした咲子？」
咲子「いや、えっと、あの…／／／」
八幡「俺が悪魔化したのは分かるが、なんか様子がおかしいぞ？」ズイッ
熱か？
咲子「な、なんでもないわよ！（ち、近い／／／）」カァァァ
全員（イチャイチャしてんじゃねえ…）
日花「…コホン。どうやら八幡が悪魔化したようね。しかも治癒の悪魔…回復系の技を使うのかしら？」
八幡「一応そのようですね。新技は…ハッ！」ブワッ！
翼に影を纏う。
八幡「デビルバースト！オラァッ！」ギュゥゥン！
そしてそれを影の塊にし、蹴った。
…塊はクミに飛んでいく。
クミ「え、アタイ!?ゴットキャッチ！」ガシィン！
八幡「止められたか」
花「連続で変身するね」
日花「ええ、これで私含め、メイ達を1人と数えて8人変身できるわね」
…ん？7人じゃね？
咲子「8人？私、先生、メイ、ルマ、絵奈、八幡、出夢先輩…もしかして藤崎先輩も？」
あ、なるほど、そういうことか。
花「その通り♪冬休みの間にできるようになったの♪…変身！」
ギュオオオ！
花「猛毒の悪魔、ベノム！」
藤崎先輩には黒い翼があり、目はマゼンタになっていた。
メイ「可愛いですね」

花「でしょ？メイちゃん達も可愛いよ♪」
メイ「え、お、俺は…」
日花「はいはいそこまでよ。そろそろ進みましょ」
バサッ
俺達は空を飛んで移動した。空を飛ぶのって気持ちいいんだな。
…飛べない人達（西新と戸畑）はどうしたのかって？それは貝塚と羽犬塚がおぶって運んだ。
日花「そろそろ着い…来るわね」
メイ「また敵襲ですね」
クミ「ボコボコにしてあげるよ！」

一方的な暴力

♪Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｓｋｙ―Ｍｅｃｈａｎｉｃａｌ　Ｐｏｗｅｒ
ｓｉｄｅ火野八幡
日花「敵襲ね。行くわよ！」
全員『はい!!』
「へっ、こちとら数百人いるんだ、ぶっ潰せ！」
「うおおおお！」
咲子「ハァッ！超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！
「ぐあああ！」
「くっ、くらえー！」
ヒュンヒュン！
敵は大量の弾幕を放ってくる。
咲子「千手観音！」
ガシィン！
「隙あり！」
シュッ
咲子「しまっー」
ドゴッ！
八幡「咲子には指一本触れさせねえよ。シャドースクリュー改！」
ゴォォォォ！
「グハッ！」
八幡「咲子、一気に蹴散らそうぜ」
咲子「いい考えね、採用よ」
八幡「行くぞ！流星…」ポイッ
影の塊を空中に投げる。
咲子「…ブレード…Ｖ２！」ドガッ
それを咲子が蹴る。
シュゥゥッ！
「うわあああっ！」
「なんだこれーーー!?」

咲子「怒りの鉄槌Ｖ３！」ドゴッ
八幡「デビルバースト！」ズガァン！
「くっ、くそぉ…」
「コイツら強すぎる…」
なら、襲撃してこなければよかったんだろうが。
咲子「このままフルボッコにするわよ！」
メイ「真狐月十字斬！」ズバァッ！
「ギャァァ！」
ナオ「ブレイズスクリュー！」ゴォォォッ！
「ぐふぅっ！」
ヤエ「真岩なだれ！」ドゴドゴドゴッ！
「よ、よけろー！」
クミ「ボルトタイヤ！」バチィッ！
「あべべべべっ！」
ニヨ「激流ストームＧ４！」バッシャーン！
「流される～！」
メイ「連携を決めますよ！」
ナオ「了解！空…！」ドゴッ！
ヤエ「前…！」ドガッ！
クミ「絶…！」バチッ！
クミ「後…！」ズバッ！
メイ「……改ッ！」ドゴォォ！
「が、はっ…！」
メイ「ふふっ、決まりました！」
室見達も調子がいいようだな。
ルマ「バーニングサイス！」ズバッ！
「痛えええ！」
祐樹「サンダーラッシュ！」バチィッ！
「じびびびびッ！」
ルマ「ハァァッ！Ｘブラスト！」
シュゥゥゥッ！

「ギャァァァァ！」
祐樹「クソッ、キリがねえな…」
咲子「……！いい事思いついたわ」
咲子は貝塚と羽犬塚を呼ぶ。
咲子「ルマ、絵奈と連携技やるわよ」
絵奈「一気にカタをつけよう～！」
ルマ「え、どんな技？」
咲子「……よ」
ルマ「なるほど…いいね、やろう！」
咲子「よし…ＧＯ！」
ダッ！
３人は走りながらエネルギーを溜める。そして…
３人『グランドファイア！』
火の玉と化したエネルギーを同時に蹴り飛ばす。
ドシュウウウッ!!
火の玉は辺りを焼き尽くしながら突き進む。
「ぐぁあああああっ！」
「に、にげろー！」
「撤退だー！」
ダダダダダー
咲子「…ふう。私達の勝ちね」
日花「また新技も生み出したようね」
咲子「はい、私達だったらこの技が合うと思ってました」
日花「なるほどね…さ、進みましょ。そろそろ敵の本拠地に着くと思うわ」
そして俺達は空を飛んで移動した。
ーーー

氷の天使

ｓｉｄｅ火野八幡
日花「あと２キロぐらいね」
八幡「……！何か来るぞ！」
ヒュンヒュン！
咲子「結界流し！」ガオン！
咲子が結界を張り、飛んできた弾幕を受け流した。
絵奈「氷…？」
日花「相手に氷使いがいるのかしら？」
パキィッ！
氷の塊が飛んでくる。
八幡「全部俺狙いか。ブラックドーンＶ２！」ギュゥウン！
今思ったが、防御技がないんだよな…
「避けるのね、産業排出物君」
そのあだ名…
八幡「何でお前がいるんだよ…」
マジで懲りないなコイツ。
咲子「ッ…！」ギリッ
雪乃「あら、私がココにいる理由が分からないのかしら？」
十中八九俺を倒しに来たんだろうな。
てか天使化してるな。
メイ「天使化までして八幡さんを倒しに来たんですね…」
八幡「悪人に協力するとは、堕ちたものだな」
雪乃「…黙りなさい」スッ
ギュイィン…
咲子「どうするの、八幡」
八幡「……もうどうしようもないだろ。先生」
日花「…好きにしなさい。もちろん後遺症を残しちゃダメよ」
先生の答えがソレかよ。
八幡「分かりました」スッ

雪乃「死になさい…アイスビーム！」ビビビッ！
うわ出た、冷凍ビーム。
八幡「狐月十字斬！」ズバァッ！
バリィン！
雪乃「なっ…」
ん？今のビーム、脆いな。
八幡「デビルバースト！うぉらっ！」ギュゥゥン！
雪乃「アイシクルバリア！」ピキッ！
シュゥゥゥ…
防御は固そうだな。
ルマ「バーニングサイス！ハァッ！」ズバッ
雪乃「……」ニヤリ
アイツ、そんな顔するヤツだったか？
八幡「羽犬塚、距離を取れ！」
ルマ「え？うん」
雪乃「…チッ」
今度は舌打ちかよ。性格が大部変わってるな。
咲子「超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！
雪乃「なんですって!?…ガハッ」
当たったか。…もしかして。
八幡「おい咲子」
咲子「何？」
八幡「俺が……からお前らで……をやれ」
咲子「…分かったわ」
雪乃「戦闘中にこそこそ話してるヒマなんてないハズよ？」
八幡「戦闘？何時何分何秒地球が何回回った時に戦闘って言ったんだ？」
小学生の頃よく言ってたヤツを言ってみる。
雪乃「ついに脳も腐ったのかしら？」
八幡「いやいやそれはお前だろ」
雪乃「…これは重症ね。すぐに治さないと…」パキィッ…

ヤツはエネルギーを溜める。
八幡「…今だ、お前ら」
雪乃「!?」
3人『オーケー！グランド…ファイア！』ゴォォォォ！
メイ「チェイン！ゴッドノウズ！」ドゴォ！
雪乃「なっ…卑怯よ！」
八幡「クズ相手には卑怯で結構。次目覚めるのは刑務所だ」
雪乃「私が…この私がぁぁぁっ！」
ゴォォォォォォォ！
日花「雪ノ下雪乃……薬物所持で逮捕よ」
アイツ、ポケットにクスリ入れてたのかよ。マジで堕ちたな。

フェイク

ｓｉｄｅ火野八幡

日花「雪ノ下雪乃……薬物所持で逮捕よ」

アイツ、ポケットにクスリ入れてたのかよ。マジで堕ちたな。

八幡「これで懲りたらいいんだが…」

日花「…ん？待って」

咲子「どうしました？」

日花「この人…雪ノ下雪乃じゃないわ」

フッ…

全員『!?』

変身が解け、雪ノ下だったヤツは別人の姿になった。

翔「俺達は騙されたっていうのかよ…」

日花「私でも今気付いたわ…」

先生は確か一度もアイツらに会ってないよな？

それはしょうがないと思うんだが。

メイ「じゃあ、本物は何処に？」

ルマ「本拠地にでもいるんじゃない？てか、元凶だったりして」

日花「それは違うわ。元凶は別の人だもの。恐らく元凶と手を組んでるわ」

タチが悪いなソレ。

日花「ま、とりあえず進みましょ。その内会うの思うし」

バサッ…

――――――

そのため、右の道は俺、咲子、先生、貝塚、西新が行き、左の道は室見先輩、藤崎先輩、室見、戸畑、羽犬塚が行くことになった。
ー数分後ー
咲子「…ゾンビ？」
作業着と工事用のヘルメットを着ている男性がいた。
????「……」
日花「操られてるわ、気をつけて」
ノーマン「…俺はノーマン。…お前らを追い返す」
♪煮ル果実―イエスマン
…ブワッ！
ノーマン「屍人の悪魔、イエスマン」
八幡「悪魔化できるみたいだな…」
咲子「関係ないわ。…ブレイズスクリュー改！」ゴォォォッ！
ノーマン「ほう…フンッ！」
ノーマンは懐からゴルフクラブを出し、それで対抗する。
てか何処にそれが入るスペースがあったんだ？
ノーマン「…うらぁ！」
カキィン！
咲子「なっ!?」
八幡「跳ね返しただと!?」
ヒュゥゥン！
咲子「ッ、まずいー」
絵奈「咲子危ない！激流の渦！」バッシャーン！
貝塚の咄嗟の行動で咲子が助かった。
咲子「危なかったわ、絵奈ありがと」
絵奈「お礼は倒してからでいいよ～」
ノーマン「……来い」
翔「言われなくても！ホワイトブレード！」パキィン！
西新は氷の弾幕を放つ。
ノーマン「この程度なら…ハッ！」
カキィン！

しかし跳ね返された。
翔「はぁ!?…スノーエンジェル!」
…キィン!
なんとか防いだか。
八幡「遠距離攻撃が効かないのか…」
咲子「これは中々厄介な敵に遭遇したわね…」
日花「……（これは中々の見所になるわね。咲子達は倒せるかしら？）」

ノーマン

♪煮ル果実―イヱスマン
ｓｉｄｅ火野八幡
ノーマン「屍人、屍人、君の隣で…」シュッ
咲子「消えた!?」
八幡「いや、動きが素早いだけだ！」
ノーマン「屍人、屍人、悪魔と踊る」
咲子の後ろから声がする。
咲子「クッ、怒りの鉄槌Ｖ３！」ドゴォ！
そこに咲子が攻撃をすると…
ノーマン「…当たっちまったな」
攻撃が当たったノーマンが立っていた。
咲子「やっぱり近距離攻撃が有効のようね」
八幡「そうか、ならまかせろ！シャドースクリュー改…近距離バージョン！」
ドゴドゴドゴッ！
竜巻旋○脚のような感じで影を纏った連続蹴りをする。
ノーマン「グッ…」
八幡「効いたようだな」
ノーマン「今のは痛かったぞ…ッ！」シュッ
ノーマンはまた消えた。
咲子「……」
咲子は集中力を高めて気配を探る。
ノーマン「…舞ってるだけの朴念仁さ」
咲子「…そこっ！」シュッ
ノーマン「おっと」パシッ
咲子「掴まれた!?」
ノーマン「…オラァ！」
ドゴォン！
ノーマンに腕を掴まれ、咲子は地面に叩き落とされた。

咲子「ガフッ…！」
八幡「咲子！」ダッ
咲子「痛い……」
俺は咲子に駆け寄る。
咲子「普通の状態だったらヤバかったわね」
八幡「咲子、大丈夫か!?今すぐ回復してやるぞ!!」
ギュィィン…
八幡「…よし、オーケーだ」
咲子「ハァ、ハァ…ありがと、なんとか戦えるわ」
八幡「…無理するなよ？」
咲子「もちろんよ」
ノーマン「…話は終わったか？」
翔「敵の会話が終わるのを待つなんて案外律儀なんだな」
ノーマン「待ってるだけの朴念仁さ」
さっきから『イエスマン』の歌詞をずっと言ってるな…
絵奈「オーバーサイクロン！」バッシャーン！
ドスン、ドスン！
ノーマン「これは…厄介だな…！」シュッ
ノーマンはまた消えようとするが、動物（貝塚が描いた）に囲まれてあまり動けない。
咲子「隙あり！怒りの鉄槌Ｖ３!!」ドゴォ！
ノーマン「なっ、グハッ！」
ノーマンは咲子の攻撃に当たり少し怯んだ。
八幡「……ダメージは…」
ノーマン「この野郎…俺の頭にたんこぶができたじゃねーか！」
モワーン
ノーマンはヘルメットを外すとそこには見事なたんこぶがあった。
翔「おお…」
ノーマン「そろそろ本気を出す。後悔はするなよ…ッ！」シュッ
また消えたな。
八幡「くっ…」サッ

そして俺の目の前に来た。
ノーマン「オラオラオラオラァ！」ドゴドゴドゴッ！
速いなおい！
八幡「コレはヤベーな…！」ササッ
ギリギリ避けれるスピードだが、あまり持たん！
咲子「超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！
ノーマン「効かねえよ！」カキーン！
絵奈「翔、行くよ！」
翔「おう！ハァァァァッ…！」
パキパキッ…！
２人『ホワイトダブルインパクト！』パキィン！
氷の玉はノーマンに命中した。
ノーマン「まずい、動け…」
八幡「狐月十字斬改！」ズババッ！
ノーマン「ガハッ…クソが！」シュッ
ノーマンは再び消える。
日花（…そろそろかしら？）
ノーマン「ハハッ、トドメだ！」シュッ
気付いたらノーマンは咲子の目の前で拳を振りかぶっていた。
咲子「なっー」
日花「オラァ！」ドゴッ！
ノーマン「グハッ!?」
咲子「先生!?」
日花「見るだけにする予定だったけど…今のアンタ達には強すぎるようね。後は私に任せなさい」
咲子「…はい！」
ノーマン「やっと動いたか…先生」
日花「まさか教え子の目を覚ますことになるとはね。私でも予想できなかったわ」
教え子なのかよ。
ノーマン「…フンッ！」シュッ

ノーマンは恐らく全力のパンチをお見舞いするが…
日花「遅い」パシッ
ノーマン「!?」
先生はそれを軽々と止めた。
日花「久々にこの技を使うわね…」ボッ
先生は手に火を付ける。
日花「…炎天掌!!」ズガァン！
そして強力な掌底を叩き込んだ。
ノーマン「か、はっ…！」バタン
フッ…
ノーマンは悪魔化が解除され、そのまま気絶して倒れた。
八幡「……」
強すぎだろ、先生。

本物か？

ｓｉｄｅ火野八幡

ノーマンを（先生が）倒し、室見達と合流した後、道を進んだ先には建物があった。

日花「前と変わらないわね。入りましょ」

…先生、過去にもココに来たことがあるのか。

スタスタ…

中では敵の集団が待ち伏せしていたが…

咲子、八幡『流星ブレードＶ２！』

翔、絵奈『ホワイトダブルインパクト！』

咲子、ルマ、絵奈『グランドファイア！』

大技の連発でボコボコにした。

日花「…来るわよ」

…スタッ

雪乃「……」

また出たな。

八幡「今度は本体か？」

雪乃「教えるワケないでしょう」

咲子「でしょうね。超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！

咲子が先制攻撃をした。

雪乃「アイスリフレクター」ピキッ！

キィン！

メイ「真冥冥斬り！」ズバッ！

雪乃「……」サッ

室見の攻撃も避けられた。

八幡「さっきから口数が少ないな」

コイツも偽物か？

雪乃「アイスビーム」パキッ！

冷凍ビームか。

咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴォォォォ！

咲子))))))（（（（雪乃
威力は咲子が勝った。
雪乃「ッ、アイス「おせぇよ」!?」
目の前まで移動した。
八幡「シャドースクリュー改、近距離バージョン!」ドゴドゴドゴッ!
雪乃「ガァッ!」
顔面を狙ってしこたま蹴る。
顔を見る度にイライラしてたからな。
咲子（うわ、八幡怒ってるわね…）
八幡「弧月十字斬改!」ズバッ!
雪乃「グハッ…」バタン
フッ
メイ「また偽物ですね…」
八幡「あの野郎…」
人を使って俺を倒しにくるとは、相当な臆病者のようだな。
八幡「俺の事をクズとかゴミとか言っておいて、自分の事を棚に上げる…ふざけんなよ」
本体は何処だ？
日花（八幡がキレたらヤバそうね…）
「あら、怒るべきなのは私なのよ？」
スタッ
雪乃「さっさと死になさい」
……ッ
八幡「クソ野郎が…!」
俺の視界から消えろ…!
八幡「ブラックドーンＶ２!」ギュゥウン!
出夢「（攻撃した方がよさそうだね）グラビティスラッシュ!」ズシッ
雪乃「アイスリフ…!?」
影分身。

八幡「オラァ！」ドゴッ
後ろに回り込んで蹴りを入れた。
雪乃「ッ、卑怯な…」
八幡「お前が言うな…シャドースクリュー改！」ゴォォォォ！
雪乃「アイスビーム」
メイ「分身！」ポワン
何するんだ…？
５人『空前絶後！』
室見（とその分身達）は連携攻撃でヤツを地面に突き落とした。
雪乃「ガハッ…！（この、私が…ッ）」
咲子「怒りの鉄槌Ｖ３」ドゴォ！
雪乃「ッ!?」サッ
咲子「計画通りよ。先輩！」
花「オーケー…ベノムゾーンＶ３！」毒ッ…
毒のフィールドができた。
俺達は空を飛んでるから問題ない。
雪乃「ぐ…がっ…（なんで…私が…）」
八幡「確か、咲子が地獄を見せるとか言ってたよな？」
咲子「ええ…」
八幡「一生のトラウマを植え付けてやるよ」
ぶっ潰す。

やりすぎ

ｓｉｄｅ火野八幡

八幡「一生のトラウマを植え付けてやるよ」

ぶっ潰す。

八幡「囲め」

ギュン…

逃さないように影でヤツを囲む。

雪乃「あ…」

八幡「コレだけダメージをくらって姿がそのままなら、恐らくは本体だろうな」

雪乃「…ッ（バレた…!?）」

明らかに動揺してるな。

八幡「咲子」

咲子「何？」

八幡「コイツを空中に向かって千手観音で投げろ」

咲子「……やりすぎはダメよ？」

八幡「ああ…」

それは約束できない。

咲子「…分かったわ。千手観音！」ガシッ

雪乃「離、して…」

咲子「それっ！」ポイッ

……ココだ！

八幡「フンッ！」ドッ

空中に飛び上がり、ヤツの頭上で影を纏う。

八幡「斬虐殺」

…ドギュウン！

両足に全体重を乗せ、ヤツを地面に落とし込み、叩きつけた。

雪乃「ガフッ…！」ゴキッ

日花（あ、今ので骨折れたわね…そろそろやりすぎかしら？）

八幡「……」ギュィィン

とりあえず気絶しない程度に…
ガシッ
日花「やめなさい」
先生に腕を掴まれる。
日花「流石にやりすぎよ。アンタも逮捕されるわ」
八幡「…分かりました」スッ
一生のトラウマを植え付けるつもりだったが…
八幡「命拾いしたな」
雪乃「……」
気絶したか。
ゴソゴソ
日花「…ハァ。雪ノ下雪乃、薬物所持で逮捕よ」
本体も持ってたのか。
…そう言えば、陽乃さんは巻き込まれてなければいいんだが…あの人だしなんとかなりそうだな。
ー数分後ー
ヤツを搬送した後、俺達はある扉の前まで来ていた。
日花「ほぼ確実にこの先の大広間に親玉がいるわ…」
ガラガラ…
????「やっと来たか…」
日花「倒しに来たわよ、マリオネ」
糸を絡めている悪魔がいた。
マリオネ「フン、僕は強くなったんだ、カンタンには倒されない！」
昔も戦った事があるのか？
♪Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｓｋｙ―Ｆｏｒｅｓｔ
マリオネ「かかって来な！」
咲子「言われなくても！超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！
しかし、マリオネは動かない。
マリオネ「…効かないね！」
スパァン！
咲子「なっ!?」

い、今起こった事をありのままに話すぜ…
ヤツは糸で咲子の超炎天桜舞の弾幕を全てスパッと斬った！
アレはただの糸じゃできないだろう…
もっとヤバいヤツの片鱗を見た気がしたぜ…
（完全にジョジョネタ）
絵奈「コレなら斬られないよ～！激流の渦！」バッシャーン！
今度は貝塚が攻撃する。しかし、マリオネはまた動かない。
マリオネ「ククッ…糸結界！」ピキィン！
糸の結界が激流の渦を弾き返した。
咲子「相当丈夫な糸ね…」
日花「頑張りなさい。もしもの時は私がやるから」
つまりその時までは人任せかよ。

ＶｓマリオネＶ①

♪Ｒｏｌｌｉｎｇ　Ｓｋｙ―Ｆｏｒｅｓｔ
ｓｉｄｅ火野八幡
咲子「ルマ、絵奈、行くわよ！」ダッ
３人が並び立つ。
３人『グランドファイア！』
どうだ…！
ゴォォォッ！
マリオネ「ほう…！」
ブチッ！
大きな火球は糸の結界を焼き切り、マリオネを攻撃した。
マリオネ「…中々いい攻撃だ」
ルマ「ダメージがほぼない!?」
メイ「かなり厄介な敵ですね。ゴッドノウズ！」ギュゥゥン…！
八幡「デビルバースト！」ギュォォォ…！
出夢「グラビティスラッシュ！」ドギュゥン！
花「ベノムゾーンＶ３！」毒毒ッ！
一斉攻撃がマリオネに襲いかかる。
マリオネ「流石にこれはまずい…ストリング・ルーム！」
パラパラッ…！
マリオネは糸を部屋中に撒き散らす。
日花（…この戦法は昔と同じね。咲子達はどう対策するかしら？）
糸が壁にひっついていく。…なるほどな。
八幡「お前ら空中に行け！地面にいたら糸に絡まれるぞ！」
咲子「分かったわ！」バッ！
祐樹「……」
ルマ「祐樹、どうしたの!?早く掴まって！」
祐樹「う、うおおおおおおお！」
翔「うおおおおおおおお！」
ギュォォォ…！

２人から激しいオーラが吹き出した。
マリオネ「何ッ!?」
祐樹「…電雷の悪魔、スパーク！」
翔「氷雪の悪魔、ブリザード！」
バァン！
このタイミングで２人とも悪魔化か…
絵奈「おお…！」
メイ「これで全員変身してますね！」
出夢「だね」
マリオネ「くっ、どいつもこいつも…！」
翔「この状態で…ノーザンインパクト！」パキィン！
祐樹「絶ボルトタイヤ！」グルグル！
氷塊と電気のタイヤが襲いかかる。
マリオネ「…二重糸結界！」ピキィン！
マリオネは二重の結界をはる。が…
バリィン！
２人の攻撃に耐えられず、糸は砕け散る。
…なるほど、初登場補正か。（メタい！）
マリオネ「なっ…ぐわぁっ！」ドゴォッ！
日花（コレなら…勝てそうね）
咲子「ブレイズスクリュー改！」ゴォォォッ！
ルマ「チェイン！Ｘブラスト！」シュゥゥッ！
メイ「チェイン追加します！真狐月十字斬！」ズバァッ！
威力をかなり上乗せした攻撃がマリオネに向かって飛んでいく。
マリオネ「……フンッ！」シュッ
ズバッ！
ルメ「あの威力の攻撃を…」
咲子「斬った…!?」
マリオネ「調子に乗るのはそろそろやめてもらおうか」
さっきまでは本気じゃなかったってか？
出夢「……（雰囲気が変わった…！）」

マリオネ「ストリングボム！」
ボスッ！
糸の玉が飛んできた。
咲子「魔王・ザ・ハンド！」ガシィン！
玉を止めようとするが…
ギリギリ…
咲子「痛っ!?」
咲子は何故かダメージを受けてしまった。
…糸が細いからか？
ヒュゥゥ！
咲子「…結界流し！」ガオン！
ギュルルルル！
八幡「厄介な攻撃だな…」

ｖｓマリオネ②

ｓｉｄｅ火野八幡
ヒュウウン！
糸の玉が大量に飛んでくる。
メイ「こんな玉…全て斬ります！」キンッ
咲子「いやいやどうやって？」
メイ「こうです！…斬一閃！」
スゥーーーーーーーーーーーーッ。
メイは一直線に進む。すると…
ズバ
ーーーーーーーー
ッ！
咲子「ファ!?」
八幡「!?」
文字通り、空間ごと斬れた。
…何だよ今の!?
メイ「俺の能力です！」
八幡「んなバカな…」
何でも斬る能力か？
マリオネ「クソッ…もっと、もっとだ！」
ボスボスッ！
マリオネはさらに多くの糸の玉を飛ばしてきた。
日花（うん、数を増やせば勝てると思ってるバカね）
翔「めんどくさい攻撃だな。スノーエンジェル！」シュッ！
祐樹「…ルマ！」
ルマ「え、なに？」
祐樹「ヒートタイヤとボルトタイヤで連携技をやるぞ！」
ルマ「…うん！」
何だ？
２人『ハァァァァッ！』ギュルルルル！

２人は並び、力を溜める。
マリオネ「何をする気かは知らんが、させない！オラァ！」ボスッ！
メイ「邪魔はさせません！超火斬り！」スパァン！
…加勢するか。
八幡「シャドースクリュー改！」ゴォォォォ！
マリオネの攻撃を阻止する。
祐樹「行くぞ！」
ルマ「オーケー！」
ギュォォォ！
２人『トラフィック・ジャム！』
ブロローッ！
八幡「……は？」
大量の車両が現れる。
…火や雷で出来てるが。
マリオネ「なん、だと…!?」
一斉にマリオネに襲いかかる。
シュールだなおい。
マリオネ「ぐわあああああっ！」愚者ッ
日花「……気絶したわね」
咲子「勝ちって事ですか？」
日花「ふふっ、そうよ」
ほぼ全員『やったーー！』
八幡「……」
まあ、倒せたからいいか。
ーーー

俺と咲子は今イーティングニコルで昼飯を食べている。
…ただで。
無料。０円。ロハ。
ニコルさんによると、恩返しらしい。
咲子「じゃあ、遠慮なく」
…まあ、ココの料理は美味いしな。
ガラガラッ…
ニコル「いらっしゃいませ～って、ノーマンか」
ノーマン「よう、兄貴。…ん!?」
八幡「…どうも」
ノーマン「おおっ、お前らじゃないか！こないだ助けてくれてありがとな！」
八幡「お礼はいらないですよ。当然の事をしたまでです」
ノーマン「その当然の事ができない人の方が多いんだぜ？」
正論だな。
ゼイル「…ですね」
ニコル「まあまあそこまでにしといてよ。で、何か頼むのかい？」
ノーマン「おう、ポークステーキで」
ニコル「オーケー」
ジュー…
ー数十分後ー
咲子「ごちそうさまでした、美味しかったです！」
ニコル「ありがとう、また来てね」
八幡「はい、また来ます！」
ノーマン「ん、そんじゃあな！」
２人は結構いい人だった。
その後咲子とのほほんと過ごしたとさ。

バトルデー！影風ｖｓ魔王①

ｓｉｄｅ火野八幡

今日はバトルデー、他学年に勝負を申し込める日である。

俺が申し込んだ相手は…その内分かる。

八幡「…行くか」

スタスタ

千早『さあ入場したぞ～、１年３位の〝影風〟、火野八幡選手だッ！』

千代『１１月に転校してきて、すぐに３位になった男です！』

…アイツら、ホントどうやって実況者になってるんだ？

そして反対側から相手が出場する。

千早『反対側からも、４年２位の〝魔王〟雪ノ下陽乃選手が出場した～！』

千代『火野選手が何処までくらいつけるのか見所です！』

…一応勝つつもりだがな。

陽乃「火野くん、今回はよろしくね？」

八幡「はい…よろしくお願いします」

ちなみにだが、勝敗は場外、または気絶で決まる。

千早『バトル…スタートォ！』

先手必勝だな。

八幡「シャドースクリュー改！」ゴォォォォ！

陽乃「……飛斬舞♪」シャッ

飛斬舞だと!?

（風斬→風斬・鎌鼬→飛斬舞）

俺の攻撃はみじん切りにされた。

八幡「ブラックドーンＶ２！」ギュゥゥン！

陽乃「じゃあコレかな？ハッ！」

ゴォォォォ！

…おいおいちょっと待て。

陽乃「魔王・ザ・ハンドＧ３！」ガシィン

八幡「陽乃さん・ザ・ハンドを直で見る事になるとは…」
まさか咲子、陽乃さんに教えてもらったのか？
陽乃「今聞き捨てならない事を言ったと思うけど、許してあげる。
…行くよ？」
シュッ
八幡「……ッ」
速いな。目が追い付かん。
…なら。
八幡「飛ぶ」ピョン
空中に浮いておけば問題ない。
陽乃「甘いよ？」シュッ
八幡「!?」
陽乃「えいっ！」ドゴォ！
後ろからストレートをくらった。
八幡「かはっ…！」
空中でも高速なのかよ…！
陽乃「どうしたの？もしかしてもうやられそう？」
八幡「大丈夫ですよ…！」ドッ
魔界で使ったあの技…使うか。
陽乃さんだったら多少のダメージで済むだろうし。
八幡「斬虐殺…！」ズシャッ！
陽乃「!?」
八幡「オラァ！」ドゴォ！
陽乃「グッ…!?」
少しは効いたか。
八幡「デビルバースト…」
技の構えを取る。
陽乃「魔王・ザ・ハンド「だろうな」…え？」
ただの空振りだ。
八幡「ブラックドーンＶ２！」ギュゥウン！
陽乃「ええちょっと!?」ドガッ！

技の後隙で動けなかったか。
八幡「どうです、俺の攻撃は？」
陽乃「あはは…最高だよ」シュッ
八幡「……」
…そこだ！
サッ
陽乃（あれ？…もう一回！）シュッ
サッ
陽乃（何で当たらなくなったの!?）
八幡（気付いてないみたいだな）
小さな影を陽乃さんの中に入れたんだ。
…陽乃さんの中に入れるって、ワードがな…気にしないでおくか。
陽乃「（もうイラついたよ）…天使化」カッ
八幡「!?」
陽乃さんは光に包まれた。

魔王の力！影風ｖｓ魔王②

ｓｉｄｅ火野八幡
陽乃「天の王、ヨウテイ！」
陽乃さんが天使化した…マジか。
八幡「なら、俺もしますよ。悪魔化！」カッ！
シュウウウ…
八幡「治癒の悪魔、ドーズ！」
陽乃「火野くん…行くよ？」
八幡「どうぞ」
陽乃「…ハッ！」シャッ
…あの構えは！
陽乃「レーヴァテイン！」ドゴォ！
エクスカリバーの火属性版か。
（イナイレで調べてみて）
それよりどう防御する……！
八幡「防御しなけりゃいいじゃねーか。…フンッ！」ギュン！
影をＣの形で出す。
八幡「うおおおおっ！」
ギュルルルル！
なんとか跳ね返したか。
咲子のイジゲン・ザ・ハンドを応用してみた甲斐があったな。
陽乃「跳ね返したんだ…じゃあ私も…！」ギュィィン
八幡（何をするんだ？）
陽乃「スカイ…」シュルル
回転する。
陽乃「…ダイブ！」ズガァン！
そして俺が跳ね返したレーヴァテインに足を引っ掛け…
陽乃「ハァァァァ！」ギュゥン！
力を上乗せして受け流してきただと!?
八幡「コレは、避けるしか「遅いよ？」…なっ!?」

陽乃「ほいっ」スッ
押された。
八幡「は～!?」
ドゴオオオ！
弾幕は腹に直撃した。
八幡「グフッ…！」
い、痛え…！
骨が数本折れたぞ…
八幡「……ッ」ヨロッ
陽乃「お？もう無理かな？」
八幡「…グッ」
姿勢をなんとか戻す。
…この技を使うか。
八幡「ハァッ…！」ビュゥゥン
陽乃「……？（何を…）」
八幡「吹き飛べ…ストームゾーン！」
ギュオオオオオッ！
俺を中心に嵐が発生する。
陽乃「!?…うっ……」
もう、無理…みたいだな…
バタン

――

……ハッ！
八幡「…知ってる天井だ」
保健室か…ん？
咲子「すぅ…すぅ…」スヤスヤ
何故コイツも保健室に？
陽乃「咲子ちゃんは日和に負けて気絶したんだよ」
八幡「…負けましたか」
陽乃「うん…まさか吹き飛ばすとは思わなかったよ。火野くんが後2秒意識を保っていたら私の負けだったね」

八幡「そうですか…」
咲子「…ハッ！」
咲子も起きたようだな。
咲子「知ってる天井ね」
俺と全く同じ事を言ったな。
八幡「起きたか…残念だったな」
咲子「そうね。でも、後悔はしてないわ。次は絶対勝つ！」
八幡「フッ、その意気だ」
陽乃（その雰囲気、羨ま…羨ましいっ！）

ＴＶでバトルデーの八幡の勝負を見た戸塚は、次の日２人に話しかけた。
戸塚「雪ノ下さんのお姉さんと八幡の勝負、見た!?」
川崎「うん…凄かった」
材木座「我もいつか勝負したいな！」

あ、貴女は！

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「眠い…」

八幡「大丈夫か？」

咲子「むり（？）」

言葉がおかしくなってるな。

八幡「…大丈夫じゃないな。ほれ、こっちで寝ていいぞ」ポンポン

咲子「膝枕～！」ギュッ

八幡「あの、咲子さん？それは膝枕じゃなくて抱きつくと言うんですが？」

咲子「頭痛い…」

…ん？何か酒臭いな。

八幡「…おいまさか、咲子お前酒飲んだ？」

咲子「うん…」

八幡「マジかよ…」

咲子「昨日先生と優香さんと居酒屋で飲んだんだけど、その時自分の飲み物と間違えて…酒をガブ飲みしたのよ…」

優香さんって確か先生の実質ライバルだよな？

…って

八幡「酒をガブ飲みだと!?」

咲子「酔うことはなかったけど、頭が痛い…」

八幡「大丈夫なのか？急性アルコール中毒になったりしてないか？」

咲子「それが何故か起きなかったのよね…」

何でだよ。

咲子「私、酒に強い？」

八幡「多分そうだろうな」

咲子「…また眠くなってきた。おやすみ…」

咲子はそのまま俺の膝枕で寝た。

ｓｉｄｅ桜木咲子
咲子「ここは…？」
???「あら、また会ったわね♪」
咲子「あ、貴女は」
???「まさかこんな早く再会するとはね」
咲子「……」
今気付いたけど、声が私に似てる…？
???「どうしたの？」
咲子「あ、いや、なんでもないです」
???「なるほど、声が似てるってね」
咲子「!?」
何故バレた!?
???「心が読めるのよ。…ま、偶にしか使わないけど」
咲子「貴女は誰なんですか!?」
???「……」じー
女性はじっと見てくる。
咲子「な、なんですか？」
???「一文字だけ教えるわ」
咲子「一文字？」
???「ええ、私の名前の頭文字を」
咲子「……」
???「……『ア』」
咲子「……!?」
やっぱり…！
ア??「あら、その顔は気付いたようね。じゃ、また会いましょ♪」
咲子「貴女は、まさかア…」
シュッ

ｓｉｄｅ火野八幡
咲子「…ハッ」
八幡「ん、目が覚めたか？」

咲子「ええ…（まさか、ね…）」
八幡「どうした？」
咲子「…酔いが覚めたわ」
八幡「そうか、それはよかった」
てか、咲子がガチで酔ったらどうなるんだろうな？
ｓｉｄｅ火野有美
……？
有美「私と同じような気配？」
…消えたわね。
有美「今のは一体？」
何だったのかしら？
有美「……」
…まあいいや。
有美「気の所為かもね」
私はもう年だし。
有美「…ハァ」
面倒くさい事にならなきゃいいけど。
…ね、平行世界の私？

今日？煮干しの日だろ？

ｓｉｄｅ火野八幡

咲子「♪～♪～」

八幡「おはよう、咲子。ヤケに機嫌がいいな」

何かあったのか？

咲子「ふふっ、なんでだと思う？」

八幡「…分からん。なんでだ？」

咲子「今日は何の日か分かる？」

２月１４日だから…

八幡「煮干しの日だな」

咲子「は？」

八幡「それ以外に考えられないんだが」

咲子「八幡…」

…やめろ、そんな悲しそうな目で見つめるな。

八幡「…はぁ。バレンタインだろ？」

今までの俺には無関係だったしな。

咲子「…ふふっ、その通り♪はい、私特製のチョコよ♪」スッハート型の箱を渡される。

八幡「おう、ありがとな。…早速食べていいか？」

咲子「どうぞ」

箱を開ける。

…凄いな、見た目が完全に店レベル。

こいつを食べるか。

パクッ

八幡「……こ、これは…！」

咲子「分かった？」

八幡「ああ、マッ缶だ！」

いい感じにチョコと混ざってやがる！

…しかもそれだけじゃない。さらに美味しく感じる。

八幡「マッ缶とチョコと…何だ？」

咲子「それはね…」
それは…？
咲子「愛情よ♪」ペロッ
咲子はテヘペロのポーズをした。
…超可愛い。
写真を撮らなくては（使命感）
八幡「……」スッ
カシャッ。
ん、いい感じに撮れたな。
八幡「ありがとな、咲子」ギュッ
咲子「どういたしまして♪」ギュッ
そしてしばらく抱き合ったとさ。

有美「……」
留美「おお…！」
その光景を影から有美とちょうどその時来ていた留美が見ていた。
有美「八幡、咲子…甘い、甘すぎるわ！」
留美「せ、先輩、凄い…！」
有美「…えっと、何が？」
留美「あんな堂々と『愛情よ♪』なんて言えるッ！そこに痺れる憧れるゥ！」
有美「アンタはいつからジョジョネタを知ったのかしら？…もうやってらんないわ！」ゴクゴク
有美はコーヒーを一気飲みした。
留美「あはは…」
てかこの２人はいつ仲良くなったのだろうか。

その後ゆっくりして、今は午後１０時ごろ。
俺は風呂から上がって部屋戻ってきたところだ。
戻ってきたのはいいんだが…
咲子「えへへ、八幡～♪」トロン

なんで咲子はこうなってるんだ？
酒で酔ってるワケでもなさそうだし…ん？
八幡「び……おいちょっと待て」
なんでココにこんなものが!?
咲子「私が、買ったのよ～」ガシッ
八幡「うおっ!?」ドサッ
抵抗できずにベッドに押し倒される。
咲子「もう、我慢できないわ…」ゴソゴソ
八幡「お、おいまさか…」
咲子「ヤるわよ♡」
八幡「ゑ、ちょ…」
アッーーーーーーーーーー!

対処はできている

ｓｉｄｅ火野八幡
八幡「……」カタカタ
咲子「……」カタカタ
『ハチマンの勝利！』
八幡「…よし」
咲子「そんな～」
俺は今ＭＵＬＡの物語の通信対戦で咲子に勝ったところだ。
八幡「頑張って裏ボスも倒したかいがあったな」
咲子「強すぎるわよ…」
八幡「一応千早達によると3部が出たら裏ボスを倒した後のチームでも苦戦することがあるらしいぞ」
咲子「ええ…」
八幡「ま、ちゃんとレベルアップをしてたら問題ないらしいが」
咲子「そ、そう」
メイ「…咲子さん、来ますよ」
咲子「…へぇ」
お、また例のシーンが見れそうだな。
コンコン
咲子「…どうぞ」
ガチャッ
陽乃「ひゃっはろ～♪」
陽乃さんが入ってきた。
メイ「今日は何の用ですか？」
陽乃「ちょっと邪魔しにきただけだよ」
咲子「そうですか。なら帰って下さい（ど直球）」
陽乃「え…じょ、冗談だよ～」
焦ってるな。
メイ「ホントに何しに来たんですか？」
陽乃「ちょっと火野くんと「八幡は渡しません」つれないな～」

咲子「いちいちめんどくさいんですよ。だから『魔王』って異名が「そんな事言わないでよ！もう謝るから！」…はぁ」
八幡「…陽乃さんがいじられる光景、いつ見ても面白いですね」
陽乃「それはどういう事かな、火野くん？」
八幡「そのままの意味ですよ？」
陽乃「……ううっ」
…ん？
陽乃「うわーん、後輩がいじめてくるぅぅぅ」
どう見ても嘘泣きじゃねーか。
咲子「そんなに構って欲しいんですか？」
陽乃「うわぁぁぁぁぁん」
…ダメだこりゃ。
八幡「メイ、陽乃さんを追い出してくれ」
メイ「了解です！」
陽乃「え、ちょっと!?ゴメンってー」
ガチャッ。
…ガチャッ
陽乃「流石にそれはひどくない!?」
八幡「キャラ崩壊してるアンタに言われたくない」メタい！
陽乃「半分君達のせいだけど!?」
俺達のせい？そんな原因作った覚えはないな。
八幡「気のせいじゃないですか？」
陽乃「うーん、そうかな…とはならないよ？」ガシッ
陽乃さんに腕を掴まれた。
咲子「陽乃さん？八幡から手を離して下さい」
咲子の目のハイライトがなくなってやがる。
陽乃「やーだ♪」ギュン
八幡「ちょっ!?」
陽乃さんに抱きつかれてしまった。
マズい、背中に柔らかいものを押し付けられてるぞ…！
咲子「陽乃さん？」ゴゴゴ…

咲子からドス黒いオーラが溢れてる。
あはは、陽乃さん終わったな（白目）
陽乃「ぎゅ～」
咲子「……」スタスタ
ガシッ
陽乃「え？」
咲子は陽乃さんの頭を掴む。
ギリギリ…
咲子「……」
陽乃「痛い痛い痛い！やめて、離すから！」パッ
八幡「…ハァ、やっと開放され…いっ」
咲子「八幡、アンタ胸を押し付けられて喜んでたでしょ？」
八幡「そ、そんな事ないぞ？」
咲子「……後で、搾り取るわ」
オ、オワタ…

5校衝突

ｓｉｄｅ火野八幡
咲子は今メイ達と特訓してるはずだ。
八幡「俺も取り掛からないとな」
一応技を2つ考えてる。
1つは避け技、もう1つは攻撃技だ。
八幡「両方習得しないとな」
5校衝突が始まるまでの数日で。
有美「八幡、どうしたの？」
八幡「今から新技を習得しようとしてる所だ」
有美「へぇ…私も手伝ってやるわよ」
八幡「…それは嬉しいな」
有美（あら、素直なのは珍しいわね）
ー数分後ー
八幡「まずは避け技の方を習得したいんだが…」
有美「どんな技なの？」
八幡「宙に浮いてる影の板に乗り、それを動かすことで攻撃を避ける技だ」
有美「へぇ。じゃあ適当に弾幕を飛ばすわよ？」
八幡「頼んだ」
母さんは技の構えを取る。
有美「炎天桜舞！」ＢＬＯＯＭ！
なるほど、威力は下げてあるのか。
八幡「…ハッ！」ギュン
スタッ
影の板を宙に浮かせ、その上に乗る。
八幡「エアライド！」ササッ！
シュッ、シュッ！
有美「…おお」
八幡「っし、できた」

有美「次は攻撃技の方ね。どんなわｚ（ｒｙ」
ー数秒後ー
八幡「…という感じだな」
有美「……」
八幡「どうかしたか？」
有美「えっと、そこまで再現する必要があるの？」
八幡「…あるぞ」
有美「なんで？」
八幡「咲子にしっかり再現してる技を見せたいからだ。適当にやったら怒られるしな」
有美「なるほどね…」ニヤニヤ
八幡「？」
有美「そうとう咲子が好きなのね」
八幡「…もちろんだ」
有美「そう。じゃ続けましょ」
八幡「ああ」
その後、俺は攻撃技の方も習得した。
ー5校衝突当日ー
『さあ、始まりました！5校衝突！』
『今年はなんと花称号が5人とも同い年でランク1位という奇跡です！どういう戦いを見せてくれるんでしょうか!?』
俺達は控室で準備をしていた。
咲子「ついに来たわね…」
メイ「ですね…！」
八幡「面倒くさい相手が居ませんように…」
ルマ「ま、どんな人が相手でも頑張るんだけどね！」
翔「絶対勝とうぜ！」
5人『おお！』
ー会場ー
咲子「さあ、行くわよ」
スタスタ

『来ました！3代目桜率いる桜木咲子選手率いる5人、「パーカーズ」です！』
『名前の通り確かに全員パーカーを着ていますね』
スタスタ
梅野が近付き、咲子に話しかけた。
風鈴「久しぶりね」
咲子「ええ…久しぶりね風鈴」
『次に来たのは6代目梅の梅野風鈴選手率いる「ノース」です！』
そして次々と各高専のチームが入ってきた。
「やあ、火野」
八幡「…葉山」
総武高専のチームにはなんと葉山がいた。
コイツそこに転校したのか。
葉山「俺は君との勝負を楽しみにしてるよ」
八幡「…そうか」
どうなるんだろうな、この戦い。

開幕の混戦

ｓｉｄｅ火野八幡

チーム同士が向き合ってそれぞれが構えを取る。

咲子「……」

風鈴「……」

一郎「……」

砂智子「……」

流「……」

『５校衝突……開幕ッ！』

ゴーン！

咲子「みんな先制攻撃よ！超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！

メイ「超晴天飛梅！」ＢＬＯＯＯＭ！

八幡「シャドースクリュー改！」ドッゴォン！

ルマ「Ｘブラスト！」ドガーン！

翔「ノーザンインパクト！」パキッ！

先手必勝だな。

一郎「超だと!?」

??「コレやばくね？」

風鈴「うそーん!?」

ドガァァァァァン！

エネルギーの衝突による大きな爆発が起きた。

咲子「ええ…」

風鈴「何で？」

一郎「俺らが偶々…」

流「一緒にいるんだ…？」

砂智子「私の仕業ですよ。強い人から倒したいので」

咲子「…へえ」

風鈴「いい考えね」

一郎「一度はこんな状況にして欲しかったんだよな～」

流「勝つのは俺だ！」
砂智子「さあ…どうでしょうね？」
５人はお互いを見て攻撃のタイミングを見る。
咲子「（恐らくだけど、私がマークされてるわね。だから…今よ！）
天使化！」ピカッ！
風鈴「ええっ!?」
流「もうできたのかよ!?」
♪かいりきベアーアンヘル
咲子「さあ、かかってきなさい！」
砂智子「言われなくてもやりますよ！絶岩なだれ！」シュッ
咲子「千手観音！」ガシィン！
砂智子「なっ…」
一郎「…面白え！絶ボルトタイヤ！」グルグル
咲子「ハァァ…魔王・ザ・ハンド！」ガシィン！
咲子は攻撃を連続で止める。
一郎「マジかよ…（コイツをマークして正解だったな）」
咲子「今度はこっちの番よ！真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
一郎「ぐわっ！」
風鈴「……（このままだったら私達は４人ともやられる。なら！）」コソッ
咲子「（あら、逃げてるわね）逃がすとでも？」シュッ
風鈴「なっ!?（速い!?）」
咲子「烈焼脚！」ドゴォ！
風鈴「ガハッ…！（この威力は!?桁違いでしょ!?）」
流「オラァ！激流の渦！」バッシャーン！
咲子「（絵奈も使ってる技ね）空中分解Ｇ２！」
シュゥゥゥ…
水は蒸発した。
流「はあ…？」
咲子「……やっぱ、私は別で戦うわ。じゃ」
バサッ

一郎「そ、それはないだろ!?」
咲子は完全に勝ち逃げ状態なのであった。

八幡「…咲子がいないな。どうする？」
翔「俺と八幡、メイとルマで２手に分かれないか？」
メイ「確かに、それがいいですね」
ルマ「じゃ、またね～」
スタスタ
八幡「咲子は何処だろうな…」

アホとバカって同じ意味じゃね？

ｓｉｄｅ火野八幡

八幡「咲子は何処だろうな…」

翔「アイツはカンタンにやられないし問題ないだろ。俺らは俺らで相手を倒せばいいだけ…！」

近くに気配を感じる。

八幡「誰か来るな」

翔「ああ…！」

…ズドッ！

白い塊が降ってきて、俺達の前に突き刺さる。

八幡「チョーク？」

??「巨大化！」

八幡「ッ！」サッ

ボワン！

翔「大きくなりやがった!?」

??「おらぁ！」シュルル！

植物のつるのようなものが飛んできた。

八幡「翔、ジャンプしろ！」

翔「うおっ!?」ピョン

??「クソッ、バレたか」

??「次に当てればいいだろ」

砂煙の中から2人現れた。

八幡「お前は…中村？」

竹尾「よう、八幡」

1人は雷落の親友である中村竹尾だった。

アホだったから覚えている。

翔「で、お前は？」

大助「大野大助だ。名前の通り能力は巨大化だッ！」

あ、さらっと能力言いやがったぞコイツ。

竹尾「おい、能力言うなよバカ！」

大助「アホに言われたくねーよ！」
俺から見ればお互い様だがな。
八幡「はやく始めた方がいいんじゃないか？」
竹尾「へっ、だな。うおっ！」メキッ
中村は木のハンマーを作る。
竹尾「大助頼む！」
大助「おう、巨大化！」
ボワン！
翔「マジかよ…」
ギャグマンガでよく見る１０トンハンマーのような大きさだった。
竹尾「ウッドハンマー！」シュッ！
八幡「…ッ！」
こいつ、この大きさでこの速さだと!?
大助「重さは変わらないんだよ！」
厄介だな…！
八幡「…斬れば問題ないか。狐月十字斬改！」ズバッ！
竹尾「うおっ!?」
ウッドハンマーを斬った。
竹尾「やべっ」
翔「オラァ！」ドゴッ！
竹尾「グッ！」ズサー
八幡「…？」
大野は何かを手に持っている。
大助「くらえ！チョーク！」ポイッ！
まさか、それを巨大化させるのか？
八幡「…面白い」
アレに乗ってみるか。
大助「巨大化！」
ポワン！
巨大なピンク色のチョークが飛んでくる。
…よし！

八幡「ハッ！」カキーン！
俺はそれを跳ね返し…
八幡「エアライドッ！」スタッ！
その上に乗った。
大助「龍玉のピンクホワイトホワイトかよ!?」
（ドラゴンボールの桃白白かよ!?）
その通り、それをマネしたかったんだよ！
八幡「…今だな。シャドースクリュー改！」ドッゴォン！
大助「ガハッ…！」バタン
大野はそのまま倒れた。
『総武高専5位、大野大助、脱落！』
アナウンスが鳴る。
八幡「…弱すぎね？」
まさかこんなにあっさり倒せるとは思わなかったな。
竹尾「大助!?クソッ、覚えてろよー！」ダダダダダー
竹尾は気絶した大野を背負って逃げた。
翔「……」
八幡「ま、1人倒したからいいだろ」
翔「だな」

真逆の対決①

ｓｉｄｅ火野八幡

八幡「翔、敵が近くにいるぞ」

翔「そうか。なら戦闘準備だな」

総武の1人を倒せたのはデカいが、油断はできないしな。

ザッ

葉山「火野と…西新か」

八幡「葉山と…もう1人いるな」

将太「霧野将太だ」

葉山「将太、俺は火野と戦いたい」

早速かよ。

将太「…分かった、なら俺は西新とやる」

翔「…いいだろう」

ダッ

2人は俺達から距離を取り、戦闘を始めた。

葉山「さあ…やろうか…！」スッ

剣か。

八幡「…来い！」

葉山「火炎斬！」ボォッ！

火属性か…

八幡「狐月十字斬改！」ズバッ！

キィン！

葉山「君は風属性だね」

八幡「だな…ストームゾーン！」ビュゥゥン！

吹き飛ばす！

葉山「ッ…ハッ！」ドスッ

葉山地面に剣を刺す。

八幡「…!?」

葉山「噴火！」

ドゴォ！

地面から炎が噴出した。
八幡「グッ…」
そう来るとは思わなかったな。
八幡「シャドースクリュー改！」ギュゥウン！
葉山「…フッ」ニヤリ
八幡「…？」
葉山は腕を構え…
葉山「ライトアロー」ヒュン！
バスッ！
光の矢を撃ってきた。
八幡「お前、能力持ちか…」
葉山「そうさ。君の能力の反対、〝光〟だね」
八幡「……」
よりにもよって、か。
八幡「面白い。…デビルバースト！」ギュオオオ！
葉山「白炎結界！」ピキッ！
火と光を混ぜて白炎か。だが甘いな。
…バリィン！
葉山「なっ…グハッ！」ドゴォ！
八幡「攻撃力は俺の方が上だ」
葉山「ははっ…そのようだ。じゃあコレはどうかな？」スッ
ギュンッ…！
地面が光る。
八幡「範囲広いなおい…！」
葉山「フィールド・オブ・ライト！」カッ！
八幡「エアライド…ッ！」
ドゴォオオ！
俺の視界は眩しい光に埋め尽くされた。
―――――――

私は天使化した状態で空を飛んでいた。すると…
ヒュン！
咲子「おっと」
突然矢が飛んできた。
砂智子「…逃しませんよ」
見てみると砂智子だった。…武器は弓矢だったのね、意外だわ。
咲子「アンタとは後で戦いたいのよ。邪魔しないでくれる？」
砂智子「天使化してるからって調子に乗らないで下さい」
咲子「それはゴメン」
砂智子「謝るなら降りてきて下さい」
咲子「…分かったわ」バサッ
砂智子「……」
咲子「…なーんてね？また後でね～！」ビューン！
高速でその場から離れた。
砂智子「え!?ま、待って下さーい！」タタッ
咲子（敵に待てと言われて待つバカはあまりいないわよ）
とりあえず味方を見つけたら助っ人に向かうわ。

真逆の対決②

ｓｉｄｅ火野八幡

シュウウウ…

八幡「危なかったな…」

葉山「ダメージは入ったようだね」

俺の視界が光に包まれた瞬間、俺は影を纏ってダメージを減らした。

…全身が少し痛いな。

八幡「今度は俺の番だな…」スッ

葉山「…？」

ピーッ！

指笛を吹く。すると…

ヒョコッ

影のペンギンが５体俺の後ろに現れた。

葉山「は…？」

八幡「皇帝ペンギン…Ｘ！」ドゴッ

ギュィィン…！

影のペンギンは黒いエネルギーを纏いながら突き進む。

葉山「ふざけてるのかい？白炎結界！」ピキッ！

ふざけてる？ハハッ…

八幡「俺は常に真面目だぞ？」

パリィン！

葉山「なっ!?…グワッ」ドスッ

ペンギンは影を凝縮してるんだ、威力はデビルバーストを超える。

八幡「か～ら～の～ッ！」シュッ

ドガッ！

葉山「ガッ!?（何だこの動きは!?）」

八幡「残虐殺！」

ザシュッ！

葉山「ガフッ…！」

ドゴォ！
空中で攻撃された葉山は地面に叩きつけられる。
八幡「…ふぅ」
葉山「ハァ、ハァ…強いな君は…」
八幡「だろうな」
葉山「来年は、君に…勝つ、よ…」
バタン
『総武高専４位、葉山隼人、脱落！』
来年か…
八幡「面倒くさい宣戦布告だな」

ｓｉｄｅ桜木咲子
咲子「…そろそろ降りた方がいいわね」バサッ
スタッ
咲子「天使化、解除！」
カッ！
翼と角がなくなり、目も元の状態に戻る。
咲子「やっぱり少し疲れるわね」
イナイレＧＯの化身アームドみたいなものね。
ザッ、ザッ
咲子「…あら」
風鈴「見つけたよ、咲子」
風鈴が目の前の方向から近づいてきた。
咲子「で、私を攻撃するのかしら、風鈴？」
風鈴「もちろん♪」
咲子「ならバイバイ！」ダッ
逃ーげるーのよー！
風鈴「うん、もちろん逃さないよ。風斬・鎌鼬改！」ズバァッ！
咲子「結界流し！」ガオン！
受け流して、と。
風鈴「ええ…」

咲子「あばよっ、とっつぁん！」ダダダダダー
風鈴「（煽って来るね…イライラする）…ハァッ！」プクッ
ボォォォッ!!
咲子「!?」
赤い変なのが飛んできた!?
咲子「千手観音！」ガシィン！
風鈴「あ、触ったね♪」
咲子「…なっ!?」
ジュワッ…
咲子「熱い!?」
風鈴「私の能力、〝味覚を操る能力〟だよ」
咲子「味覚？じゃあコレは、辛味…？」
風鈴「その通り！だから火じゃないのに燃えてる感覚だよ…」
咲子「クッ、厄介ね……」

―――

八幡と咲子、それぞれの戦い。
果たしてどうなるのか!?

咲子ｖｓ風鈴①

ｓｉｄｅ桜木咲子

咲子「クッ、厄介ね……（なんつって♪）」

私の能力があれば無害よ！

咲子「…解除！」

シュウウウ…

風鈴「あれ、消えた？」

咲子「ふふっ、もう効果はないわよ！」

風鈴「そう？なら次は…酸味！」バチッ！

咲子「今度は当たらないわ！結界流…し!?」バチッ！

触れてないのに感電してる!?なにこれ!?

風鈴「残念、酸味は距離があっても効くんだよ♪」

咲子「フッ、解除！」パッ

風鈴「またか…咲子の能力は解除？」

咲子「その通り」

風鈴「……ホントに？」じー

咲子「ホントよ？」

風鈴「そう…（解除か。咲子はそう思ってるみたいだね。能力の一部だと私は思うけど）次は苦味だよ…！」ドロッ

風鈴の手から濃い緑色のドロッとしたものが出てくる。色さえ変えれば完全にウ○コね。

（女子がウ○コ言うな！）

咲子「で、当てて来ないの？」

風鈴「うん、防御用だからね」

防御用？

咲子「…真フレイムウェイブ」グルグル

ドシュウウ！

風鈴「ハッ！」ドロッ

ジュッ…

火の衝撃波は苦味（と思われる物質）に触れると、物体を少し燃や

して消えてしまった。
咲子「へえ…」
かなり凄い防御力ね。
風鈴「これで一通り見せたかな。（もちちん甘味と必殺技意外は、ね）便利だけどこれを準備するのがね…」
咲子「準備？」
風鈴「カプサイシンとか食べる必要があるんだよ私!?」
咲子「ああ…」
確かにイーティングニコルで食べてたわね…
風鈴「さて…そろそろ真面目に戦おうよ」
そうね…
咲子「なら、先に…絶解除火桜！」ＢＬＯＯＭ！
風鈴「苦味！」ドロッ
咲子「……」ニヤリ
それが目的よ。
シュウウウ…
風鈴「…あ」
咲子「からの烈焼脚！」ドゴォ！
風鈴「ガハッ！…油断してたよ…」
咲子「戦闘中に油断は禁物よ？…超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！
風鈴「私だって！絶晴天飛梅！」ＢＬＯＯＭ！
咲子）））））（（（（風鈴
風鈴「グッ！」
咲子「真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
風鈴「…甘味！」ギュン！
咲子「回復した…？」
風鈴「それだけじゃないよ。…ハッ！」サッ！
咲子「速い!?」
火の衝撃波はあっさりかわされた。
風鈴「風斬・鎌鼬改！」ズバッ！
咲子「結界！」ピキッ！

キィン！
風鈴の攻撃は結界に当たる。
今の内に離れないｔ「させない、よっ！」
ドゴッ
咲子「ガハッ…」
風鈴「甘味は回復力とスピードを一時的に上げるんだ。…追撃だよっ！」シュッ！
咲子「…烈焼脚！」ドゴッ！
風鈴「よっ」サッ
咲子「真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
風鈴「ほっ」ピョン
咲子「クッ…」
私の攻撃は次々と避けられてしまう。
風鈴「風斬・鎌鼬改…！」シャッ！
咲子「まずい…！（腕に当たる！）」
当たらないで！
そう思った時だった。
フワッ…
風鈴「!?」シュッ
咲子「腕が…!?」
文字通り空に舞い散った。

空中分解

♪すりぃ―空中分解
ｓｉｄｅ桜木咲子
咲子「腕が…!?」
文字通り空に舞い散った。なのに…
咲子「痛く、ない…?」
よく見ると血も出てない。
咲子「次元斬り?」
でも、近くにメイは見当たらない。
風鈴「…やっぱりね」
咲子「?」
風鈴「咲子の能力、解除だけじゃないよ。…正確には、解除は能力の一部、かな?」
咲子「能力の、一部?」
風鈴「それ以外は分からないけどね〜?」
咲子「は、はぁ…」
で、コレ…
咲子「動かせるのかしら?」
フラフラ
腕はなりふり構わず踊りだした。
咲子「動いた!」
なら、この状態で…
咲子「超炎天桜舞!」ＢＬＯＯＯＭ!
風鈴「え、ちょっ!?」ズドッ
離されてる腕ともう片腕から攻撃を放つ。
咲子「ちゃんと機能するわね」
後は、どうやって戻すかね。
咲子「…戻れ!」
シュルル…
腕は戻ってきた。

咲子「くっつけて、と」
これでいいのかしら？
シュッ。
咲子「あ、戻った」
風鈴「（能力はかなり規格外だね…）…一旦停戦しよう」
咲子「停戦？」
まさか風鈴から言うとは思わなかったわ。
咲子「いいわよ。今の内に離れてなさい」
風鈴「そうするよ。じゃ！」ダッ
風鈴は走り出し、数秒後には見えなくなった。
咲子「これがホントの空中分解、なんつって♪」
…誰もいないから寂しいわね。
咲子「分裂ね…」
ドッキリを仕掛けてみよっと。
咲子「まずは腕を離して、と」
ポロッ
右腕は体から離れ、宙に浮く。
咲子「後は待つだけね」
ー1．３９６５分後ー
メイ「あ、咲子さん」
ルマ「やっと会えたね！」
咲子「ええ…」
２人は私の腕がない事に気付く。
メイ「どうしたんですかその腕!?」
ルマ「大丈夫!?」
咲子「ふふっ、大丈夫よ」
右腕を操ってメイの背中の後ろまで持っていく。そして…
トントン
メイ「？」クルッ
メイは振り向き…
メイ「キャァァァ!?腕が浮いてます!?」

めっちゃ驚いたわね。
咲子「ドッキリ大成功♪」スッ
カチッ
ルマ「えっ、どういう事？」
ルマ「えっ、どういう事？」
咲子「私の能力よ」
メイ「能力？解除じゃなかったんですか？」
咲子「風鈴に指摘されたのよ。解除や数分前目覚めたコレは能力の一部に過ぎないって」
ルマ「へえ。離せるのは腕だけじゃないよね？」
咲子「もちろん、首もオーケーよ。…この通り♪」ポロッ
メイ「ヒッ…それは流石に怖いですよ…」
咲子「うん、ゴメン」カチッ
ルマ「で、これからどうする？」
メイ「体力を温存させますか？」
咲子「いや、他のチームは最低1人脱落してるけど私達は1人も脱落してないわ。だから私達はココで相手を待つ」
体力を温存しておくわ。

再びバカキャラ

ｓｉｄｅ火野八幡

『花町５位、西新翔、脱落』

葉山を倒して数分後、そんな音声を聞いた。

ちなみにその数分前に羽合高専が全滅したらしい。

八幡「マジかよ…」

遠くから赤い台風が見えたんだが、アレは絶対咲子だよな…

そしてそのすぐ後に混合した嵐を見たから、アレはメイ達だな。

八幡「……」スッ

影の中に入る。

八幡（この状態で移動してもほぼ意味ないがな）

じゃあ何のために入ったのかって？

……ドゴォ！

八幡（飛んでくる攻撃を避けるためだ）

そろそろ出るか。

八幡「よっ」サッ

??「出たか！くらえ！」ポイッ

岩がこちらに向かって飛んできた。

八幡「……は？」スゥ…

避けなくても当たらなかったんだが。

??「チッ、当たらなかったか。お前花町のヤツだろ？」

八幡「そうだ。お前は…海原か」

高雄「いかにも！俺は岩戸高雄だ。お前は？」

八幡「火野八幡だ…」

高雄「火野…勝負を始めるとしよう！」

八幡（用意しとくか）スッ

影の塊を予め出しておく。

高雄「くらえ、岩投げ！」ガシッ

八幡「岩投げ？」

んなシンプルな…

高雄「うおらぁぁ！」
ポイポイポイッ！
名前の通りかよ!?
八幡「エアライド！」ギュン！
影をスケボーの形にし、浮かせてた状態で俺が乗る。
ん、コレマジで動きやすいな。
高雄「避けるなよ！ポ〇モンでは技の当て合いだろ!?」
八幡「ココはポ〇モンじゃねーぞ、バカかお前」
高雄「頭来たぜ！くらえ！」ゴォッ
八幡「……！」
今度は強い技か？
高雄「両手岩投げ！」ポイポイポイッ！
八幡「変わらねえのかよ！」ササッ
またエアライドで避けた。
…コイツ確実に3位以上だよな？アホなのか？それともポ〇モン形式が通用したのか？
…考えないでおくか。
八幡「…俺のターンだ」
高雄「おう、来い！」
こいつ…バカだな。
八幡「（どうせ受ける気満々だし、気にしないでおくか）…デビルバースト！」シャッ！
高雄「ガハッ!?」ドゴォ！
うわあ、モロにくらいやがった。
こんな感じの状況がしばらく続いた。
ー数分後ー
高雄「グフッ…」チーン
八幡「ちょっとやりすぎたか？」
『海原3位、岩戸高雄、脱落！』
岩戸に何度か攻撃を避けてもいいと忠告したが、挑発だと捉えた岩戸は直撃され続けた。

八幡「……行くか」
バカキャラっているもんだな。
スタスタ…

流「オラァ！」
風鈴「せいっ！」
ドガーン！
流「ふう、強くなったな風鈴！」
風鈴「そっちこそ強くなったね！」
流「口調も少し変わったか？」
風鈴「うん、ちょっとコレの方がしっくり来るからね」
流「そうか。…続けようぜ！」
風鈴「うん！」
２人『ハァァァァ！』
ドガーン！
そのころ、蓮と梅がぶつかっていた…
メイ「……」
メイが乱入しようとしてることを知らずに。

タッグバトル①

ｓｉｄｅ火野八幡
八幡「…ん？」
咲子「あ、八幡！」
咲子が走ってきた。
八幡「大丈夫か？」
咲子「ええ」
…別の気配を感じるな。
咲子「来るわよ」
八幡「ああ」
スタスタ
一郎「よう、お前ら」
竹尾「倒しに来たぞ！」
咲子「フッ、それはこっちのセリフよ！」
一郎「八幡、お前とは一度勝負したかったんだ！」
八幡「…そうか」
竹尾「バカキャラの座は渡さねえ！」
咲子「うん、いらないわよそんなもん」
一郎「……行くぞ！」
♪ＭＵＬＡストーリー―ステルス・ロック
咲子「行くわよ八幡！」
八幡「おう…ハァッ！」ドッ
影の塊を頭上に投げる。
咲子「とうっ！」ピョン
咲子はそれに近付き…
咲子「流星ブレード…Ｖ３！」ドゴッ！
火を纏った足で思いっきり蹴った。
シュウウウッ！
一郎「来たか…雷神グフィスト！」ドゴォ！
竹尾「ウッドハンマー！」ドガッ！

咲子))))))))（（（（（（（（（一郎
カウンターされた！
咲子「なっ…クッ、魔王・ザ・ハンドＧ２！」ガシィン！
カウンターされてしまったが、咲子がそれをしっかり止めた。
八幡「デビルバースト！でぇぇぇりやぁぁぁ！」シャッ！
一郎「絶サンダーラッシュ！」ビリィッ！
八幡))))))）（（（（（一郎
一郎「グッ、やるな…」
八幡「それにしてはダメージがほぼないみたいだが？」
一郎「バレたか…まあいい。今度はこっちの番だ！竹尾！」
竹尾「おう！グラスフィールド！」モサッ！
周りに草が生い茂る。
面白いな、草だけに。
咲子（竹尾ってマジのアホね）
一郎「息を合わせるぞ！」
竹尾「ああ！イナズマ…」
あの動き、見覚えが…
一郎「…１号！Ｖ３！」ビリィ！
八幡「エアライド！」ササッ
俺はそれを華麗（？）に避ける。
咲子は…
咲子「跳ね返す！真…ブレイズスクリュー！」ゴォォォッ！
咲子))))))）（（（（（（一郎
ブロック！
…威力が足りなかったか。
竹尾「凄え脚力だな、俺と一郎の攻撃を相殺するなんて…！」
咲子「褒めないで、照れるわ」
竹尾「褒めてねーよ、アホか！」
咲子「アホ？フフフ…アンタに言われたくないわねぇ！ハァァァァ！」ボォォォ…
シュゥゥゥ！

炎は生えてる草を燃やして威力をさらに上げる。
一郎「!!竹尾、逃げー」
咲子「もう遅い、脱出不可能よ!クリムゾンハリケーン!」
ゴオオオオオオオ!
赤い台風が2人に襲いかかる。
竹尾「わお…(白目)」
一郎「ッ、逃げるぞ竹尾!」ガシッ
竹尾「ぐえっ!?」
ダダダダダー
ー数分後ー
咲子「おお…凄いわね」
一郎「ハァ、ハァ…おかしいだろ…」
竹尾「赤い、台風が…追尾型なんてよぉ…」
2人『バケモンかお前!?』
咲子「……」
八幡「咲子…?」
咲子「私が化け物って…

…褒めないでよ、照れるじゃない！」ニコッ
２人『だから褒めてねえよ!?』
うん、咲子はやっぱり咲子だな。

タッグバトル②

♪ＭＵＬＡストーリー―ステルス・ロック
ｓｉｄｅ火野八幡
咲子「とりあえずおふざけはココまでにしましょ」
一郎「お、おう、そうだな…」
八幡（皇帝ペンギンＸを使った方がよさそうだな）
竹尾「うし！先制攻撃だ！つるのムチ！」パシィン！
咲子「完全にポ〇モンね。真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
咲子はつるを火で焼いた。
竹尾「チッ」
一郎「雷神グフィストォ！」ビリッ！
八幡「絶狐月十字斬！」ズバッ！
ドガーン！
エネルギーがぶつかり合い、爆発が起きる。
八幡「…咲子」
咲子「何？」
八幡「ちょっと試したい事がある」
咲子「…分かったわ」
２人『イナズマ１号…Ｖ３！』バチィッ！
電気の塊が飛んでくる。
八幡「ハァァ…ッ！」
ギュオオオ…
シュッ！
咲子「ファ!?」
地面から影でできた黒いペンギンを５体出す。
八幡「皇帝ペンギン…Ｘ！」ドゴォ！
八幡）））））））（（（（（（（（一郎
カウンター成功！
一郎「なっ!?…ぐわっ！」
竹尾「ぐふぅ!?」

雷落に1匹、中村に4匹当たる。
竹尾「なんで、俺の方に…」バタン
一郎「竹尾！」
『総武2位、中村竹尾、脱落！総武残り1人！』
八幡「グッ…」ヨロッ
咲子「八幡!?」
葉山と戦った時の負担が大きかったか…
（葉山がクソ広い範囲攻撃をやった時）
八幡「スマン、足を痛めてしまった」
咲子「血が出てるわよ…」
八幡「だな…」
咲子「悪魔化して治せば「自分は治せないんだよ」そんな…」
…こうするか。
八幡「コイツを渡しておく」スッ
影の塊を咲子に渡す。
咲子「ありがと、八幡」
八幡「ああ…降参だ…」
『花町3位、火野八幡、脱落！』
任せた、咲子…
ｓｉｄｅ桜木咲子
一郎「後は俺達だけか」
咲子「そうね…提案があるわ」
一郎「何だ？言ってみろ」
咲子「次の一撃で最後にしましょう」
一郎「……フッ、良いだろう！」
ギュオオオ！
一郎「うおおおお…！」
互いが力を高める。
咲子「ハァァァッ…！」
私は火を凝縮する。
一郎「…行くぞッ！」

咲子「ええ…！」
一郎「雷神グ……」ドッ！
咲子「天空……」バッ！
一郎「フィストオオオオ！」
咲子「落としいいいッ！」
シュウウウッ！
雷神の拳と惑星の雨がぶつかり合う。
一郎「うおおおおお！」
咲子「ハアアアアア！」
ドガアアアアアアン！
一郎「ぐおっ！」
咲子「うわっ！」
大きな爆発で私達は吹っ飛んだ。
生き残ったのは……。

一郎「ガハッ…」バタン
咲子「…私の勝ちね」

『総武1位、雷落一郎、脱落！総武、全員脱落！』

咲子「勝ったわよ、八幡」

ラスト①

ｓｉｄｅ桜木咲子

「ガハッ…」バタン

『輪花2位、北村透矢、脱落！輪花残り1人！』

メイ「ハァ、ハァ…」

咲子「倒せたわね…」

メイ「はい。でも…もう俺の体力が持ちません」

咲子「…お疲れ様。もう休んでて」

メイ「スミマセン咲子さん…降参します」

『花町2位、室見メイ、脱落！花町残り1人！』

……ザッ

風鈴「これで一対一だね」

咲子「そうね」

風鈴「お互い全力で行こうよ」

咲子「私が圧倒的に有利になるけど？」

風鈴「それでもいいよ。私は全力の咲子を倒したい！」

咲子「……フッ、いいわよ。天使化！」カッ！

シュゥゥゥ…

咲子「結界アンヘル！」

風鈴「おお…」

咲子「行くわよ！」

風鈴「うん！」

ドッ！

風鈴「真風斬・鎌鼬！」ズバッ！

咲子「烈焼脚！」ドゴォ！

風の刃と燃える脚がぶつかる。

…パワーは私が勝ってるけど。

咲子「ハァァ！」

風鈴「うわっ！」ドサッ

咲子「超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！

風鈴「絶晴天飛梅！」ＢＬＯＯＭ！
咲子))))))))（（（（（風鈴
風鈴「きゃぁっ！…強いね」
咲子「意外と戦えてるアンタもかなり強いよ思うわよ？…真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
風鈴「大嵐改！」ビュゥウン！
風鈴は火の衝撃波を吹き飛ばした。
咲子「……（風鈴から感じるこの力、まさか…）」
風鈴「甘味！」ギュン！
スピードアップと回復ね。
咲子「もう一回真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
風鈴「フッ！」サッ
ええ、避けてる…
風鈴「エアドライブ！」ドゴォ！
咲子「千手観音！」ガシィン！
ギギギッ…
咲子「このパワーは…！」
予想以上ね。
咲子「ハァァァァ！」
ガシガシガシッ！
風鈴「むぅ…」
ピタッ
咲子「…ふぅ」
腕５００本で止めれたわね。
風鈴「……（私は、勝ちたい）真風斬・鎌鼬！」ズバッ！
咲子「結界流しＶ２！」ガオン！
ギュルルルル！
強化した結界で受け流す。
咲子「ハァァ…ッ…真！ブレイズ…スクリュー！」
ゴォォォォ！
風鈴「私は、この戦いで、咲子に……

…勝ちたいッ!!」カッ！
ギュィィン…！
咲子「!?」
突然風鈴が光に包まれる。これは…
咲子「天使化…！」
今は昼…だから出夢先輩と同じパターンね。
咲子「凄いわね…」
シュゥゥゥ…
そして光は収まり、白い翼に青い角、空色の輪っかを持つ風鈴が出てきた。
風鈴「風の天使、ウィンダー！」
咲子「…来い！」
風鈴「へへっ、言われなくても！超…晴天飛梅！」ＢＬＯＯＯＭ！
シャッ！
咲子「結界流しＶ２…グッ！」ドスッ

圧倒的スピードで飛んできた弾幕を止めきれなかった。
風鈴「これで…対等に戦えるね！」
咲子「…ふふっ、そうね！」

ラスト②

♪かいりきベアーアンヘル＋すりぃ―空中分解

ｓｉｄｅ桜木咲子

風鈴「…真風斬・鎌鼬！」ズバッ！

とてつもないスピードで飛斬撃が飛んできた！

咲子「ッ!?空中分解Ｇ２！」ギュルルルル！

今のはヤバかったわ…

風鈴「おお、凄いね～」

咲子「じゃあこっちも！」ボッ

グルグル

咲子「お返しよ！真ブレイズスクリュー！」

ゴオオオオ！

風鈴「試してみるよ……ハァァッ！」

グォォォ！

咲子「!?」

アレは！

咲子「マジン!?」

しかもイナイレアレスの風神雷神の風神に見える…

風鈴「風神・ザ・ハンドォォォ！」

ガシィン！

マジンは突風を起こして私の真ブレイズスクリューを止めた。

咲子「（魔王・ザ・ハンドと同じぐらいの威力ね…）いつソレ覚えたの？」

風鈴「ん？咲子の…魔王・ザ・ハンドだっけ？ソレを真似してみたんだ」

咲子「ええ…」

風鈴の才能がヤバス。

咲子「次は当てるわ。超炎天桜舞！」ＢＬＯＯＯＭ！

風鈴「超晴天飛梅！」ＢＬＯＯＯＭ！

咲子）））））））（（（（（（風鈴

ブロックされた！
咲子「真フレイムウェイブ！」ドシュッ！
風鈴「大嵐改！」ビュゥゥン！
咲子))))))（（（（（風鈴
ブロックされた！
咲子「烈焼脚！」ドゴォ！
風鈴「エアドライブ！」ドゴッ！
咲子))))）（（（（風鈴
ブロックされた！
咲子「力は互角ね…」
風鈴「なら、体力勝負だね！真風斬・鎌鼬！」ズバッ！
咲子「結界流しＶ２！」ガオン！
咲子))))))）（（（（（（風鈴
ブロック！
咲子「真…ブレイズスクリュー！」ゴォォォォ！
風鈴「風神・ザ・ハンド！」ガシィッ！
あとはクリムゾンハリケーンだけね…
咲子（でもアレは燃費悪いから温存したいのよね…）
風鈴「エアドライブ！」ドッ！
…そうだ！
咲子「千手観音！」ガシィン！
風鈴「ぐえっ」
千手観音の手で風鈴を掴む。そして…
咲子「わっせろーい！」サッ
風鈴「グフッ！」ドゴォ！
風鈴を地面に思いっきり叩きつけた。
風鈴「その使い方は斬新だね…」
咲子「ふふっ…もっと行くわよ！」
風鈴「え」ガシッ
咲子「オラ！オラ！オラァ！」ドゴドゴドゴッ！
アベンジャーズの映画でハルクがロキにやったように風鈴を千手

観音で掴んで地面に叩きつけまくる。
風鈴「グハッ！グホッ！ガハッ！」
咲子「ハァ、ハァ…流石に操るのは体力を使うわね…」
風鈴「おえー、頭がフラフラする…」
……今ね。
咲子「ハァァァァァァ！」
ギュルルル…！
風鈴「!?」
咲子「クリムゾン…ハリケーン!!!」
ゴォォォォォォオ！
赤い台風が風鈴に襲いかかる。
風鈴「風神・ザ・ハンド…!?」シュッ
咲子「行っけーーー！」
風鈴「ぐわぁぁぁぁっ！」
ドガァァァァァン！
ー数分後ー
煙が晴れ…
風鈴「ハァ、ハァ…」
天使化が解かれボロボロの風鈴が出てきた。
咲子「まさか耐えたとはね…ハァ、ハァ…」
私もかなりエネルギーを使い、疲れている。
風鈴「ハハッ、もう、動けないよ…」バタン
咲子「それって…」
風鈴「うん…咲子の勝ちだよ。降参」
『輪花1位、梅野風鈴、脱落！輪花、全員脱落！よって…花町の勝利！』
咲子「…よし！」グッ
風鈴「おめでと、咲子」
咲子「アンタもいいライバル、よ…」
眠く、なってきた、わね…
バタン
ｓｉｄｅ火野八幡

八幡「…！」
咲子が梅野を倒した後、倒れた。
八幡「咲子！」ダッ
ガシッ
咲子「……」スヤスヤ
寝てるみたいだな。
八幡「俺達は勝ったんだな…」
…とっとと帰って休みたいな。